

平成 27 年度  
エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業  
【事例集】



平成 28 年 3 月



平成 27 年度  
エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業【事例集】  
目 次

|                                                   | 頁          |
|---------------------------------------------------|------------|
| 1. 本事例集について                                       | 1          |
| 2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について                        | 2          |
| 2-1. 目的                                           | 2          |
| 2-2. 実施方法                                         | 2          |
| 2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング                            | 5          |
| 3. アドバイザー派遣事業 平成 27 年度取組事例                        | 6          |
| 3-0. 取組事例インデックス                                   | 8          |
| 3-1. 白滝ジオパーク推進協議会（北海道紋別郡遠軽町）                      | 10         |
| 3-2. 雫石町観光商工課（岩手県岩手郡雫石町）                          | 17         |
| 3-3. 陸前高田市広田町生活体験推進協議会（岩手県陸前高田市）                  | 25         |
| 3-4. 檜原村産業環境課（東京都檜原村）                             | 33         |
| 3-5. 粟島観光協会（新潟県岩船郡粟島浦村）                           | 41         |
| 3-6. 一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会（富山県黒部市、入善町）               | 48         |
| 3-7. 南アルプス市 市民館芦安窓口サービスセンター（山梨県南アルプス市）            | 54         |
| 3-8. 原村観光連盟（長野県原村）                                | 61         |
| 3-9. 東近江市市民環境部森と水政策課（滋賀県東近江市）                     | 71         |
| 3-10. 川上村定住促進課（奈良県川上村）                            | 77         |
| 3-11. 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会（岡山県真庭市蒜山地域）              | 94         |
| 3-12. 宿毛商工会議所（高知県宿毛市）                             | 104        |
| 3-13. 知名町（鹿児島県大島郡知名町）                             | 113        |
| 3-14. 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会（鹿児島県奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町） | 121        |
| 3-15. 徳之島エコツアーガイド連絡協議会（鹿児島県大島郡徳之島町、天城町、伊仙町）       | 132        |
| 3-16. 南大東村教育委員会（沖縄県南大東村）                          | 139        |
| 4. アドバイザー派遣報告会                                    | 150        |
| 4-1. 開催概要                                         | 152        |
| 4-2. 議事概要                                         | 153        |
| <b>参考資料 エコツーリズム推進法と環境省の関連施策について</b>               | <b>164</b> |
| 1. エコツーリズムに取り組む地域への支援                             | 166        |
| 2. エコツーリズム推進法について                                 | 167        |

# 1. 本事例集について

---

地域の自然環境や歴史文化を対象として、その魅力を解説し、地域の観光に活かしながら、地域振興につなげていくエコツーリズムの推進に向けた取組が各地域で行われています。

平成 20 年 4 月にエコツーリズム推進法が施行され、環境省では本法に基づくエコツーリズム推進に向けた事業の一環として、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」を実施してきました。

本事業は、エコツーリズム取組地域の中で、外部アドバイザーの助言・指導によってより良い取組の方向性を探ろうと希望する地域を対象として、専門知識を有するアドバイザーを派遣し、各々の地域の個別の状況・課題に対して、個別に助言・指導を行うものであり、平成 27 年度は計 16 団体への派遣を行いました。

本事例集は、派遣地域とアドバイザーから提出頂いた報告レポートと、報告会の議事録を取りまとめたものです。また、巻末には新たにエコツーリズムに取り組む地域に参考としていただくためにエコツーリズムと環境省の関連施策の概要を付記しました。

これからエコツーリズムに取り組もうと考えている地域や、取組始めて間もない地域、すでに取組を実践しており改善を目指す地域等のみなさまに、取組を進める上での参考資料としてご活用いただければ幸いです。

平成 28 年 3 月  
環境省自然環境局国立公園課  
国立公園利用推進室

## 2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について

### 2-1. 目的

エコツーリズムに取り組むまたは取り組もうとする地域に対して、専門知識や取組経験を有するアドバイザーによる助言や指導を行うことで、地域毎の個別の状況や課題の解決に向けた支援を行うことを目的としています。

#### 【過去のアドバイザー派遣団体数】

|           | 17 年度 | 18 年度 | 20 年度 | 21 年度 | 22 年度 | 23 年度 | 24 年度 | 25 年度 | 26 年度 | 27 年度<br>(本年度) |
|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|----------------|
| 派遣<br>団体数 | 5 団体  | 6 団体  | 10 団体 | 10 団体 | 16 団体 | 12 団体 | 20 団体 | 18 団体 | 20 団体 | 16 団体          |

### 2-2. 実施方法

地域からの派遣申請を受け、予め就任を依頼しているアドバイザーの専門性等を勘案して派遣アドバイザーの選定（マッチング）を行った後、アドバイザーと地域が直接調整を行い、アドバイザーが現地に訪問して個別の指導・助言を行う形式とした。

#### (1) 派遣対象

エコツーリズム推進に取り組む地域のうち、下記のような団体を対象とした。

- ①エコツーリズムや、地域の観光振興を図る目的で組織された協議会
  - ②地域の観光協会、観光連盟、商工会議所、市町村の担当課など
  - ③広域圏で形成された①、②の団体

なお、個別の団体・企業による職員向けの研修・勉強会を目的とする場合は対象外とした他、申請主体又は関係団体として市町村の行政機関が参画していることを必須要件とした。また、「平成 27 年度生物多様性保全推進交付金（エコツーリズム地域活性化支援事業）」または「復興エコツーリズム推進モデル事業」にすでに採択されている場合の応募は不可とした。

#### (2) アドバイザー

申請地域の抱える地域課題の内容や取組の熟度に応じた助言・指導ができるように、予め幅広い分野のアドバイザーに就任を依頼した。

本年度は、新しく以下の方にアドバイザーに就任いただいた。

- ・小泉武栄氏（東京学芸大学名誉教授）
- ・渋谷晃太郎氏（岩手県立大学総合政策学部教授）
- ・水野恭一氏（株式会社 風の旅行社「風カルチャークラブ」企画開発室室長）
- ・山田桂一郎氏（J T I C. S W I S S 代表）
- ・横山隆一氏（公益財団法人日本自然保護協会(NACS-J) 参事）
- ・吉見精二氏（地域観光プロデュースセンター 代表）

【平成 27 年度エコツーリズム推進アドバイザー一覧（33 名）（五十音順・敬称略）】

| 所属名                   | 部署/役職/肩書            | 名前       |
|-----------------------|---------------------|----------|
| 北海道大学大学院              | 農学研究院 准教授           | 愛甲 哲也    |
| NP0 法人片品・山と森の学校       | 副代表・事務局             | 安類 智仁    |
| 有限会社オズ                | 代表取締役               | 江崎 貴久    |
| 鹿児島大学                 | 名誉教授                | 大木 公彦    |
| 株式会社生態計画研究所           | 早川事業所／南アルプス生態邑      | 大西 信正    |
| 群馬県みなかみ町              | まちづくり交流課エコパーク推進室 主査 | 小野 宏和    |
| 観光・地域づくり研究員           |                     | 緒川 弘孝    |
| 文教大学                  | 国際学部国際観光学科 教授       | 海津 ゆりえ   |
| 株式会社ジェイティービー          | 旅行事業本部 観光戦略統括部長     | 加藤 誠     |
| 公益財団法人日本環境教育フォーラム     | 理事長                 | 川嶋 直     |
| NPO 法人黒潮実感センター        | センター長/理事            | 神田 優     |
| 公益財団法人日本生態系協会         | 地域計画室長              | 城戸 基秀    |
| 一般社団法人信州いいやま観光局       | 事務局次長兼飯山駅観光交流センター所長 | 木村 宏     |
| 株式会社 ピッキオ             | マーケティングディレクター/取締役   | 楠部 真也    |
| 国際教養大学                | 国際連携部長              | 熊谷 嘉隆    |
| 東京学芸大学                | 名誉教授                | 小泉 武栄    |
| 岩手県立大学                | 総合施策学部 環境政策講座 教授    | 渋谷 晃太郎   |
| 東京大学大学院               | 農学生命科学研究科 教授        | 下村 彰男    |
| 環境カウンセラー              |                     | 鈴木 順一朗   |
| 株式会社ツーリズムワールド         | 代表取締役               | 高梨 洋一郎   |
| なべくら高原・森の家            | 支配人                 | 高野 賢一    |
| 株式会社南信州観光公社           | 代表取締役社長             | 高橋 充     |
| 公益財団法人日本交通公社          | 理事・観光文化研究部長         | 寺崎 竜雄    |
| NP0 法人霧多布湿原ナショナルトラスト  |                     | 阪野 真人    |
| 一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューロー | プロモーション事業部長・国際観光推進員 | ブラッド トウル |
| 北海道大学 観光学高等研究センター     | 特任教授                | 真板 昭夫    |
| 株式会社知床ネイチャーオフィス       | 代表取締役               | 松田 光輝    |
| 有限会社屋久島野外活動総合センター     | 代表取締役               | 松本 毅     |
| 株式会社 風の旅行社            | 風カルチャークラブ 海外・国内企画担当 | 水野 恭一    |
| JTIC. SWISS           | 代表                  | 山田 桂一郎   |
| 公益財団法人日本自然保護協会        | 参事                  | 横山 隆一    |
| 地域観光プロデュースセンター        | 代表取締役               | 吉見 精二    |
| アイ・エス・ケー合同会社          | 代表                  | 渡邊 法子    |

### (3) 募集・派遣スケジュール

平成 27 年 10 月 16 日から 12 月 18 日の約 2 か月間の応募期間を取って募集を行い（ホームページ、環境省関連団体のメールマガジン他を活用）、応募の順に随時、派遣実施地域を確定し、アドバイザーとのマッチングを行った。派遣は平成 28 年 1 月から 3 月にかけて実施した。

### (4) 派遣の条件等

派遣にあたっては、事業内で 25 地域・回（※ 1 回当たり 17 時間稼働を目安）を上限とし、アドバイザーの旅費（※現地までの交通費、現地での宿泊費※前後泊含む）及び謝金を事務局負担とした（※現地での移動費用、施設利用料、入場料、その他アドバイスの実施にあたって現地で発生した費用等は申請地域が負担）。

### (5) 審査・選定

上記への公募に対して、下記の審査基準で書類審査を行い、総合的視野（地域間のバランスや、資源性のバランス、その他環境省関連事業の実績等）も考慮した上で選定を行った。

#### 【審査基準】

- ・ 応募資格を満たしていること。
  - ⇒①エコツーリズムや、地域の観光振興を図る目的で組織された協議会
  - ②地域の観光協会、観光連盟、商工会議所、市町村の担当課など
  - ③広域圏で形成された①、②の団体
- ※個別の団体・企業による職員向けの研修・勉強会を目的とする場合は対象外。
- ※申請主体又は関係団体として市町村の行政機関が参画していることが必須。
- ※「平成 27 年度生物多様性保全推進交付金（エコツーリズム地域活性化支援事業）または「復興エコツーリズム推進モデル事業」に採択されている場合、応募は不可。
- ・ エコツーリズム等に取り組む目的が明確であること。
- ・ 多様な主体が連携しながらエコツーリズム等を持続的に取り組む体制がとれること。
- ・ 地域の現状や課題に対し、アドバイスを希望する内容が明確であること。
- ・ アドバイザーの助言や指導を取組に反映させる仕組みがあること。

## 2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング

派遣要請があった地域からの要望や地域の実情等を勘案し、アドバイザーの専門分野とのマッチングを行った。結果、派遣地域として16地域、アドバイザー15名（内2名は複数地域に派遣）を決定した。

### 【派遣地域とアドバイザーのマッチング結果】

| 番号 | 都道府県 | 市町村・地域                       | 申請団体                   | 派遣<br>アドバイザー       | 派遣日              |
|----|------|------------------------------|------------------------|--------------------|------------------|
| 1  | 北海道  | 紋別郡遠軽町                       | 白滝ジオパーク推進協議会           | 松田 光輝氏             | 1/29～31          |
| 2  | 岩手県  | 岩手郡雫石町                       | 雫石町観光商工課               | 渡邊 法子氏             | 2/17～19          |
| 3  | 岩手県  | 陸前高田市                        | 陸前高田市広田町生活体験推進協議会      | 高橋 充氏              | 2/24～26          |
| 4  | 東京都  | 檜原村                          | 檜原村産業環境課               | 真板 昭夫氏             | 1/26～28          |
| 5  | 新潟県  | 岩船郡粟島浦村                      | 粟島観光協会                 | 真板 昭夫氏             | 3/4～6            |
| 6  | 富山県  | 黒部市、入善町                      | 一般社団法人<br>立山黒部ジオパーク協会  | 楠部 真也氏             | 1/27～29          |
| 7  | 長野県  | 原村                           | 原村観光連盟                 | 山田 桂一郎氏            | 2/7、<br>2/27～28  |
| 8  | 山梨県  | 南アルプス市                       | 南アルプス市 市民部芦安窓口サービスセンター | 大西 信正氏             | 2/16             |
| 9  | 滋賀県  | 東近江市                         | 東近江市市民環境部森と水政策課        | 高梨 洋一郎氏<br>海津 ゆりえ氏 | 2/3～4<br>2/27    |
| 10 | 奈良県  | 川上村                          | 川上村定住促進課               | 松本 毅氏<br>江崎 貴久氏    | 1/20～21<br>2/1～2 |
| 11 | 岡山県  | 真庭市蒜山地域                      | 蒜山エコツアーリズム推進事業実行委員会    | 横山 隆一氏             | 2/29～3/2         |
| 12 | 高知県  | 宿毛市                          | 宿毛商工会議所                | 吉見 精二氏             | 1/20～22<br>2/4～6 |
| 13 | 鹿児島県 | 大島郡知名町                       | 知名町                    | 海津 ゆりえ氏            | 2/1～3            |
| 14 | 鹿児島県 | 奄美市、大和村、<br>宇検村、瀬戸内町、<br>龍郷町 | 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会      | 安類 智仁氏             | 2/3～5            |
| 15 | 鹿児島県 | 大島郡徳之島町、<br>天城町、伊仙町          | 徳之島エコツアーガイド連絡協議会       | 川嶋 直氏              | 2/17～19          |
| 16 | 沖縄県  | 南大東村                         | 南大東村教育委員会              | 真板 昭夫氏             | 2/18～21          |

### 3. アドバイザー派遣事業 平成 27 年度取組事例



### 3-0. 取組事例インデックス

#### (1) アドバイス分野別

| 団体名<br>(所在地)                                        | エコツーリズムに関する<br>意識啓発・資源の発掘 | ガイド人材の育成・<br>ガイド制度づくり | 利用と保全の仕組み<br>づくり | 環境教育の実施 | 地域が協働する進体制<br>づくり | エコツアーの商品化と<br>事業化 | フィールド環境の<br>整備・計画 | 環境省政策・事業の活用 | 頁   |
|-----------------------------------------------------|---------------------------|-----------------------|------------------|---------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------|-----|
| 白滝ジオパーク推進協議会<br>(北海道紋別郡遠軽町)                         | ●                         | ●                     |                  |         |                   | ●                 |                   |             | 10  |
| 雫石町観光商工課<br>(岩手県雫石町)                                | ●                         | ●                     |                  |         | ●                 |                   |                   |             | 17  |
| 陸前高田市広田町生活体験推進協議会<br>(岩手県陸前高田市)                     | ●                         |                       | ●                | ●       | ●                 |                   |                   |             | 25  |
| 檜原村産業環境課<br>(東京都檜原村)                                | ●                         |                       |                  |         |                   |                   |                   | ●           | 33  |
| 粟島観光協会<br>(新潟県岩船郡粟島浦村)                              | ●                         |                       |                  |         | ●                 | ●                 |                   |             | 41  |
| 一般社団法人立山黒部ジオパーク協会<br>(富山県黒部市、入善町)                   | ●                         | ●                     |                  |         | ●                 | ●                 |                   |             | 48  |
| 南アルプス市 市民部芦安窓口サービスセ<br>ンター (山梨県南アルプス市)              | ●                         |                       |                  |         | ●                 | ●                 |                   | ●           | 54  |
| 原村観光連盟<br>(長野県原村)                                   | ●                         | ●                     | ●                |         | ●                 | ●                 |                   | ●           | 61  |
| 東近江市市民環境部森と水政策課<br>(滋賀県東近江市)                        |                           | ●                     |                  |         | ●                 | ●                 |                   | ●           | 71  |
| 川上村定住促進課<br>(奈良県川上村)                                | ●                         |                       |                  |         | ●                 | ●                 |                   |             | 77  |
| 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会<br>(岡山県真庭市 蒜山地区)                 | ●                         | ●                     | ●                |         | ●                 | ●                 | ●                 |             | 94  |
| 宿毛商工会議所<br>(高知県宿毛市)                                 | ●                         |                       |                  |         |                   | ●                 |                   | ●           | 104 |
| 知名町役場<br>(鹿児島県大島郡知名町)                               | ●                         |                       |                  |         | ●                 |                   |                   |             | 113 |
| 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会<br>(鹿児島県奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内<br>町、龍郷町) |                           | ●                     | ●                | ●       |                   |                   |                   |             | 121 |
| 徳之島エコツアーガイド連絡協議会<br>(鹿児島県大島郡徳之島町、天城町、伊仙<br>町)       | ●                         |                       |                  |         | ●                 | ●                 |                   |             | 132 |
| 南大東村教育委員会<br>(沖縄県南大東村)                              | ●                         |                       |                  |         | ●                 | ●                 |                   | ●           | 139 |

## (2) 取組段階別

| 取組段階 | 申請団体                    | 頁   |
|------|-------------------------|-----|
| 胎動期  | 雫石町観光商工課                | 17  |
|      | 檜原村産業環境課                | 33  |
|      | 栗島観光協会                  | 41  |
|      | 一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会      | 48  |
|      | 南アルプス市 市民部 芦安窓口サービスセンター | 54  |
|      | 原村観光連盟                  | 61  |
|      | 東近江市市民環境部 森と水政策課        | 71  |
|      | 宿毛商工会議所                 | 104 |
| 始動期  | 陸前高田市広田町生活体験推進協議会       | 25  |
|      | 川上村定住促進課                | 77  |
|      | 知名町                     | 113 |
|      | 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会       | 121 |
|      | 徳之島エコツアーガイド連絡協議会        | 132 |
|      | 南大東村教育委員会               | 139 |
| 改善期  | 白滝ジオパーク推進協議会            | 10  |
|      | 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会      | 94  |

## (3) 地域別

| 取組状況    | 申請団体                    | 頁   |
|---------|-------------------------|-----|
| 北海道     | 白滝ジオパーク推進協議会            | 10  |
| 東北地方    | 雫石町観光商工課                | 17  |
|         | 陸前高田市広田町生活体験推進協議会       | 25  |
| 関東地方    | 檜原村産業環境課                | 33  |
| 北陸地方    | 栗島観光協会                  | 41  |
|         | 一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会      | 48  |
| 中部地方    | 南アルプス市 市民部 芦安窓口サービスセンター | 54  |
|         | 原村観光連盟                  | 61  |
| 近畿地方    | 東近江市市民環境部 森と水政策課        | 71  |
|         | 川上村定住促進課                | 77  |
| 中国地方    | 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会      | 94  |
| 四国地方    | 宿毛商工会議所                 | 104 |
| 九州・沖縄地方 | 知名町                     | 113 |
|         | 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会       | 121 |
|         | 徳之島エコツアーガイド連絡協議会        | 132 |
|         | 南大東村教育委員会               | 139 |

## 3-1. 白滝ジオパーク推進協議会（北海道紋別郡遠軽町）

### （1）アドバイザー派遣申請の背景

---

#### ●地域の概要

【人口】 21, 125 人

【面積】 1332. 45 k m<sup>2</sup>

【地勢】

遠軽町は、北海道の北東部、オホーツク管内のほぼ中央、内陸側に位置している。北は紋別市・滝上町、東は湧別町・佐呂間町、西は上川町、南は北見市に接しており、東西 47 km、南北 46 km にわたる緑豊かな地域となっている。町を貫流する湧別川上流側に位置し、支湧別川、武利川、丸瀬布川、瀬戸瀬川、生田原川、社名淵川のほか多数の支流が合流し、そこに広がる肥沃な大地は、開拓当初から農耕地に適した環境として繁栄してきた。

【気候・自然】

夏季は、梅雨や台風の影響を受けることがあまりなく、7～8月 は晴天の日が長く続く。また、最高気温が 30 度を超えることもあるが、8 月の平均気温は 20. 3 度（2008 年～2012 年）と比較的涼しく湿度も低いので、過ごしやすい気候である。冬季は、北西の季節風の影響などを受け、マイナス 20 度を下回ることも珍しくない。また、降雪量は遠軽町内の各地域によって大きく異なるが、本州日本海側の豪雪地帯に比べ、雪質は軽く降雪量も少ない。

#### ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

- ・ 遠軽町は、日本最大の黒曜石産地を擁し、旧石器時代にこの黒曜石を人類が石器として活用していたことを示す遺跡が多数発見されている。このような地域資源を活用し、地域振興を図るために平成 22 年に日本ジオパークの認定を受けている。
- ・ また、平成 17 年に 4 町村による合併をしており、北海道内で 4 番目に広い行政面積を有し、その約 9 割が森林という豊かな自然環境を有する。ジオパークとして、この自然環境を十分活用することが求められている。
- ・ しかしながら、観光産業が未発達の本地域においては、自然遺産や歴史遺産を生かしたツーリズムを展開する下地が不十分で、ジオツーリズムの推進基盤とそのためのガイド養成が課題となっている。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|             |                                                                                     |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 日 時         | 平成 28 年 1 月 29 日（金）～平成 28 年 1 月 31 日（日）                                             |
| 場 所         | 北海道紋別郡遠軽町                                                                           |
| ア ド バ イ ザ ー | 株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長 松田 光輝氏                                                      |
| 参 加 者       | 計 97 名                                                                              |
| スケジュール・方法   | <p>【1 日目】視察、意見交換会</p> <p>【2 日目】視察、山彦の滝ナイトツアー</p> <p>【3 日目】エコ・ジオツーリズム推進交換会、意見交換会</p> |

## (3) アドバイスの内容（講義等）

アドバイスは、最終日に講演会及び意見交換会を開催し、広く住民に共有できる形とした。講演会には 63 人参加、意見交換会には 23 人が参加した。

講演会は、えんがる町観光協会と当協議会の 2 者による主催とし、松田氏に加え、札幌市で体験観光を中心とした旅行商品を取り扱う（株）北海道宝島旅行社代表取締役 鈴木宏一郎氏も招き、複眼的にエコ・ジオツーリズムの推進について考える内容とした。

松田氏の講演要旨については、次のとおり。

- ・ 遠軽町については、観光のイメージがなかったが、現地を見たところ、自然も文化も十分誇れる。それに人材も非常に多い町だなという印象。ただ、それをつなげる民間のキーパーソンが必要。非常に資源性が高い地域であるが、それを安売りしすぎている。自信を持ってもらいたい。
- ・ 遠軽町の将来を思い描いたことがあるか。シビアにいうと厳しい。今から取り組まないと手遅れになる。遠軽町の人口推計では 2040 年に 11,874 人と推計している。年齢構成も高齢化が進む、こうなると今受けている行政や民間のサービスが受けられなくなる。このことを考えると外からの収入を得る必要がある。特に外国人観光客は増えていると言われるが、道東はまだ恩恵が少ない。
- ・ 北海道の観光は自然と食が魅力だが、遠軽町には黒曜石という他にはない歴史・文化がある。石器を得たことによって人類が飛躍的に発展するきっかけになった。動物を獲る能力が上がった。そういう特異な歴史をこの地は持っている。
- ・ 世界的に見ると、日本の自然は非常に高い価値がある。例えば、流氷、動物の種類数、山地、雪など実は希少なものが身近にある地域である。世界に誇れるものがたくさんある地域に住んでいる。
- ・ 遠軽町ではヒグマを将来的に観光資源にできる可能性がある。アラスカのマクニール川ではクマを 1 m のところで見せ、1 年以上予約が埋まっている。
- ・ 知床ネイチャーオフィスのガイド事業について、会社を株式会社としているのはこだわりがある。NPO でやると好きでやっているとされる。自然保護をしながら地域で食べていけることを示したかった。年間 2 万人以上案内している。ただし、ガイドを利用する人は 120 万人の観光客のうち 5 万人ほど。まだガイド事業にはのびしろがある。
- ・ 氷結した山彦の滝ナイトツアーは、本州や海外のお客さんを十分呼べる。あれだけの氷を見ることはなかなかできない。アクセスも容易。夜のプログラムは宿泊につながり、お金が落ちやすいので重要。

- ・ 遠軽町の資源は、マニアックなお客さんの方が受けがいいと思う。理由はいくつかあるが、一つ言うと静寂を独占的に楽しむこと。
- ・ キャットスキーも条件を聞いた限り、破格の安さだと感じた。ただし、そのための受け入れ施設やサービスの充実が必要。
- ・ 知床だから・・・と思われるかもしれないが、知床も最初からこんなにガイドがいたわけではない。
- ・ ガイドツアーの価格については、後からは上げにくいので最初に勇気をもって値付けをしていく方がよい。
- ・ 知床でもガイド行為にお金をもらうことに対し、地元の抵抗が非常に強くあり苦労した。4～5年かかってようやく認められた。行政主導の枠組みでは限界があり、会社を立ち上げた。簡単にはいれないが、現在は理解が広がってきているので、遠軽町にとってもチャンスがある。
- ・ ガイド事業はサービス産業であるとともに、情報産業でもある。テレビ・ラジオの取材協力が仕事になっている。テレビ局はコンテンツが作れないと商売ができない。情報を無料で提供するのは間違い。良質な情報を持っていればそれが産業になる。
- ・ 子供たちの教育について、子供たちは将来の広告塔。一昔前は地域の良さを教えないで、子供を都会に出していた。今、そのツケがきている。知床では、中学生に「世界自然体験学習」、高校生を対象に「知床概論」という教育を行政と一緒に進めている。長い目でみると大事なこと。
- ・ 土産物についても、ガイドの一言が売れ行きを左右する。ガイドが勧めたものをお客さんは大体買っていく。ガイド事業と地元の他の産業の結びつきが生まれている。
- ・ 知床観光の仕組みで、認定を受けているガイドが一度に10名以内しか連れて行けない場所がある。時間ごと人数制限のルールもある。このことで、静寂を得られる。これは、山彦の滝のツアーにも応用できる。大人数のツアーから時間をずらして、ゆっくり、静かに見せる。ホットワインなどの提供をして通常の3～4倍の価格をとってもよい。
- ・ 知床には、行政機関と民間で作る会議がある。民間の事業者でも合意形成をすることで、利用できない場所を自然環境を破壊しない範囲で利用ルールを作ることができるような場を2～3年かけて作った。行政が一方的に決めていたことを、民間で決めることができる。役所が逃げられない仕組みになっている。
- ・ この地域は、見た目にはぱっとわかりやすい資源は限られている。しかし、きちんと見るとものすごくいいものがたくさんある。それを理解してもらうためにはガイドが必要。ガイドがいることで、リピーターの獲得率が高くなる。リピーターの獲得は大事。
- ・ 地域の認知度を上げる必要がある。知名度だけでなく、ここはどういうところかを知ってもらうのが認知度。これを上げるのもガイドの果たす役割が重要。
- ・ ガイドをするには、他の地域を知り、比較優位性を知ることが必要。観光客の視点で自分の地域を見れるようにすること。
- ・ 知床ではリピーターだけを対象とするツアーもやっている。メリットは、広告費がかからない。安くする必要がない。リピーターは安いから来るわけではない。安くはしないが、サービス内容は上げている。シーズンオフ対策にもなる。リピーターは、シーズンオフの方が楽しむことを分かっている。春のゴールデンウィーク明けに春と冬山を同時に楽しむツアーを組んでいる。
- ・ 自然体験ツアーが成功するためには、工夫をする必要がある。日本では海外のやりかたをそのままやっても難しい。
- ・ 「地域活性化」と「地域振興」は同じ意味だが、意図的に使い分けている。「地域活性化」～住民

がいきいきと活動している。「地域振興」～それが経済に結びついている。これを分けて議論しなくてはならない。儲けることと、地元の人が楽しむことを分けて考える必要がある。山彦の滝のツアーでこれを感じた。地元の人が多く参加している。これはとてもいいイベントだが、お金を取ってやると考えると、もう少し違うやり方が必要になる。

#### 【記録写真】



#### 白滝ジオパーク交流センター視察

当ジオパークで実施しているガイドツアーについて、これまでの実績と課題について説明を行った。「黒曜石」という資源は、知名度は高くないが、一定の客層には需要があるのではないかと。さらに、ツアーの料金設定や海外も視野に入れたターゲット設定についてアドバイスをいただいた。



#### 山彦の滝ナイトツアー視察

町が実施している「山彦の滝ナイトツアー」に実際に参加いただいた。出発地点からガイドがいた方が良い点やライティングの工夫、雪道を歩かせる上での安全確保のほか、同じ目的地の場合でも2コースを設定し、時間と人数を分けることで、高単価の商品開発の可能性があることをアドバイスいただいた。



#### エコツーリズム推進講演会

地域の将来像を見据えた上で、今何をしなければならないかという視点からエコツーリズムの重要性が語られた。その上で当地域の自然の資源性の高さについて改めて認識することができたが、同時に、よりガイドの存在が重要であること、商品化に向けて周辺地域と連携を図りながら官民一体となって取り組む必要があることを再認識できた。



#### 意見交換会

講演会終了後に参加者とともに意見交換会を実施した。意見交換会では、雇用につながるような料金設定を行い、いかにボランティアガイドから脱却を図るかが議論の中心であった。この課題解決に向け、今後このような機会を活用し、松田氏をはじめ先達の方々からアドバイスを受けながら活動を進めていきたいということで会を終了した。

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・ 地域の自然の観光資源の価値の高さを感じることができた。
- ・ 地域では、民間、行政ともに様々な取組を行っているが、地域の人口減少などの将来を見据えると、これをうまく活用して産業（雇用）に結びつける必要があることを考えるきっかけとなった。
- ・ このためには、ガイドの存在が不可欠であり、ガイドの育成を図ること、体験観光の適正な商品化が課題であることが浮かび上がった。

### 2) 今後、期待される効果

- ・ 観光地としてのビジネスモデルを持たない当地域が、“稼ぐ”ために観光を目指すことを関係者が共有する機会となった。
- ・ ジオパークにおいては、今年、五年間のアクションプランを含むマスタープランを策定する予定であり、ジオガイド育成の取組に対する理解が広まった。
- ・ “稼ぐ”ための組織づくりについても、観光協会の法人化、高規格道路延伸に伴う新しい道の駅建設というタイミングの中で、今まで以上に考慮されることが期待される。

### 3) 今後の取り組み

- ・ 白滝ジオパーク推進協議会においては、登録制度や育成カリキュラムの整備によりガイド養成を推進する。
- ・ 町内の資源をコーディネートし、商品化するために観光協会などと連携し、仕組みづくりを推進する。

## (5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

- ・ ターゲット設定により、内容や値付けに工夫が必要で、一つの資源でもいくつかの見せ方が考えられること。
- ・ 地域の良いところをあれもこれもと入れると逆効果になることがあり、利用者本位で商品作りをしなければならないこと。
- ・ 自然、文化、食、気候の4要素において、日本は世界的に優位にあり、特に当地域はマニアックながら質の高い資源が多く、外国人観光客がターゲットになりうること。
- ・ 地域活性化（地域の人が生き生き活動する）と地域振興（それが経済と結びつく）を分けて議論する必要があること。

### 2) その他感想

- ・ 元来、観光産業がほとんどない当地域であるが、確実に進行している人口減少、高齢化という問題を前に、観光で稼ぐということへの意識を、観光協会をはじめとする地域社会と共有でき、意義のある機会となった。
- ・ 松田氏の助言から常に利用者目線でツアー内容を組み立て、ガイド実践の中で技術を洗練させていることを感じられた。料金を取ることで、更にレベルアップをさせられることを考えさせられた。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

松田 光輝氏 (株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

当地域は行政機関のバックアップを受け、複数の団体がエコツーリズム・ジオツーリズムを展開している。

NPO 法人ジオパークサポートセンターは、旧石器時代の鑛に用いられていた黒曜石を資源としたツアーなどを開催。丸瀬布昆虫生態館は、子供向けのプログラムなどを実施。

「山彦の滝ツアー」は地域ぐるみで大勢の方の協力のもと日中のみならず、夜のツアーも行っている。

民間主導ではなく行政機関のバックアップのもとに行われているが、エコツーリズムの下地は整っている地域である。

#### ②課題

- ・ 当地域は遠軽町、旧丸瀬布町、旧生田原町、旧白滝村の4町村が合併した町である。それぞれの地域に特色があり多様性の強みはあるが、地域間連携体制の構築が十分ではないと思われる。
- ・ 宿泊施設の選択肢とキャパが少ないため、滞在型観光を行う上で宿泊施設の整備も求められる。
- ・ 税金を投与してのツアーが多く、必要経費相当の料金設定しかできず、収益構造が確立していない。
- ・ 後継者不足（人口減少に伴う）であるとともに、担当者個人の頑張りによる面が大きく、人材確保と養成も必要である。
- ・ 黒曜石の埋蔵量などは世界有数ではあるが、ビジュアル的にインパクトに欠ける面があり、今後のブランディング方法に工夫が必要である。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

- ・ 豊富な黒曜石
- ・ 山彦の滝
- ・ バックカントリースキー
- ・ 山林に囲まれた静かなキャンプ場など

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・ 当地域の黒曜石は北海道では数少ない歴史・文化財であり、世界でも有数の埋蔵量を誇る。旧石器時代の鏃に用いられた黒曜石は、人と自然の関わりを伝える上で有効な資源であるとともに、海外からのお客様にも活用できる資源でもある。
- ・ 豊かな自然に囲まれのんびりとできる空間は、滞在型観光への誘導が可能である。キャンプ場周辺はヒグマが生息する自然度を有し、すぐれた自然環境だと言える。
- ・ 営業休止中のスキー場のパウダースノーや、自衛隊駐屯地のあまり人が立入らない自然も他地域にはない、魅力的なすぐれた資源である。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

行政主導のため経済的な波及効果が限定的であり、中長期的には民間主導でなければ先細りが懸念される。民間主導で取り組んでもらうためには、当地域の将来像を見据えた上で、エコツーリズム（ジオツーリズム）の方向性を位置づける必要性があった。当地域は、近い将来現在の人口が半分ほどに減少すると予想され、新たな事業（雇用）の創出が地域振興に欠かせないことと、現存する資源の有効性や活用方法についてのアドバイスを中心に行った。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

エコツーリズム（及びジオツーリズム）の推進に向けての基本方針や方向性（遠軽町における産業としての位置づけ）について、議論をすべき段階である。行政主導から民間主導に、エコツーリズムの担い手が交代する段階を得てから、推進体制等の検討に期待したい地域である。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

エコツーリズム（ジオツーリズム）を行うための有効な資源が存在する地域であるとともに、やる気のある有能な行政担当者があり、エコツーリズム（ジオツーリズム）を実施するための下地や推進体制の基礎は整っていると言えます。

地域振興につなげるためには民間主導で行い、利益の得る収益構造を構築する必要があります。人材養成を行いつつ民間事業者の育成に努めれば、エコツーリズム（ジオツーリズム）を観光産業に成長させることが可能な地域だと思います。

また、農業・林業との連携も視野に入れつつ、新たな観光資源の掘り起こしや既存の資源に磨きをかけることにより、富裕層や外国人観光客も呼び込める地域でもあると思います。

このままでは地域の体力は将来失われてしまいます。今、活躍している人材を核に、あらたな人材育成にも励んで下さい。雇用創出が地域の将来を左右します。

## 3-2. 雫石町観光商工課（岩手県岩手郡雫石町）

### （1）アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 17,352 人（平成 27 年 12 月 31 日現在）

【面積】 608.82 k m<sup>2</sup>

【地勢】

北東北地方の拠点都市である盛岡市の西方約 16km に位置している。東は、滝沢市、盛岡市に接続し、西は奥羽山系の山々を境に仙北市（秋田県）に接し、南は矢巾町紫波町、西和賀町及び花巻市とそれぞれ連山を境界に、北は岩手山鬼ヶ城稜線を境として八幡平市に接している。その広がりはおおよそ東西 24km、南北 40km と広大であり、奥羽山系の山脈に囲まれた扇状の盆地をかたどっている。秀峰岩手山をはじめ 1,000m 以上の山が連なり、これら山岳や高原が総面積の大部分を占めており、標高 300m 以上が総面積の約 80% に達している。また、山麓部には広大な傾斜地が開かれ、天然林、牧野、田畑がのどかな田園風景をつくりだし、田、畑の耕地は、葛根田川、雫石川、南川の三河川流域に展開している。

【気候、自然】

盆地の影響により、平成 17 年から 26 年までの 10 年間の年平均気温が 9.6℃ と低く、最高気温は 35.6℃、最低気温は -20.0℃ と寒暖の差が激しい典型的な内陸性の気候で、気候区分では冷温帯に属します。年間降水量は約 1,600mm で、積雪量は最深積雪の平均で 72cm となっている。

【観光】

岩手山や駒ヶ岳などの美しい峰々に囲まれ、泉質も効能も全く違ういで湯が 10 か所あり、小岩井農場をはじめ、スキー場やゴルフ場も点在し、四季を通じて雄大な自然の中で遊ぶことができる。

【地域資源の概要】

#### 1) 小岩井農場

日本最大級の民間総合農場。小岩井農場の歴史・文化や、現在の農林畜産のこだわり等を紹介するツアー、独特の自然環境を活用した自然観察会などを行っている。第 10 回エコツーリズム大賞を受賞するなど、当町において先進的なエコツーリズムの取り組みを進めている。

#### 2) 南八幡平エリア

広く十和田八幡平国立公園に含まれる森林地帯や湖沼、山岳、渓谷を含む大自然域。日本百名山のひとつに選ばれている岩手山や、花の百名山のひとつに選ばれている秋田駒ヶ岳など、日本を代表する名峰が連なる山岳高原域で、高山植物の宝庫であり、深い渓谷や高層湿原、火口湖などの優れた自然がみられるほか、エリア内には網張温泉、滝ノ上温泉、国見温泉などの名湯、秘湯が多く見られることから、多くの登山客やハイカーが訪れる人気の山岳エリアになっている。南八幡平エリアの中央部には、白神山地ブナ林（世界自然遺産）に匹敵する規模と自然度で、「葛根田ブナ原生林」と呼ばれる広大な森林渓谷域が広がっている。

#### ●アドバイザー派遣の背景・これまでの取り組み

エコツーリズムの推進は、南八幡平エリアと呼ばれる山岳高原域とその周辺の農村域、牧野域を対象地域において行われてきた。なかでも小岩井農場は、農場内でのエコツアーを開催し、それがエコツーリズム大賞を受賞するなどエコツーリズムの先進地ともいえる場所である。また、町内には第 2 種の

旅行業を取得している（一社）しずくいし観光協会があり、エコツーリズムを推進する環境は整いつつある。

これまで当町のNPO法人しずくいし・いきいき暮らしネットワークが主体となり、アドバイザー派遣を2回受け、当町を含めた南八幡平地域におけるエコツーリズムについてアドバイスをいただいた。ただし、町が一体となった推進体制がないほか、人材が不足しているため、全町的なエコツーリズムの推進ができておらず、その効果が限定的となっている。町内各団体とも急激な人員増加が見込めない中、エコツーリズムに取り組む体制についてご指導いただくべく、今回エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業へ申請した。

## （2）アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-----------|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成28年2月17日（水）～平成28年2月19日（金）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 場         | 所 | 岩手県岩手郡雫石町                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| ア         | ド | アイ・エス・ケー合同会社 代表 渡邊 法子氏                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| バ         |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| イ         |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| ザ         |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| ー         |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 参         | 加 | 者                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|           |   | <p>&lt;視察&gt;</p> <p>鶯宿温泉観光協会、北日本山岳ガイド協会、小岩井農牧株式会社、網張ビジターセンター、（一社）しずくいし観光協会</p> <p>&lt;勉強会&gt;</p> <p>（一社）しずくいし観光協会、鶯宿温泉観光協会、雫石町グリーン・ツーリズム推進協議会、小岩井農牧株式会社、網張ビジターセンター、NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、自然保護管理員</p> <p>&lt;アドバイス&gt;</p> <p>雫石町グリーン・ツーリズム推進協議会、小岩井農牧株式会社、網張ビジターセンター、NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、自然保護管理員</p> <p>&lt;意見交換会&gt;</p> <p>雫石町議会議員、雫石町グリーン・ツーリズム推進協議会、小岩井農牧株式会社、網張ビジターセンター、NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、自然保護管理員</p> |
| スケジュール・方法 |   | <p>【1日目】（アドバイザー移動）</p> <p>【2日目】町内視察、面談、スノーシューウォーキング体験</p> <p>【3日目】勉強会、アドバイス、意見交換会</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

#### 1) 視察箇所

##### ① 鶯宿温泉観光協会（面談）（鶯宿温泉観光協会事務局長、北東北山岳ガイド協会事務局長）

「鶯宿地区の現状について」

- ・ 宿泊客向けの体験メニューは、各施設がほとんどサービスでやっている状況。
- ・ 各施設への宿泊客向けの体験メニューの斡旋を行う仕組みがない。
- ・ 大規模なレジャー施設が老朽化等の影響により数年前に閉鎖し、その後中小の宿泊施設の宿泊客数に影響がでている。

##### 【アドバイス】

- ・ 宿泊施設側が体験メニューをサービスでやることと思いついていないのは問題。提供体制をつくりながら、施設側の協力を得ることが重要。
- ・ 鶯宿地区は街歩きが楽しい風景なのに、それができていない。街歩きのガイドを含めたガイドの養成について地域で一番発言力のある人に理解してもらうべき。
- ・ 今回鶯宿温泉の宿に宿泊し、台湾から来た客と話をしたが、ただ泊まって食べるだけの状態で、次の日はすぐ仙台に移動する日程だった。インバウンド客もただ素通りしている。1～2時間くらいで体験できることがあれば、この地域への滞在時間の増加につながる。

「山岳ガイドの現状について」

山岳ガイドの高齢化が進んでいる。登山者も高齢者が多くなり、身近な山（里山）と街場とのミックスをしたい。

収益を得られるような仕組みになっていない。

町が一体となった推進体制がないため、ガイド等は独自の体制で行っている。

##### 【アドバイス】

登山も教室を開きながら行ったほうが良い。ガイドを頼む客はお金を払うのに抵抗がない。



##### ② 小岩井農場（面談、スノーシューウォーク体験）（小岩井農牧株式会社）

「小岩井農場でのエコツアーの体制について（説明）」

平成 23 年頃、口蹄疫が流行した問題から、安全、安心なものを提供する体制について解説を始めた。

現在は農場内の歴史や現在の環境関連事業を学ぶバスツアーのほか、自然散策や観察会などの自然体験ツアー、小岩井農場をじっくり学ぶプレミアムツアーなどを行っている。

旅行業は平成 23～24 年頃、バスツアーを行うため取得。

「スノーシューウォーク」

スノーシューを装着し、地元に住んでいる人でも気づかないような自然の環境について説明を聞きながら散策。

ガイドの佐藤氏はもともと一般の客として参加していたが、後に土日のみのボランティアガイドを務め、その後小岩井農場の社員となりガイドを行っている。



### ③網張ビジターセンター

「網張ビジターセンターについて（説明）」（面談：網張ビジターセンター）

網張ビジターセンタースタッフは運営協議会職員で、年間の行事等にはパークボランティア（山岳関係者、自然公園保護管理員、日本山岳ガイド協会（プロ））の力を借りて運営している。

小岩井農場、盛岡市子ども科学館と連携していて、それぞれの得意な分野でガイドを料金フリーで融通し合いながら行っている。

施設の管理や来館者への情報提供もしなければならぬため、イベントに特化できないのが悩み。スタッフは提供できないが、ビジターセンターを場として提供できればと思っている。

### ④（一社）しずくいし観光協会

「（一社）しずくいし観光協会について（面談）」（面談：（一社）しずくいし観光協会事務局）

現在観光協会の業務が忙しく人手が足りないため、新たに業務を受け入れるのは困難な状況となっている。

## 2) 平成 27 年度雫石町エコツーリズム推進会議

### ①勉強会「エコツーリズムについて」

エコツーリズムとは、自然観光資源について、知識を有するものから、案内、または助言を受け、知識および理解を深めること。エコツーリズム推進法の第2条「定義」の第2項に書いてある。色々なツーリズムがあるが、推進法としてできているのはエコツーリズムだけ。エコツーリズムは全てのニューツーリズムに通じることであり、この法律を大いに活用すべき。

自然環境が作った伝説・言い伝えを知っているのは地域に暮らしてきた人々。地元の人が地域のことを知れば語りたくなると思うようになる。商品の付加価値は地域の人であり、地域こそが一番大事である。様々な地域の人を活かして取り組み、人を育てるという一番大事なところを担っているのがエコツーリズムである。

小岩井農場がエコツーリズム大賞をとったのも、エコツーリズムを通じて雇用が生じているというところから。流通と集客の技術は必要だが、人づくりをしていくことが大切。

観光のための地域づくりから、地域づくりのための観光を目指すべき。また、その継続化。そして地域主体（全体）で担う体制づくりが必要。

伝説を今の人が臨場感を持って話せることが大事。人を育成する過程は儲からないが、その過程がその後稼ぎ頭になっていく。地元の人が地域の歴史を知って感動し、それをまた別の人へ伝えていく。行政が民間のやれないことを支援していくこと、地元の人が付加価値を体験することがとても大切。

### 【ワークショップ「これまでの講演をきいて、これから必要だと思うこと」】

(グループA)

地元の人がお互いのガイドを見ることが必要。ガイド技術も参考にして、お互いに高めあっていくべき。

(グループB)

雫石の人が地元を知らない。網張ビジターセンターは観光と一線を画したものだが、商品として考えることが大事。

(グループC)

細部のコンテンツについて、お互いに知らない部分も多い。昔語りのガイドについて、パイプはあるが臨機応変な対応ができないことが課題。連携と人材育成を同時に行っていく必要がある。



## ②アドバイス「エコツーリズム推進組織体制について（前例等）」

以前からかかわっている京丹後市では、まず資源を再確認するところから始めた。よそにない、非日常が味わえること、もの。ただ、雫石はすでに商品がたくさんある。ガイドも山岳ガイドや観光協会で過去に養成した人々がいる。

続いて、仕組みづくり。いつでもお試くださいの仕組みがつかれるかがポイント。いつでもという演出が2～3時間の商品をどこで販売するか。丹後の場合は道の駅で販売するため、道の駅が旅行業を取得した。雫石は（一社）しずくいし観光協会と小岩井農場がすでに旅行業を取得しており、売る場所はすでにある。

雫石は商品も売る場所もある。それをつなぐ人がいないのが問題。それぞれ皆忙しいなかで、その役目を誰が担っていくかがポイントで、水平的な枠組みがないなか、公の立場にたって見つめなおすことが重要。皆黒子役が必要だと感じているが、誰がやるかは言えない。利害等ある中で、各団体を誰がつなぐのか。過去の事例では地域住民がつなぎ役になる場合も多かった。

## ③意見交換会「雫石町での体制づくりについて」

(参加者)

これまで町内でエコツーリズムに関して中心的な役割を果たしていた NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワークがエコツーリズムに取り組んだのは県のエコツーリズム事業に取り組んだところ大きな反響があったため。県の事業を利用して町内の神社を訪れたり、自然体験に取り組んだりして、モデルツアーを作った。本当は観光協会が担うべき役割だが、今は手一杯の状況。最初は行政がやってみてはどうか。

(渡辺氏)

雫石町では協議会等かつちりとしたものではなく、ゆるやかなネットワーク的な組織があうのではないか。組織としては協議会と称するしかないかもしれないが。そうすれば皆抵抗なく受入られるのではないか。

(参加者)

組織の立ち上げの部分だけでも行政が主導していったほしい。

お互いがお互いを良く知るために、まず知ることには力を入れてみてはどうか

(渡辺氏)

稲取では商品ラインナップのチラシを作成した。雫石では商品は既にあるのだから、最少催行人員と時間、予約は何日前まで等の情報を載せた一覧表をまず作ってみてはどうか。

(参加者)

受入側も体制を作る努力が必要。チラシがあれば紹介しやすいと思う。

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

これまでエコツーリズムに関して先進的な取り組みを行っている事業者から、エコツーリズムに関して全く知らない観光関係者まで、エコツーリズムについて理解を深めることができた。そして、エコツーリズムを知らなかった関係者でも、自分が行っていたことがエコツーリズムだと気づくこともできた。エコツーリズムの商品の幅が広がり、今後はその一つひとつをつないでいくことで、すぐに実践ができそうなどころまで進むことができた。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

これまでどこが主体となるかで進まなかった推進組織の立ち上げについて行政が主導して取り組み、ゆるやかなネットワーク型の組織体制を確立する。

### 3) 今後の取り組み

組織立ち上げ以降の取り組みとして、体験リストの作成、ガイドの相互交流・連携、ガイドの育成が必要。

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

アドバイザーがこれまで取り組んできた京都府京丹後市の事例、静岡県伊豆稲取の事例、茨城県常陸太田市の具体的事例。

### 2) その他感想

渡邊アドバイザーの過去の取り組み事例や、具体的な数字（金額）を織り交ぜながらの説明が実際の現場を想像しやすく、今後の雫石町での取り組みへの大きな参考となった。

雫石町はすべてそろっている、あとはそれを繋ぐ人だけという言葉も、参加者の大きな自信に繋がったのではないかと感じた。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

渡邊 法子氏 (アイ・エス・ケー合同会社 代表)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

雫石町にはエコツーリズム大賞ならびに特別賞を過去に3度受賞している小岩井農場をはじめ、山岳ガイド、自然観察ガイド、地域に伝わるおとぎ話の伝承など、複数団体の地域住民によってエコツーリズムの推進活動が展開されており、これまでの住民による取り組み意欲ならびに成果は大いに評価できる。

#### ②課題

岩手県雫石町のエコツーリズム推進の窓口の一本化を図るため、まずは域内の活動団体の連携強化が課題である。さらに今後、継続する事業として推進できるよう、域内のコーディネーター、ガイドなど適材適所の人材養成が課題である。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

- エコツーリズムにとって欠かせない山、川、森、温泉、文化等の豊富な自然観光資源が豊富である。また新幹線発着の雫石駅を有し盛岡市と隣接している等、交通に恵まれている。鶯宿、網張、つなぎ等の豊かな温泉地の存在、またそれに伴う宿泊施設の充実も恵まれた点である。(約200万人の観光施設利用者、36万人の宿泊客数)
- 岩手山南麓に位置する3,000haの小岩井農場は、これまで積極的にエコツーリズム推進事業を積み重ねており、その集客活動のなかからガイドの養成、地元ボランティアガイドの起用、地元における雇用の創出を実現している。また過去にエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業の事業主体者として事業を実施したNPO法人いきいき暮らしネットワークも地道に住民活動を継続している。これらの地域資源は雫石町がエコツーリズムを推進するにあたって最も大きな力であることを感じた。  
また雫石町観光協会も、小岩井農場も旅行業を取得しておりエコツーリズムの流通に係る窓口がすでに2ヶ所ある点も大きな強みである。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

豊富な自然観光資源を、春夏秋冬における四季それぞれの魅力や当該地域で暮らしてきた人々の暮らしの知恵を活かした「商品力」とすることができる。またもともと持っている「集客力」を十分に活かすことも可能な地域である。

今回は小岩井農場でのスノーシューウォークによる自然観察ガイドツアーを体験した。雪の中を歩くことも楽しく、同行した雫石町育ちの若者も「めったに雪の中を歩くことはない。」と言う。今回はツアーを初めて体験しガイドさんから地元の自然の生態系を数々紹介され、「子供のころから触れてきたこの自然界の中に、これほど感動することがあったのか?」と大いに驚いていた。

エコツーリズム商品の魅力は、常に見てきた景観、自然であっても、語る人（ガイド）にその知見を学ぶことによって感動することであり、まさに遠方からの誘客だけではなく地元民も体験し感動する「旅」として位置づけられるのではないだろうか？

雫石町観光協会が主催で数年前に地域自然観察ガイド養成講座も実施されていた経緯がある。出張ビジターセンターにおいても季節ごとに魅力的な行事が頻繁に実施されている。当該地域に伝わる伝説をお年寄りからヒアリングし、まとめて語りの会を開催しているNPO法人いきいき暮らしネットワークや山岳ガイドの存在など地域資源の掘り起こし、人づくりが各団体によって地道に推進されている点が素晴らしい。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

#### ① エコツーリズムとは何か？エコツーリズム推進法の定義に基づき確認。

- 徹頭徹尾、わが地域ならではの、もともとあるもの、他の地域に対して差別化できる自然観光資源を活用する。
- 語る人がいなければエコツーリズムは成立しない。
- 付加価値を求める「旅」としての商品化が必要であること。

#### ② エコツーリズムによる効果

- 地域資源の再発掘を地域の人の手で実施することの意義は大きい。
- 地域における担い手の掘り起こし、育成事業に真剣に取り組むことで次世代を担う「人」を、継続してわが地域に育てることができる。
- 商品造成としくみづくりにより、継続的な事業化を実現することができる。

#### ③ ワークショップ

各活動団体で地道に取り組んできた当該地域でのエコツーリズム推進には、今後、各活動団体間の連携強化が課題であり必要不可欠と考えた。そこで急遽ワークショップを開催し相互理解の機会の創出とした。雫石町エコツーリズム推進協議会設立への機運となった。

#### ④ 上記①②について事例を通してアドバイス（伊豆稲取温泉、京丹後市）

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

胎動期ではあるがそれぞれの活動団体は地道に取り組んできた。全体構想への場づくりが必要不可欠である。

#### ②全体構想策定への意向について

雫石町が主導しつつ場を設置していく方向づけができた。

#### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

雫石町エコツーリズム推進協議会の設立。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

全国の模範的な取り組みを各活動団体が地道に重ねて来たことに誇りを持ち、雫石町の各団体が相互に理解し合い、連携強化を強めてほしい。役割分担を図ることによって持続可能な事業としてのエコツーリズムが当該地域で推進され、全国模範のエコツーリズムの流通も実現可能な地域であることを確信し、今後の雫石町に大いに期待したい。

### 3-3. 陸前高田市広田町生活体験推進協議会（岩手県陸前高田市）

#### (1) アドバイザー派遣申請の背景

---

##### ●地域の概要

【人口】 1,945 万（2014 年 2 月）

【面積】 231.94 k m<sup>2</sup>

【地勢】

陸前高田市は、岩手県南東部の太平洋岸に位置する都市である。旧陸前国気仙郡に属し、隣接する同県大船渡市や宮城県気仙沼市とともに陸前海岸北部の中核を成す。

【気候、自然】

北上高地東側は早春期はオホーツク海高気圧の影響による冷たく湿った東寄りの風（ヤマセ）が出現し、年間を通じて冷涼だが、冬は岩手県内の他地域と比較して晴天率が高く温暖。暑さのピーク 8 月上旬であり 9 月中旬から秋の長雨や台風の影響を受けるが、その後は秋の晴天の時期を迎える。11 月中旬には冬型平地でも初雪がみられる。

【歴史】

明治 8 年（1875 年）10 月 17 日 - 水沢県による村落統合にともない、高田村は竹駒村と合併して氷上村となる。明治 22 年（1889 年）4 月 1 日 - 町村制施行にともない、氷上村を改称して旧来の高田村単独で町制施行し高田町が発足。

昭和 30 年（1955 年）1 月 1 日 - 高田町・気仙町・広田町・小友村・竹駒村・矢作村・横田村・米崎村が合併し、陸前高田市となる。

【観光】

入込数 209,820 人 平成 25 年岩手県商工労働部観光課資料

沿岸部の 5 市（久慈、宮古、釜石、大船渡、陸前高田）の中で震災前の入込数が最も減少し回復していない。

環境、生活文化、震災を「命」というテーマで教育旅行誘致を行い、継続的に一般客やインバンド需要取り込みを目標としている。

【地域資源の概要】

- ・ 高田松原：日本の渚百選に選定されている。
- ・ 根岬はしご虎舞と黒崎神社
- ・ うごく七夕まつり
- ・ けんか七夕まつり
- ・ 全国太鼓フェスティバル
- ・ 南三陸ロード「りくぜんたかた」
- ・ 気仙隕石

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

震災から3年後、復興という大枠の中で、地元には利益が還元され地元の資源が活用されることが重要であるが、そのためには補助金市場ではなく実際に地域にお金が回るビジネスの創出が求められていた。

ビジネスを創出するには、地域側のシーズと市場のニーズのマッチングに他ならないが、観光市場より利益を得るためには、地域資源の価値化に大きな工夫が必要であった。

そして、観光市場からビジネスを創出するアイデアの一つに修学旅行をターゲットとした民泊の事業があった。

修学旅行を受入れる、民泊を行う、などといったアイデアは日本中どこにも持っている。しかし、実際に顧客が来たのは、その多くが顧客サイド（旅行会社や学校）から先に需要があって実現したものであり、地域側から「誘致」を行って実現したエリアは南信州観光公社等、ごく限られた地域でしかない。

陸前高田市でも以前より民泊を進めることに対して、例えば議会での質問にも取上げられるとか、先進地への視察などがされてはいたが、現実的にビジネスとして回るまでには越えるべきハードルが山積されていた。

しかし、2014年陸前高田市の広田地域において、修学旅行受入れを実現するために、専門家（株式会社 And Nature）の指導によりビジネスの戦略プランを相当時間かけて作成され、2015年、陸前高田市広田町生活体験推進協議会を発足し、一つ一つの戦略の実行と検証が繰り返された。

その結果、2016年の春から陸前高田初めての教育旅行顧客を誘致することに成功した。

しかし、受入にあたり安全で顧客満足を保証できる組織づくりやそれに携わる人材育成が必要であった。特に「協議会」という任意団体ではなく、しっかりした組織を作ることが求められた。

2015年夏に行政との連携により、陸前高田市での窓口（プラットフォーム）の統一化により、万一の際の砦としての機能の保証を得ることができた。

また、受入には組織づくりと併せて、それを動かす人のソフト面の充実、人材育成が急務であった。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                                              |
|-----------|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成28年2月24日（水）～平成28年2月26日（金）                                                                                  |
| 場         | 所 | 岩手県陸前高田市                                                                                                     |
| アドバイザー    |   | 南信州観光公社 代表取締役 高橋 允氏                                                                                          |
| 参加者       |   | 計9名                                                                                                          |
| スケジュール・方法 |   | 【1日目】（アドバイザー移動）<br>【2日目】民泊受入に伴う研修、安全管理指導責任者研修、衛生管理指導責任者研修、事務局対応マニュアル作り、受入れ民家座談会<br>【3日目】陸前高田市内、震災遺構・復興工事現場視察 |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

---

#### 1) 2/25（木）「岩手県体験型教育旅行受入安全・衛生指針事務局研修」

9:00～17:00 陸前高田市役所第2会議室

9:00～12:00 （エコツーリズム全体構想、民泊の在り方）

13:00～17:00 研修会（民泊安全対策、利用者との打合せの仕方に向けた資料作り）

13:00～の 研修の手法

「陸前高田市農山漁村生活体験(民泊)受入家庭手引き」のたたき台を作成し、それをもとに1ページずつ、順を追いながら講師からのアドバイスをいただいた。

この研修は岩手県が定める受入れ指針に乗った受入れを行うためのものである。

研修には2つの項目がある

- ・ 安全管理指導責任者研修
- ・ 衛生管理指導責任者研修

##### ①受入れ民家への指導項目の検討

- ・ 教育旅行・農山漁村生活体験(民泊)受入の流れ
- ・ 農山漁村生活体験(民泊)受入前・当日を迎えて
- ・ 入村式・離村式進行表
- ・ 家業体験プログラムの実施にあたって
- ・ 防火・防災について
- ・ 料理指導に際してのお願い
- ・ 食中毒の予防
- ・ 救急車を呼ぶとき
- ・ 熱中症予防対策
- ・ 応急処置例
- ・ 火災が起こった場合
- ・ 地震が起こった場合
- ・ 緊急連絡体制表
- ・ 緊急連絡先
- ・ 保険



##### ②決定団体（学校）旅行会社への情報・ルール等の事前理解

- ・ 採用決定～
- ・ 事前指導について
- ・ 農家・漁家の決定について
- ・ 班編成
- ・ 事前のやりとり、学校対農家・漁家
- ・ 変更・キャンセルについて
- ・ 当日の流れ



##### ③旅行会社との当日の動き確認

- ・ 日程決定～手配までの流れ
- ・ 受け入れ先との確認・調整

- ・ 手配結果
- ・ 途中のコミュニケーションの方法・ルール
- ・ 精算・取消・変更の留意点
- ・ 受入れ時期の留意点

#### ④民泊時の要配慮生徒の対応方法

- ・ 学校との事前情報・個人情報の扱い
- ・ 受入れ先への対応
- ・ 介助員の同行・同宿等
- ・ 本部宿舍との移動

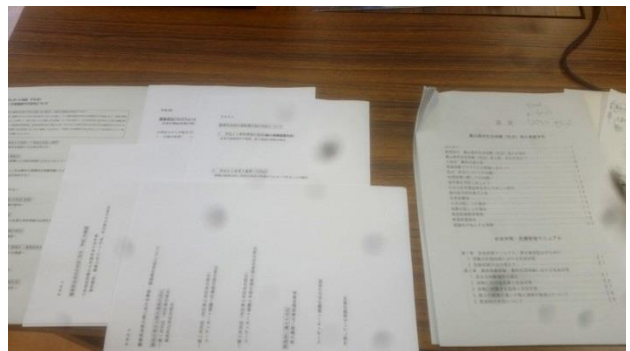


#### ⑤当日の対応・動き

- ・ スケジュール、流れ
- ・ 巡回車の対応
- ・ 緊急時や病人・ケガ人発生時の対応

#### ⑥受入先での事故・緊急対応

- ・ 事故発生時の連絡の流れ
- ・ 1次対応
- ・ 2次対応
- ・ 3次対応
- ・ 緊急時に備えた対応
- ・ 受入れ農家への事前通知事項
- ・ 受入れ組織の当日の体制・シフト
- ・ 付保している保険の案内



## 2) 陸前高田市広田地域受入民家、車座会議（座談会）

2/25（木）19:30～20:30 広田町集会所

- ・ 民泊を受入れる際の心構え
- ・ 民泊はやりがいがある楽しい
- ・ 様々な事例・エピソードなど  
質疑・応答



### 3) 震災遺構の観光コンテンツ化（現地視察と周辺地域との連携についての意見交換）

2/26（金）8:30～12:00 陸前高田市震災遺構

- ・ 道の駅タピック他
- ・ 復興かさ上げ地視察
- ・ 遺構を資源に変えて観光市場から顧客創造するための工夫について



## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

2016 年 6 月に陸前高田市が初めて修学旅行を受入れるため、その体制整備をしてきたが、具体的な準備すべきもの・ことが何かを具体的に知識として持つ必要が強くあった。

関係者も初めての経験であることから、内容がよく見えないことへの不安が大きかった。

しかし、極めて具体的で現場現物の経験からくる話は、全ての疑問に的確にこたえるものであった。

参加した関係者の「なんとなく霧がかかった状態」から、「非常にクリアになった」

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

エコツーリズムをはじめ、観光市場から利益を得るためには、単にエコツーリズムの観光商品、旅行商品を作るだけでは 100% 失敗する。

成功のためには、経営戦略が必要であるが、地域の大きな戦略から首尾一貫した流れを一切止めない現場のオペレーションは戦略実行における要諦である。

その点でいうと、ツーリズム推進において、オペレーションの知識を最も高いレベルで取得できた第一段階としては、最も理想的な形で終えることができた。

これにより、今後は関係者が実際に起きたことから PDCA を回すことでよりその組織力や知識が集積される。そのことは、陸前高田において、教育旅行以外の領域も含めた新たな事業の創出の源泉となるはずだ。

### 3) 今後の取り組み

2016 年 6 月から始まる受入れに際しての正確なオペレーション実行

↓

実際に行った後で、必ず出てくる課題を戦略的に整理

↓

次の顧客の満足度を高める方策の検討

↓

あらたなエコツーリズム、観光市場創造を行う

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

- ・ 実際に起きたトラブルの検証

検証により、

- ・ 原因、対処方法、事前防止の方法、が事実により生まれてきたものであることから、極めて重要な知見の蓄積ができた。
- ・ 全てのスタートがここにある。このような事故防止をするため、「なぜ」の 5 回を追及し、マニュアルの項目整理に役立てることができた。

### 2) その他感想

やはり、現場現物を長期間やってきた人以外に質の高い研修はできないと確信した。いわゆる「専門家」の話は実際に経験していないため、内容が薄くて現場とはかい離している。それに対して、現場現物を知っている人だからこそ、本当に必要としている内容が明快に整理される。

今回の研修中のケーススタディで、その中に出てきた話が、関係者が受けたとある研修でその講師が「自分の経験」として使いまわしていたことが明らかになり、改めて現場の重要性を認識した。

その点でいうと、今回の研修は極めて有意義であった。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

高橋 充氏 (南信州観光公社 代表取締役)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

陸前高田市では、交流人口の窓口として、まるごとくぜんたかだ協議会(陸前高田市観光物産協会)を設立して、企業・組織研修、大学生の研修を手掛けている。一方、陸前高田市広田町生活体験推進協議会は来年度、県外の中学校・高校の教育旅行での民泊受6校約1,000名の誘致に成功した。

#### ②課題

教育旅行の受入には、学校・旅行会社と地域をつなぐための地域の専門の窓口が機能することが不可欠であるが、民泊受入先のモチベーションの醸成と、実行に際し諸課題を乗り越えながら進めることを並行して行うための経験値が不足している。地域内での役割分担についての共通認識を確立する必要がある。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

地域の民泊家庭の方々の人柄と地域を取りまとめる方々のやる気

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

今回は民泊を軸に教育旅行を誘致して地域活性につなげるという目的であり、その上で一番大事なのは受け入れる人々のパーソナリティーであり、それをまとめ上げて都市とつなぐ立場の方々の高い意識が不可欠である。今回訪問した広田町、小友町の民泊受入予定の方々は人と交流することに対して前向きで、真面目な姿勢が充分見て取れ、広田地区をまとめてきたNPO法人SEPや、他地区への働きかけと全体の窓口を担う予定のまるごとくぜんたかだ協議会のスタッフは若いながらも地域にしっかりとけ込んでおり、地域の方々やそれぞれの組織と目的を共有して事業を進めていくことで、大きな可能性が感じられた。

### 3) アドバイス(講義等)の概要

- 民泊を推進する上で必要なのは、全体のコーディネート、地域のコーディネートの役割分担を明確にすることであり、全体のコーディネートを行うものは、対外的かつ対内的な窓口として機能しなければならない。

- 上記を進める具体的な手法は、民泊の価値や在り方を確立し、受入先の方々に向けた具体的な方法や考え方を示したマニュアルの策定とその理解を推進することと、旅行マーケット(学校、旅行会社)に対して、モチベーションを持って訪れられるような仕組みやツールを整え、浸透させることである。
- 対価の先は、一般観光のように食事内容や施設の充実に向けたものではなく、いかに時間を共にし、体験を通じて交流を深めるかにある。すなわち関わる地域の人々に大いなる価値を見出すのがこのツーリズムの目的である。
- 様々な旅行目的に応じて、より多くの滞在時間を生み出すためには、学校団体を受け入れるキャパシティを広げるための仕掛けやコースの工夫を考える必要がある。
- 現在ある震災、復興、防災などに関連した語り部のコンテンツに、貝塚を訪れて古の知恵を実感する機会を加えることで感覚的な理解効果が高まる。合わせて近接の観光施設も上手く利用し(大船渡屋形船、気仙沼市)、可能であればフォレストアドベンチャーの誘致なども視野に入れながら、アウトドアアクティビティプログラムも配置することで、より多くの学校団体の誘客につなげられる。

#### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

##### ① 全体構想への取組状況について

存在そのものを知らなかったため、今後活動を進める中で検討する状況。

##### ② 全体構想策定への意向について

現時点では判断が出来ないが、受入体制は整って行くため、方向性が定まれば可能性はある。

##### ③ 全体構想認定に向けて、今後必要なこと

近隣の遠野と比べるとツーリズムの目的地としての知名度は低いが、受入体制を整え実績を積み重ねる中で、地域の特性を活かした取り組みの幅を広げながら、制度を有効に活用するための方針の策定。

#### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

先んじて誘客は現実のものとなっており、このことを良い機会に継続的な取り組みとなるよう、役割分担を明確にしつつ、共通の目的を確認して前へ進んでもらいたい。それを充分に実現できる世代間を越えた地域間の人的な結びつきがあり、そのための組織もある。又、陸前高田市広田町生活体験推進協議会の東京営業所が、学校や旅行会社とのパイプ役として、モチベーション作りや誘客促進に貢献できる状況にあるため、今後大きく進展させられる素地があるので、着実にステップアップを図ってもらいたい。

### 3-4. 檜原村産業環境課（東京都檜原村）

#### (1) アドバイザー派遣申請の背景

##### ●地域の概要

【人口】2,350人（H27.11.30現在）

【面積】105.41k㎡

【地勢】

檜原村は、東京都の西端に位置し、東西13.85km、南北10.00km、総面積105.41k㎡の村域を形成している。また、村の北西部を奥多摩町、北東部をあきる野市、南東部を八王子市、南部を山梨県上野原市と神奈川県相模原市にそれぞれ接している。多摩川の支流である秋川の源流に発達した村で、都心から約60km、標高1,531mの三頭山に連なる急峻な山稜に周囲を囲まれ、さらに村の中央に標高約900mの浅間尾根が東西に走り、秋川と北秋川とに分けている。

村内での標高差は1,307mで15度以上の急傾斜地が総面積の約9割を占め、これらを背にした川沿いに集落が点在している。

また、村域の約7割は秩父多摩甲斐国立公園に指定されており、約2割が特別区域に指定されている。

【気候、自然】

気候は、寒暖の差が比較的大きく、夏期は高温多湿、冬期は乾燥寒冷である太平洋岸気候区に属している。都心部に比べ標高が高く、山間部にあるため、平均気温では約2℃低い15℃、年間降水量はほぼ同じで約1,600mmとなっている。

村の総面積の約93%を森林が占め、緑豊かな自然環境に恵まれ、また、急傾斜地であることから村内には50を超える滝がある豊かな水資源に恵まれた美しい地域である。

【歴史】

檜原村の尾根道は、古来より関東平野部と中部山岳部を結ぶ交通路として栄え、縄文時代初期の中之平遺跡が残る。中世には、村を東西に走る浅間尾根は武蔵と甲斐を結ぶ古甲州街道とも呼ばれ、交通上の要衝となり、甲斐の武田氏の関東侵略に備えるため、檜原城が築かれた。後北条氏の滅亡とともに檜原城も落城し、廃城となったが、江戸時代においてもその重要性は変わらず、江戸幕府による街道整備により甲州中道となり、口留番所が設置された。明治時代になり、韮山県に属したが、その後神奈川県へと編入され、明治22年に市町村制施行され、立村した。明治26年に東京府へ編入されたが、立村以来、一度も合併することなく、村名も区域も変わらず、現在の形まであり続けている非常に珍しい村である。

【観光】

檜原村は、村域の約7割が秩父多摩甲斐国立公園に属し、村の中央を浅間尾根が走り、村の北側から西側にかけては、大岳山、御前山、三頭山の奥多摩三山が連なり、南側を笹尾根が走っている。村内を流れる秋川と北秋川は村内を源流とし、見事な渓谷美を作り上げている。また、村内には50を超える滝があるなど、豊かな自然資源を有し、風光明媚な景観を作り上げている。春から秋にかけては、多くの登山客やハイカーで賑わい、また、夏には秋川やその支流で川遊びやバーベキュー客で賑わう。

都内で唯一「日本の滝百選」選ばれた払沢の滝や檜原都民の森には都内で最初に「森林セラピーロード」に認定された大滝の路があり、また、都指定天然記念物の神戸岩は、年間を通じて多くの観光客で賑わっている。

また、近年は自転車ブームもあり、また、平成25年に国体のロードレース会場となったこともあり、多くのロードバイク愛好者が訪れている。

## 【地域資源の概要】

### ①観光資源

- ・日本の滝百選：「払沢（ほっさわ）の滝」
- ・都指定名勝：「三頭大滝（みとうおおたき）」
- ・都指定天然記念物：「神戸岩（かのといわ）」
- ・奥多摩三山：「大岳山（おおだけさん）」、「御前山（ごぜんやま）」、「三頭山（みとうさん）」
- ・森林セラピーロード：「大滝の路（おおたきのみち）」
- ・温泉：「檜原温泉センター数馬（かずま）の湯」
- ・自然公園：東京都檜原都民の森
- ・関東ふれあいの道（首都圏自然歩道）：3路線 歴史のみち、鍾乳洞と滝のみち、富士見のみち
- ・浅間尾根、浅間嶺
- ・秋川溪谷、北秋川溪谷
- ・村内50か所以上の滝（中山の滝、天狗滝、綾滝、花水の滝、夫婦の滝、雨乞の滝、吉祥寺滝、龍神の滝、九頭竜の滝など）
- ・教育の森、ふるさとの森

### ②文化・歴史

- ・国指定重要文化財：小林家住宅
- ・都指定史跡：「檜原城跡（ひのはらじょうせき）」
- ・兜造りの家
- ・都指定無形民俗文化財（風俗習慣）：春日神社の御とう（とうは食へんに同）神事
- ・都指定無形民俗文化財（民俗芸能）：小沢の式三番、笹野の式三番、柏木野の神代神楽、数馬の太神楽・獅子舞、藤倉の獅子舞、人里の獅子舞

### ③その他

- ・じゃがいも（おいねつるいも）
- ・じゃがいも焼酎
- ・ゆずワイン
- ・ひのはら漬
- ・ひのはら紅茶
- ・ルバーブ
- ・山菜、山菜料理
- ・手作りこんにやく
- ・檜原豆腐、うのはなドーナツ
- ・舞茸
- ・おいねめし
- ・木材工芸品

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

檜原村は、かつては林業が基幹産業であったが、木材価格の低迷等により、森林経営は厳しいものとなり、新たに村の豊富な自然資源を活かした観光業が基幹産業となっている。しかしながら、村の基幹産業であるにも関わらず、村の観光振興に関する計画は策定されておらず、村全体の観光振興施策については、檜原村総合計画に基づき実施されている。

最近、メディア等に村を取り上げられることも多く、村に対する注目度は増しており、年間30万人を超える観光客に、より満足してもらうためには、村として総合計画に基づいた大きな方向性を持った観光振興を策定することが急務である。

現在、檜原では観光ビジョン作成のために、村内26自治会への観光資源洗い出しヒアリング、村内で活躍するガイドへのヒアリング、村内の観光に関する文献・資料等の収集・整理等を行っている。近

年の著しい社会情勢の変化等による多様化した観光ニーズに応えるためには、村域の約7割が国立公園に指定されるなど豊富な自然資源を活かした村内の観光資源をくまなく洗い出し、村全体の観光振興を図るエコツーリズム推進のための全体構想の作成が必要である。

このアドバイザー派遣事業を平成24年25年NPO法人フジの森が、26年檜原村観光協会が実施しており、また、上記のような背景及び地域課題から檜原村ではエコツーリズム推進の機運が高まっている。

そこで、エコツーリズム推進のための全体構想を構築する上で、檜原村職員と檜原村内の観光事業関係者に指導を希望するものである。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                          |
|-----------|---|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成28年1月26日（火）～平成28年1月28日（木）                                                              |
| 場         | 所 | 東京都西多摩郡檜原村                                                                               |
| アドバイザー    |   | 北海道大学 国際広報メディア観光学高等研究センター 特任教授<br>真板 昭夫氏                                                 |
| 参加者       |   | 計29名                                                                                     |
| スケジュール・方法 |   | 【1日目】講演会打ち合わせ、担当職員へのエコツーリズム概論説明<br>【2日目】講師と村長の懇談、講師による講演会<br>【3日目】今後のエコツーリズム推進についての打ち合わせ |

## (3) アドバイスの内容（議事録）

【講演】「エコツーリズム概論」・「エコツーリズム推進法の概要」

### 1) 「エコツーリズム概論」

- ・ エコツーリズムの定義は、①地域固有の自然・文化・歴史資源を活用し、地域主体の観光産業を成立させること、②それらの資源が持続的に利用できるよう資源を保全していくこと、③観光の波及により地域経済の活性化に資すること
- ・ エコツーリズムは、「旅行の推進」、「環境の保全」、「経済の活性化」の三角形で成り立っている。「環境の保全」の環境は、日本型エコツーリズムでは、自然環境だけでなく、人の手の入った自然や生活・習慣等も含まれる。
- ・ 「観光」とは、「国の光を観る」こと。「光」は、その地に住む人々が「最も自慢するものであり、「他者に誇れるもの」。自慢すべき「光」の多いところほど発展は持続化し、結果として「観光客」は増加していく。
- ・ 地域資源を探すことを「宝さがし」と呼ぶ。「宝さがし」には5つのフレームがある。①自然＝生物の戸籍簿、②生活環境＝生きるための知恵の体系、③歴史・文化＝先人の足跡、④産業＝外部世界への発信、⑤名人＝地域の知恵袋
- ・ 「宝さがし」から「地域づくり」への展開が必要。①「宝をさがす」、②「宝を磨く」、③「宝を誇る」、④「宝を伝える」、⑤「宝を活かす（興す）」

- ・ 「エコツーリズム」と「エコツアー」の違い。「エコツーリズム」は、理念や仕組みであり、「エコツアー」は、体験プログラムや商品のこと。「グリーンツーリズム」は「エコツアー」である。
- ・ 「エコツーリズム」は、自然とのふれあいや観察会、環境教育を目的とした学校の団体活動、農山漁村での生活体験を通じた理解、民俗・文化とのふれあい、環境保全への貢献活動等といった資源や目的に応じた多様な展開が可能である。
- ・ プログラムには多様なレベルがあって良い。
- ・ 旅の力を活用した地域デザインとして、5つの力がある。①地域の歴史、自然、伝統、生活などについて、学び楽しみつつ、それらの発掘・育成・保存の促進に寄与できる「文化の力」。②ツアーを通じて地域の環境保全に幅広い貢献ができる「環境保全貢献の力」。③旅による自然や人とのふれあいを通し、異文化への理解など人間形成の機会を広げる「教育の力」。④日常からの離脱による新たな刺激や感動、遊・快・楽・癒しなどを通じ、からだやこころの活力を得、再創造へのエネルギーを充たす「健康の力」。⑤地域間における相互理解、友好の促進を通じ、安全で平和な社会の実現に貢献できる「交流の力」。

## 2) 「エコツーリズム推進法の概要」

- ・ 「エコツーリズム推進法」成立の背景
- ・ 「エコツーリズム推進法」の目的
- ・ 「エコツーリズム推進法」の基本理念
- ・ 「自然観光資源」の定義
- ・ 国の役割、市町村の役割
- ・ エコツーリズム推進協議会について
- ・ エコツーリズム全体構想について
- ・ 全体構想策定のスケジュールについて

### 【打ち合わせ・懇談等】

- ・ 現在、村が策定している観光ビジョンにおいて、エコツーリズムにおける「宝さがし」を行っているので、全体構想の策定については、比較的早くできると思われる。「宝さがし」で見つけた「宝」を磨き、興すことが重要。興した宝が観光大使である。岩手県二戸市の事例の紹介。
- ・ 東京から2時間程度で来ることができ、村の立地は申し分ない。資源も豊富である。
- ・ 現在は「村」がブランドである。
- ・ 2020年の東京オリンピックは大きなチャンスである。オリンピックまでに檜原村版のエコツーリズムの確立が必要。
- ・ 全体構想については、宝さがしが終了しているので、1年から1年半でできる。
- ・ 今後は、人材育成が必要。また、産業（特産品）をたくさん興し、それを上手に宣伝すること。売り方にも工夫が必要。産業は観光大使である。



1 日目：講演会打ち合わせ



2 日目：懇談



2 日目：講演会



3 日目：打ち合わせ

#### (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

##### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・ エコツーリズムについての理解が得られた。
- ・ エコツーリズムの推進方法についての理解が得られた。
- ・ エコツーリズム全体構想の策定スケジュールが明確になった。
- ・ エコツーリズム推進協議会についての理解が得られた。

##### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ エコツーリズム推進協議会の発足
- ・ エコツーリズム全体構想の策定

### 3) 今後の取り組み

平成 28 年度よりエコツーリズム推進協議会を組織し、村全体を巻き込み、エコツーリズムの推進を図るとともに、エコツーリズム全体構想の策定を行う。

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

今回の講演を実施したことで、これから推進しようとする「エコツーリズム」というものがどういうものかということが村職員及び観光事業関係者の中で理解を深めることができた。また、平成 28 年度よりエコツーリズム推進協議会を発足し、エコツーリズム全体構想の策定を予定しているが、協議会委員の選出の仕方や全体構想の策定スケジュールやイメージについて、今回の講演で明確となった。

他地域での参考事例の紹介もあり、現状の課題についても認識することができた。

### 2) その他感想

貴重なアドバイスをたくさん頂き、非常に参考となった。今回の事業で学んだことを活かし、今後のエコツーリズムの推進を図り、檜原村がエコツーリズムの 1 つのモデル地域となるような取組を推進していきたい。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

真板 昭夫氏 (北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 特任教授)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

村では産業課と企画課が中心となりエコツーリズムの推進に力を入れている。近年数人のガイドによるエコツアーも行われている。

#### ②課題

ガイドの養成と村を中心とした推進組織体制作りが課題となっていた。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

村役場の各課が一体となって取り組もうとしている意気込みを感じている。とくに魅力ある資源としては、重要文化財に指定された小林家住宅とその周辺のミツバツツジ群落の一体的な景観と、その場への移動手段としてのトロッコ列車はエコツアーの魅力的な資源対象と言える。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

集落が一体となって誘客に熱心であり、将来この場所に馬搬のツアーを組み入れて活性化させようとしている。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

第一部ではエコツーリズムの概論の講演、および第二部では推進協議会の立ち上げ手順や、全体構想策定までの課題、体制作りについてアドバイスをを行った。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

2015年度において各地区のヒアリングを実施して観光基本構想を策定している。その計画に基づき、2016年度において、推進協議会を立ち上げ2年計画で全体構想策定、およびエコツアーガイド養成講座をすべく予算を計上している。

#### ②全体構想策定への意向について

村としては2020年オリンピックイヤーに向けて全面的に取り組んでいく意向である。

#### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

役場内のどの部署が全体の取りまとめ部署として機能させるかの町政課題が残っている。

## 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

スロースターターであった檜原村は、村長の意向もあって 2015 年度から急激にスピードアップしながら取り組みの充実を図っている。この勢いで 2017 年までに陸部の村として最初のエコツーリズム全体構想認定地域となることを期待。

### 3-5. 粟島観光協会（新潟県粟島浦村）

#### (1) アドバイザー派遣申請の背景

##### ●地域の概要

【人口】363人、高齢化率約45%（平成28年2月1日現在）

【面積】9.66k㎡

【地勢】

粟島は、新潟県村上市の岩船港から約35km離れ、佐渡の北東上の日本海上に位置する、周囲約23km、東西4.4km、南北6.1km、面積9.78k㎡の離島である。最高標高は島の中央に位置する小柴山の265.3mであり、山を挟んで西海岸には釜谷集落、東海岸には内浦集落と2つの集落がある。

【気候、自然】

日本海植物区に属し、日本海側、北方系、南方系、の植物が分布しており、粟島を北限、南限をする植物もある。作物についても北方系、南方系の両者の作物が栽培可能な環境にある。島嶼としては稀であるが、粟島では湧水が豊富であり、そのことによって島内の資源のみで生活が成立していたともいえる。山林は開拓され樹木の多くは畑や竹林の周りに防風林として植えられたものである。現在は行われなくなったが、かつては竹林業が盛んであり、竹を島外に輸出もしていた。現在は竹林が手入れされずに荒れた状態となっている。陸上資源とともに、海洋資源にも恵まれ漁業が基幹産業を担ってきた。水産資源の豊かさは現在の観光も支え、釣りや食事を目的に来るリピーターも多くいる。また、通常は無人島にしか営巣を行わないオオミズナギドリの営巣地でもある。

【歴史】

明治期の3度の大火により粟島の歴史を語る、文書・文献・資料等が失われたため、言葉や姓氏、地名、民俗、伝承等から下記のような推論がたてられている。

粟島では、弥生から古墳文化が確認されておらず、和人が入るまでの長い間、蝦夷の地とされていたと考えられている。地名にもアイヌ語に由来するものが確認される。8世紀後半から9世紀頃には、対馬海流を利用して北部九州の民（マツラ（松浦）の一族、現在の釜谷集落の祖先）が北上し粟島に上陸（現在の内浦地区）し、先住のエミシ人を現在の釜谷地区に追いやったとされている。次に、その半世紀後の848年（嘉祥元年）前後には、越前沿岸から越前国本保信高を祖とするホンボ（本保）一族が漂着し、マツラ一族を西海岸（現在の釜谷地区）に追いやった。その影響で西海岸に暮らしていたエミシびと（アイヌ民族と考えられる）は島から出ざるを得ず北方へと追われたとされている。こうして現在にも至る集落構成が形成された。

その後、鎌倉時代、室町時代には色部氏の領地であった。この時期に板碑が大量に造られた。江戸時代には、村上藩や庄内藩領、幕府領と二転三転した。幕末期には、北前船の重要な避難港として位置づけられ、北前船を介した文化の交流もあったと考えられる。

時代を経て、1964年に新潟地震が発生。地震によって全島が1m程隆起し、その影響で稲作が不可能となり、以降は畑作が島民の生活を支えてきた。この出来事により世間から粟島が注目を浴びることとなり、当時の離島ブームと相まって粟島の観光が開かれるようになる。地震後の家の建て替えを契機として民宿業を始める島民が多く、現在でも多くの島民が民宿業を営む。

## 【漁業】

一年を通じて豊かな海洋資源に恵まれている粟島では漁業が人々の生活を支えてきた。観光産業が盛んになった後も水産資源によって観光産業を支える重要な存在でもある。タイ類や、ブリやノドグロ等の北陸を代表する魚種から、タラ等の北方系の魚種、タコ、更にワカメやエゴノリ、モズク、天草、ウミソーメン等の海草類、アワビ、サザエ等の貝類と、多種多様な資源に恵まれる。特に、鯛漁を主目的とした春時期の大謀網漁は明治期から粟島の漁業を支えており、「鯛の島・粟島」との名もある。漁法は主に定置網漁、底引き網漁、大望網漁である。しかし、現在は漁業の後継者不足が問題となっており、漁の主な目的が民宿への食材提供となっている場合も多い。現役の底引き船も1隻のみとなっている。一方で、大謀網漁や磯ダコ釣り等は、体験型観光としても活用されている。

## 【農業】

粟島の農業は、各家で野菜類を栽培する自給目的のものである。小豆・大豆も自給しており、あんこや味噌もみな自前のものを使用している。稲作も、以前は行われていたが、1964年の新潟地震による島の隆起が原因で水源が枯れた為、それ以降は行われていない。粟島のジャガイモは、甘くて美味しいと好評であり、秋に採れる磯ダコを使った「イモダコ」も絶品と評判が高い。

## 【観光】

粟島の観光シーズンは6月から8月にかけての夏期であり、海水浴や釣りを目的とした観光客が多く訪れている。島民の多くは、漁家民宿であり、観光収入によって生計の多くを支えているといえる。島内で行える観光活動には、釣りや海水浴の他に、トレッキングや観光船、大謀網漁見学、乗馬体験等がある。また、天然記念物のオオミズナギドリ営巣地且つ渡り鳥の中継地であることから、バーウォッチングとしても知られている。

## 【地域資源の概要】

### ●自然資源

- ・ 一年を通して水産資源に恵まれる。海藻も豊富である。
- ・ 春には野菜に困らない程の山菜が山に自生している。
- ・ 天然記念物のオオミズナギドリとその営巣地の存在。

### ●文化的資源

- ・ 島の中で培われてきた食文化（「ワッパ煮」、「芋たこ」、「じばさとりろ」、「つる藻の油炒め」、「鮑の酒蒸し」、「芽かぶのからし酢味噌」、「貽貝の竜田揚げ」等とそれに関する作業や知恵・技術）。
- ・ 獅子舞、神楽、民謡等の伝統文化（「釜谷獅子舞」「内浦神楽」「さっこい三下がり」など）。

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

### 島の文化の喪失の懸念

粟島は明治時代に3度の大火にみまわれ、古くからの文献・資料が消失してしまっている。自然環境と人々の生業との相互の関わりによって生まれ継承されてきた粟島独自の文化は、かつては青年会や婦人会などの島民同士の交流や、年間行事によって継承されてきたが、現在はそうした継承の場が失われており、多くの文化や知恵は年配者のみが知るものとなっている。少子高齢化の進行も伴い、伝統文化や生活文化は消失の危険に直面している。

粟島では平成27年度4月から島の文化を保存することを目的として、島の自然環境と人々の生業との相互の関わりを記録しフェノロジーカレンダーとしてまとめている。

### 地域資源の価値認識

前述のように栗島には豊かな自然資源や独自の文化的資源が存在しているが、島民がその価値を認識していないものが多くある。島民自身が栗島の資源の価値に気づき後世に継承していく意識を持つことが必要である。

### 文化継承の仕組みの構築

前述のように栗島ならではの生活文化、伝統文化は継承の場を失っている。エコツーリズムのように地域資源を保全・活用することによって継承していく仕組みを構築することも求められている。

以上を背景として、栗島の自然資源や生活文化資源の価値を顕在化させ住民意識を醸成すること、さらにエコツーリズム創造のためのアドバイスを頂きたく申請をした。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-----------|---|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成 28 年 3 月 4 日（金）～平成 28 年 3 月 6 日（日）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 場         | 所 | 新潟県栗島浦村                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| アドバイザー    |   | 北海道大学 国際広報メディア観光学高等研究センター 特任教授<br>真板 昭夫氏                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 参加者       |   | 栗島浦村村長、栗島浦村役場職員、栗島観光協会、栗島浦村文化遺産保全・活用実行委員会会長、栗島浦村教育委員会、栗島浦村保育園（、栗島浦村小中学校教員、他島民、合計 23 名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| スケジュール・方法 |   | <p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・観光協会と役場訪問（観光協会職員、及び村長、参与との顔合わせ）</li> <li>・栗島浦村文化遺産保全・活用実行委員会 H27 年度報告会 視察（島内での平成 27 年度の文化遺産保存と継承の取組みについて）</li> </ul> <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・島内視察（内浦、釜谷地区視察）</li> <li>・講演（「地域の宝探し」について。講演タイトル「『栗島浦村からの国おこし』地域の自慢を見つけることから始める『宝探し』」）</li> <li>・直売所・加工施設視察（島の物産について視察、アドバイス）</li> </ul> <p>【3 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出島</li> </ul> |

## (3) アドバイスの内容（議事録）

### 1) 講演会

- ・日本の町村の数は明治以前には 71,324（うち村の数は 60,000）あったが、現在は 1,718（うち村の数は 183）と大幅な減少となっている。この減少とともに各地域の文化も消失されてきている。今でも残っている村々に残る文化は、日本の「母文化」とも言われる。
- ・栗島浦村は、村であり続けた数少ない貴重な村のひとつである。
- ・観光とは、「国の光りを観る」ことであり、「光」とはその地域に住む人々が「最も自慢するもの」「他者に誇れるもの」であり、外部の価値観に合わせるものではない。自慢すべき「光」の多いところほど、観光での発展は持続化し、結果として観光客は増加していく。

- ・ こうした仕組みを用いた観光をエコツーリズムという。
- ・ エコツーリズムには「資源の保全」、「資源を活かした質の高い観光の提供」、「地域の振興・活性化」という3つの側面を持つ。
- ・ 地域の「風土」とは、「風の人」と「土の人」によって生み出されていく。つまり、地域外の人たち（風の人）との交流によって情報が運ばれ、それを地域の人（土の人）が受け取り、地域の自然・歴史等の文脈に合った新たな文化を生み出し「風土」がつくられる。
- ・ 地域には、「自然」、「生活環境」、「歴史・文化」、「産業」、「名人」という5つの「宝」がある。
- ・ この「宝」を探し出すためには、「地域生活の側から自然をみる」、「人と自然との相互関係について考察する」、「人間の営みにより維持されてきた自然や文化資源について評価する」という3つの側面が強調される必要がある。
- ・ 宝探しによる地域活性化に重要なことは、外部の人間が行うのではなく地域の人たちが行うことである。
- ・ 宝探しの各地の事例について紹介する。

（岩手県二戸市の事例、徳島県美郷村の事例、沖縄県南大東島の事例、滋賀県高島市の事例）

- ・ 宝探しを地域づくりに繋げるためには、すぐに出来るわけではなく、5つの段階がある。「宝を探す」段階、「宝を磨く」段階、「宝を誇る」段階、「宝を伝える」段階、「宝を活かす」段階。
- ・ 「宝探し」の意義とは、日常的な資源の価値の再発見と価値付けであり、それらを住民の人たち同士で共有し合う作業にある。こうした取組みが地域活性化の切り札として生かすことが出来る。
- ・ 「地域の宝探し」と「ブランド形成（宝興し）」をおこない、エコツーリズムという産業の枠組みをもちいることによって、地域の人々の発展のエネルギーとし武器としていくことが出来る。
- ・ フェノロジーカレンダーについて簡単に説明する。フェノロジーカレンダーとは、各地域の生活暦のことである。地域では、人々と自然との関わりによって暦が築かれている。自然の指標によって季節を感じとり活動をしている。1月～12月というのは後付されただけのものである。
- ・ フェノロジーカレンダーでは、いつ「宝」に出会えるのかという、地域の宝の旬が把握できる。
- ・ 旬の重なる宝の組み合わせにより、エコツアープログラムも作り出すことが出来る。
- ・ 地域の資源のマッチングビジネスも展開している（雑穀のブランド化、山菜と京都の料亭とのマッチング、ヤマブドウ酢の開発等）。
- ・ マッチングビジネスで大切な意識として、生産文化圏と消費文化圏での価値が異なるということ。例えば山菜の例。二戸市（生産文化圏）では大きなもの程価値が高いが、京都（消費文化圏）では、小さく上品なサイズが好まれる。
- ・ 地域の宝を地域の人たちが誇りに思い、自慢、発信していくことが重要である。

## 2) その他

- ・ 地域おこしをする際には、次世代つまり子供達に力を入れていくべきである。
- ・ 粟島でのエコツアーの可能性は大いにある。
- ・ 粟島だからこその資源を見出し、いかに売り出していくかが問題である。
- ・ 粟島を島の人たちの言葉で紹介する冊子やフェノロジーカレンダーの作成もすると良い。
- ・ 粟島で聞き書きをする場合は、中学生にさせることが良いのではないかな。



講演会の様子



加工施設の視察



講演会後のワークショップの様子

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |                                                                                                |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>「栗島浦村からの国おこし」</b><br>地域の自慢を見つけることから始める「宝探し」<br>主催：栗島観光協会                                                                                                                                                                                                                                                                                  |                                                                                                |
| 日時：平成28年3月5日(土) 13:30 ～ 16:00<br>会場：公民館                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                                                                                |
| 近年、日本では各地域の人と自然の関わりから生まれた暮らしの知恵や伝統等、様々な生活文化や、地域固有の資源として保全・活用し、地域活性化につなげる取組が行われています。<br>栗島の独自の生活や伝統文化は、栗島の地理的条件や自然環境に対応した島民の知恵や工夫により生まれ継承されてきました。これらは貴重な文化遺産であるとともに、観光客にとっては魅力的な資源となります。<br>今回は、日本や世界各地で各地域の人々と一緒に、地域資源の掘出し、保全・活用を通じた地域活性化の取組を20年以上にわたり実施してきた、真板昭夫先生をお招きし、地域資源の発掘や活用の方法、各地での取組等をお話いただきます。                                     |                                                                                                |
| <b>プログラム 13:30 ～ 16:00</b>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |                                                                                                |
| <b>■ 開会のあいさつ</b><br>(1) 「栗島浦村からの国おこし」<br>地域の自慢を見つけることから始める「宝探し」                                                                                                                                                                                                                                                                              |                                                                                                |
| 真板昭夫先生の経歴：<br>東京農業大学農学卒業。財)政策科学研究所にて環境政策及び地域政策を担当。その後財)自然環境研究センターにて野生動物植物のワイルドライフマネージメント研究。1991年よりエコツーリズムの研究を開始。1998年日本エコツーリズム協会設立。エコツーリズムによる日本各地の地域づくりのフィールドワーク研究。海外では、フィジー、ガラパゴスにてエコツーリズムのフィールドワーク研究。2001年東京大学農学部博士号を取得。同年、京都嵯峨芸術大学にて観光デザイン学科教授及び研究センター長。ポセキーズ「ふしぎな森のふしぎ先生」を担当。<br>アジア太平洋地域のほか、日本各地の自然・歴史・文化資源を柱としたエコツーリズムに関する調査・研究を進めている。 |  真板 昭夫 先生 |

講演会の広告

## (4) アドバイザーの派遣実施の効果

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- 実際の取組が生まれた。
  - ・ 栗島浦村の資源がエコツーリズムに活用できるという認識は持っていたが、実際の活動には移されていなかった、または継続されていない。今回を機に、実際の取組が動き始め、それに牽引され島民の意識にも変化が生じている（いい意味でのプレッシャーが加わったともいえる）。
- 栗島を誇りに思うきっかけとなった。
  - ・ 栗島浦村が「村」であり続けたことの価値を知ることが出来た。
  - ・ 「村」であり続けたからこそ、島の個性が残っており、それが島の自慢と島民の誇りに繋がることを理解した。
- 地域資源について理解が深まった。
  - ・ 日常の暮らし、島民の知恵・工夫・技に「宝」があることを理解した。
  - ・ 生産文化の地域と消費文化の地域で資源に対する価値観が異なることを理解した。
- エコツーリズムに対する意識が高まった。

- ・ エコツーリズムとは何かということについて理解が深まった。
- ・ 自然環境だけではなく、島の暮らし、文化もエコツーリズムの資源になることを理解した。

## 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- 島の資源活用についての協議の場が増加することが期待される。
- 過去にもエコツーリズムを試みた経緯があるが、改めて取り組みを始める機会となった。

## 3) 今後の取り組み

- 島でのエコツアーの実施
  - ・ 島民が実施したいと考えていたエコツアープログラムが実現に向けて進められるようになった。今年度中に全国の小中学生向けのエコツアーの実施が検討段階に入っている。
- 島の子供達による文化の継承
  - ・ 栗島浦村では、栗島浦村文化遺産保全・実行委員会を発足し、「文化遺産を活かした栗島ンの誇り醸成プロジェクト」（平成 27 年度「文化遺産を活かした地域活性化事業」（文化庁事業））を実施してきており、平成 27 年度は食文化を中心とした島の生活文化の記録を行ってきた。来年度は（採択の有無は未定だが）、島の年配者への聞き書きを実施する予定を立てている。今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業を機に、子供達を対象とした取組や、文化継承の場の創造に対する村内での理解が深まり、来年度予定している聞き書きでは、子供達が聞き手となって実施していくことが検討されている。
- 郷土料理の継承
  - ・ 前述のように、平成 27 年度には栗島浦村の食文化の記録を進めてきた。また、村の中でも「郷土料理を作ってみる会」が発足された。今後の食文化の記録の継続が期待され、「郷土料理を作ってみる会」の今後の活動展開のサポートも期待される。

## (5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

- ・ 取組体制について島民が主体者となる必要があることを理解した。
- ・ 特に他地域の事例の紹介を頂いたことによって、実感が湧き理解が深まった。
- ・ 地域の子供達への愛は、他の価値観では左右されない貴重な地域の宝であること（南大東村の砂浜の事例等から説明）への理解が深まった。
- ・ 地域の生業がその地域の個性を生み出しているということへの理解が深まり（南大東村のサトウキビ生産と生活の暦の事例）、栗島浦村でも当てはめて考えることが出来る。
- ・ 一方で、二戸市の雑穀の事例等の紹介から、地域内と外との価値観の違いにより、地域内では価値が見出されていないものも、外に向けては高い価値となるということへの理解が深まった。
- ・ 山菜の例等から、生産地と消費地との価値観の違いがあることを理解し、今後商品やプログラム等をつくる際の参考になった。

### 2) その他感想

- ・ 村の宝の無限の可能性について覚醒された感がある（島民コメント）

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

真板 昭夫氏 （北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 特任教授）

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

- ・ 島の食文化の記録継承への取組
- ・ 伝統民謡の継承を目的とした島民合唱団が結成されている
- ・ エコツアーの構想はあるが実施まで至っていない。

#### ②課題

- ・ 島の中で中心となり活動可能な人材を育成することと推進組織の体制構築が求められる。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

里海のアカモク、イソノリ、などの多様な海藻群落、アメフラシを始めとする磯海タッチング可能な海浜生物、地殻変動によって出来た岩石が海岸風景とその岩場でのオオミズナギドリの繁殖地

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

粟島は周辺が浅い海浜の地形となっていて多様な海浜生物が豊富で、子供達が身近に観察できる環境教育的な環境となっており、自然体験プログラムにはきわめて適した場所と言える。また地殻変動によって出来た岩石群が海岸風景を作っており、その島の風景を船でガイド付きツアー体験の可能性も考えられる。またその岩場にはオオミズナギドリの繁殖地があって県内ではここしか体験できない貴重な自然観察ツアーの可能性を秘めている。さらに里海に群生するアカモクを始めとする海草類はその採集や地場産の郷土色の体験も可能で、多種多様なエコツーリズムプログラムの考案が出来る可能性を秘めている。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

粟島浦村で宝探しに関する講演会を実施した。議事録は、（3）に記載の通り。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

エコツーリズム推進全体構想への取組予定は現在のところない。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

- ・ 粟島には「村」として存続してきただけの個性が強く残っている。その個性を島民の手で磨いていきましょう。
- ・ エコツーリズムを実施するための可能性は大いにある。まずは、島民が主体的に取り組み始めることが必要です。

## 3-6. 一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会

（富山県黒部市、入善町）

### （1）アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】黒部市：41,939人、入善町：25,774人（H27年11月末）

【面積】黒部市：427.96k㎡、入善町：71.29k㎡

【地勢】黒部市：黒部川流域 黒部川扇状地では左岸、入善町は扇状地の右岸

【気候、自然】

年間平均気温は平野部で14℃、年間降水量は平野部で2,277mm、山岳部で4,000mm以上と、我が国屈指の多雨多雪地帯となっております。

#### ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

立山黒部ジオパークは2014年8月に日本ジオパークに認定された。ジオツアーはジオパークにおける中核事業であるが、独自のジオツアーの企画・販売ができていない。

2013年からジオガイドを養成してきており、ジオツアーの企画・販売を行なう段階にあり、アドバイザー派遣の申請をした。

立山黒部ジオパーク協会内にジオツーリズム部会がありツアーの企画を担当している。部会は山岳ガイド、学芸員、（小規模な）旅行業者で構成されているが、直近でモデルコースの作成やモニターツアーの企画を手掛けている段階にある。

### （2）アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                         |
|-----------|---|---------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成28年1月27日（水）～平成28年1月29日（金）                             |
| 場         | 所 | 富山県黒部市宇奈月温泉 宇奈月公民館<br>黒部市（黒部川扇状地、宇奈月）、入善町内の見どころを視察      |
| ア         | ド | 株式会社ピッキオ マーケティングディレクター／取締役 楠部 真也氏                       |
| 参         | 加 | 者 計24名                                                  |
| スケジュール・方法 |   | 【1日目】視察<br>【2日目】講義、質疑応答、ツアーを企画①<br>【3日目】ツアーを企画②、販売方法の検討 |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

---

#### 1) 講義 1 『ピッキオのこれまでの歩み』の概略

- ・ 日本の観光業の歴史は、欧米・東南アジアに比べ浅い。日本の観光は移動費、宿泊費に予算をかけるが、サービスにお金をかけないことが特徴。星野リゾートはこの構造を変えたいと考えている。
- ・ ピッキオは星野リゾートの一部署であったが、現在は別法人。地域資源を活用したエコツアー・環境事業を展開。また、地域資源を保全するためのツキノワグマ保護管理、外来種対策、調査研究を展開。
- ・ 持続可能なエコツーリズムのためには「保全の仕組み」をベースに「エンターテインメント」を取り入れ、「ビジネス」として成立させることが必要である。
- ・ ビジネスとして成立させるためには顧客満足度が重要。ガイドの評価は顧客アンケート結果で行われる。アンケートは後日、郵送してもらうことで客観性を高めている。
- ・ データの蓄積が成功の可能性を高める。インバウンドを強化するためには地域別の特徴を理解する必要がある。
- ・ ピッキオの価格づけは海外やディズニーを参考にしている。国内の価格を調べて参考にすることも有効である。
- ・ ピッキオでの豊富な体験談（失敗の積み重ねがあつて、数少ない成功がある）を織り交ぜての中身の濃い講義であった。

Q： 生涯学習のツアーではあれもこれも入れたくなるが、どう思うか？

A： あれもこれも入れると顧客にとって印象が薄くなるので、絞り込んだほうがよい。

Q： ジオツアーとエコツアーの考え方はいかに。

A： 区分して考えないほうがよい。ジオにこだわると成功の可能性が低くなる。お客さまが楽しめることは何かの視点で考えればよい。結果としてジオの要素も入る。

Q： プログラムの長さはどの程度がよいか。

A： 地域によって違う。軽井沢では2時間程度のものを連続で入れる。知床は1日か半日のものが売れる。

Q： 海外にはどのように発信しようとしているのか。

A： BBC の番組やナショナルジオグラフィックはターゲットと考えている。

Q： 地元での発信手段は？

A： 地元向けのモニターツアーを企画し、ホテルのフロントとその家族にも参加してもらう。地元のマスメディアにも来てもらう。

Q： アンケートの工夫は？

A： 郵送してもらう。評価は2.5以上（最高点3点）でないと不満ありと認識。

Q： 売れ行きが悪いツアーを見切る基準は何か。

A： 売れなくても、CSが高いものは改善策を考える。ピッキオでしかできないものは売り方を考える。

## 2) 講義2『ツアー作成の基本』の概略

- ・ 市場を知ることが大切。ターゲットを絞ったうえで、ターゲットに楽しんでもらえそうな体験型ツアーを男女3～4人のチームで考える。
- ・ 販売方法は多様で正解を探すのは難しい。実施時間が異なるだけで販売ルートは変わる。ターゲットとなるお客様がどのような人たちかを分析して対応すると失敗しにくい。
- ・ いずれにしろ最初は売れないことを覚悟。顧客のアンケートを丁寧に分析する等して試行錯誤しながら地道に改善する。

### 【記録写真】



入善町 「杉沢の沢スギ」視察（1月27日・午後）



プレゼン中の様子（1月28日・午前）



ツアーの素材を洗い出し中（1月28日・午後）



ツアー企画（1月28日・午後）



ツアーの販売・発信方法を検討中（1月29日・午後）

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

宇奈月温泉の青年部でもツアーをやりたいとの声はあったが、実施されずにいる。  
今回企画したツアーをジオガイド、青年部が実行部隊として実施できそうな実感を得た。  
赤字の事業を試行錯誤しながら黒字化した体験が、ツアー黎明期の当地の参加者にとって貴重な話が多く、参考になった。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

持続可能性が大前提であることの認識が高まった。自然保護の啓蒙要素をツアーのなかに取り入れていくことが期待される。

### 3) 今後の取り組み

自然資源を活かした体験型ツアーの開発・販売を実施していく。

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

アドバイザーが話された内容はピッキオでの実践に基づくもので大いに参考になる内容でした。その結果として、ジオ、エコにこだわらず、自然資産を活かしたお客さんが楽しめる体験型ツアーの企画・販売の全体的な流れを理解できました。当協会の今後の活動の指針になると確信しています。

### 2) その他感想

ピッキオが赤字から黒字転化する過程の努力を垣間見ることができた。ジオツアーをビジネスとして成立させたいと当協会も考えていますが、その道のりは険しいと覚悟し地道に継続していく必要があると思っています。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

楠部 真也氏 (株式会社 ピッキオ マーケティングディレクター/取締役)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

立山黒部ジオパーク協会を中心にジオツアーの取り組みを実施している。

#### ②課題

ガイドの担い手が少なく、実業として成立していない。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

宇奈月温泉、立山黒部アルペンルート

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

地域資源としては、近隣の地域と大きな違いはない一方で、宇奈月温泉という温泉地（観光地）があり既に一定の観光客が滞在している。この点は近隣地域と比べて圧倒的に有利となる。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

- ピッキオの取り組みの説明とこれまでの歩みについて
- 体験プログラムを作るノウハウと実際のプログラムの立案サポート

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

現段階は市町村レベルでの合意形成はなく、これから検討を始めるという段階

#### ②全体構想策定への意向について

宇奈月温泉に具体的なメリットがあるのであれば検討に入る可能性はあると思われる。

#### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まず、地域にとって体験プログラムがプラスに作用するという認識を高める必要があると思われる。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

黒部・宇奈月温泉の地域は立山・黒部アルペンルートにも近く、また日本海も非常に近いこともあって、自然資源は非常に豊富であると感じました。宇奈月温泉と黒部市のエリアだけでは厳しいのですが、前述のエリアを含めて考えていくのであれば、望みはあると思います。その点において今回の講習会の参加者の中に立山・黒部アルペンルートの方や隣接する自治体の方も含まれていたことはよかったと感じました。

また、ジオツーリズムにしてもエコツーリズムにしても必要となる宿泊施設が多数あることはプラスと考えられます。自然体験プログラムは単独では余程の自然資源があるか、非常に効果的な販売促進策を行っていない限り集客効果は期待できません。一方で観光地にとってはその満足度を上げる効果が期待でき、その地域の宿泊施設にとっては、リピーター増⇒閑散期対策にもつながっていく可能性があります。

今回も一部の宿泊施設の方々にはご協力いただいております、この流れがもう少し強くなればガイド業で生計を立てられるような人材も現れるのではないかと期待します。

## 3-7. 南アルプス市 市民部芦安窓口サービスセンター

(山梨県南アルプス市)

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 72,523 人

【面積】 264.07k m<sup>2</sup>

【地勢】

南アルプス市は、山梨県の西側に位置し、東西に細長い形をしている。北は八ヶ岳、南には富士山を望み、名前の由来である南アルプス山脈のふもとにある美しい自然に囲まれた地域である。

【気候、自然】

御勅使川扇状地やそれに続く低地にかけ、里山、果樹地帯、そして田園地帯へと広がる。市内のほとんどを山林・農地が占めており、北岳を有する南アルプス山脈やスモモをはじめとした果樹栽培などの農地が多い。盆地特有の内陸性気候は、年間を通すと50度近い寒暖差を生み、四季折々の美しい風景と、おいしい農作物を育み“日本一早いさくらんぼ狩り”など観光果樹園目当ての観光客や登山観光客にとって魅力的な地域となっている。

【歴史】

縄文時代の鋳物師屋遺跡

甲斐源氏ゆかりの史跡

南アルプスの麓での林業

交い（甲斐）の国として、太平洋～日本海の文化が交流している

【観光】

果樹（スモモ・モモ・サクランボ・ブドウ 等）

南アルプス山脈（北岳・間ノ岳（標高日本第2・3位） 等）

【地域資源の概要】

山岳地帯への玄関口である芦安地区は、ほぼ全域が山間部であり、市内の他の地域とは異なる様相で発展してきた。特に芦安の特産品である大豆の発酵食品「しょうゆの実」は、全国で同名の食物がある中、製造方法・外観・食味全てが芦安独自の発酵食品であり、他地域では入手不可能な食物であることが最近になり判明した。

作り手に対しても独自のルールが口伝で伝えられており、現在もその言い伝えが守られているなど地域独自の文化が色濃く反映された食物でもある。



## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

芦安地区では、これまで山岳観光を主とした行政主導の地域振興策が主流であったが、平成 26 年度に「地域住民が自ら考え自ら実行する」をテーマとして、地域住民有志による「芦安みらいサロン」の立ち上げを行った。現在サロンでは、参加者が定期的な会合を開きながら「地域独自製法の食品しょうゆの実」「地域人材を活用した教育」「そばを利用した拠点づくり」「空き家の利活用」の 4 つの地域資源・地域課題に対しての取り組みが行われているところである。

しかしながら、地域資源をいかに利用するか、情報発信していくか、という点で知識・経験不足等により思うように住民の想いが実現できていないというのが現状であった。

こうした課題を解決するため、エコツーリズムに対しての理解を深め、地域住民のアイデアを実現するべく、講義やエコツアーの作り方等を通じて地域の魅力を形にする手法を学ぶため今回の申請に至った。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |    |                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-----------|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時  | 平成 28 年 2 月 16 日（火）19 時 30 分～22 時                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 場         | 所  | 南アルプス市芦安地区 健康管理センター                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| ア         | ド  | バ                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| イ         | ザ  | ー                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 株         | 式  | 会                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 社         | 生  | 態                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 計         | 画  | 研                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 究         | 所  | 早                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 川         | 事  | 業                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 所         | ／  | 南                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| ア         | ル  | プ                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| ス         | 生  | 態                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 邑         | 大  | 西                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 大         | 西  | 信                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 正         | 氏  |                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 参         | 加  | 者                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 計         | 12 | 名                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| スケジュール・方法 |    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 近隣自治体のためアドバイザーには車で移動していただき、その後、2 時間程度の講義形式でのアドバイスをいただいた。</li> <li>・ 事前の打合せや電話・メールで関係資料の情報提供を通じて、派遣地域の十分な理解が得られるように連絡を密にとりあった。</li> <li>・ アドバイス内容については、エコツーリズムとは何か、といった総論的な内容や現在地域で取り組んでいるいくつかのテーマをもとに、さまざまな分野に応用できるような基礎的な講義をしていただいた。</li> </ul> |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

---

#### 講義内容について

当日は、エコツーリズムとは何か、地域資源とは何か、プログラムにするにはどうしたらよいか。という基礎的な内容で進んだ。

#### 1) ツーリズムとは

体験型・交流型の要素を取り入れた旅行の形態のことで、地域の特性を活かしやすいので、地域活性化につながるものと期待されている。

#### 2) 着地型観光とは

観光客の受け入れ先が地元ならではのプログラムを企画し、参加者が現地集合、現地解散する新しい観光の形態のことで、従来の「発地型観光」と比べて、地域の振興につながると期待されている。

#### 3) エコツーリズムの3要素

エコツーリズムには三つの要素がある。1つめは、旅行者にとってより旅を楽しく感じてもらうこと。2つめは、自然文化にとってより自然・文化が守られるということ。3つめは、地域の人々にとってより良い暮らしにつながること。

#### 4) 地域資源とは

地域資源とは場のメッセージである。地域とは、文化的要素、地質的要素、生物的要素からなっており、他の地域と違う「〇〇地域らしさ」を求めて顧客はやってくる。従って、地域独自の物語があり、その場所にしかないものや、周りから見ると非日常的なものが商品になりやすいが、商品として「らしさ」が売れるかどうかは別物である。

#### 5) プログラムにするには

ニーズとターゲットを研究することが重要。ニーズにはBe ニーズ（潜在）、Do ニーズ（行動）、Have ニーズ（獲得）の3つがあり、目的であるBe ニーズと、手段のDo ニーズHave ニーズに分けられる。一番大切にしたい部分は、Be ニーズ。ターゲットがどのような目的を求めているのかを分析することで、売れるプログラムになるかどうかが決まる。

## 6) パーフェクトデーの作成（ワークショップ）

これまでのことを踏まえて、パーフェクトデーの作成を行った。「お客様」に対してではなく「自分の大切な人」に向けてプランを作成。2人1組でお互いのプランに対しての意見交換を行った。

## 7) 良いチラシ・悪いチラシの違いについて

（実例を見ながら）良いチラシとそうでないチラシの違いは、お客様がわかりやすいチラシになっているかどうか、お客様が求めているものかどうかを見るとわかりやすい。

良いチラシは誰に対して情報発信しているかが明確になっており、実施内容も関連したものになっているためお客様に伝わりやすい。逆に、誰に対して発信しているのかターゲットがわかりにくいチラシはお客様に届きにくい。

### 【記録写真】



## **(4) アドバイザー派遣実施の効果**

---

### **1) 参加者や関係者に与えた効果**

エコツーリズムとは何か、地域資源とは何か、といった知識が共有されたことで、芦安地区にある魅力の再発見につながりやすくなった。

### **2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）**

既に取り組んでいて、一見すると成果が期待できないような資源であっても、一ひねり加えることや顧客のニーズを汲み取ること、ターゲットに対して的確に伝えることでの重要性が理解できたので、現在取り組んでいるものをPRする時にこれまでと違ったPR方法が活用できる。

### **3) 今後の取り組み**

地域で取り組んでいる様々な振興事業やイベントについて、「芦安らしさ」を加えてみることや、伝えたい相手に対するニーズ研究を行った上でものごとに取り組む。

現在一部の地域住民で取り組んでいる地域振興を、エコツーリズムの概念等を周知することで、地域の住民の輪を広げ、集落全体でガイドをして観光客等を受け入れられるような地域づくりを進めていきたい。

## **(5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想**

---

### **1) 参考となった事項**

山梨県早川町 南アルプス生態邑 ヘルシー美里

<http://www.hayakawa-eco.com/misato/>

### **2) その他感想**

ニーズ研究の重要性やアドバイザー自らの失敗談など、実際の事例を交えた講義内容だった為、参加者に継続することが重要ということが伝わった。また、地域を大事にすることの大切さがわかりやすく、エコツーリズムを通じて地域への愛情や誇りが持てるような講義であった。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

大西 信正氏 (南アルプス市芦安地区 健康管理センター)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

平成 26 年度より地域住民が様々な意見や取り組みを話し合える「芦安みらいサロン」を作り、定期的に集まって活動している。様々な取り組みで自主財源も確保し、今後も活動が継続できる事業の成果が出てきた。地域資源も見つかり始めている。

#### ②課題

地域住民が魅力ある資源を発掘しているが、その資源をどのようにとらえ、発信する仕組みがわからない状態である。またこの資源を使用してツアー等でお客様を集客したいがその方法がわからない状態である。消費型のツアーにならないようにするための概念も理解する必要があると思われる。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

南アルプス自然。南アルプスの登山の玄関口としての集落。また、山奥の集落での暮らし。その山奥での生活で食べている、そば、しょうゆの実など。特にしょうゆの実。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

日本で二番目に高い北岳では、1871 年より登山の歴史がある。その登山のブランドが出来ており、年間何万人もの登山客が来ていることも重要な点である。集客に難しい地域が多い中、登山をいう Do needs で集客が出来ています。その南アルプスは世界的にみても貴重な資源だという点も注目されます。また地域資源を保護する活動は有名です。それを観光につなげる取り組みは、今後も注目され地域の活性化にはとても有効だと思います。登山以外にも観光により保全できる地域の自然や暮らしがあるので、そこへの取り組みがあることによって、年間通じて観光の方がこれられると思います。

地元食の「しょうゆの実」は、全国で 4 県でしか作られておらず、芦安地域は独自のものである。

山奥の暮らしは都会の方には非日常で新鮮である。また、都会の方の生活を見直す機会につながると、来客された方はファンになりやすい。登山は通過型だが、自然や文化を資源とした、滞在型の観光の可能性を強く感じています。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

- ・ 南アルプス市からの希望により、2 点に絞り「エコツーリズムについて」「ツアーで集客するためのマーケティングの視点」の講義をした。
- ・ 「エコツーリズムについて」は、サステイナブルな取り組みのための 3 つの視点、着地型観光などを伝え、例を挙げて他の地域の取り組みを話した。
- ・ 「ツアーで集客するためのマーケティングの視点」では、ニーズのとらえ方、ターゲットの重要性についての講義をした。

#### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

##### ①全体構想への取組状況について

- ・ 未定

##### ②全体構想策定への意向について

- ・ 未定

##### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

- ・ 地域の取り組みは始まったばかりで、エコツーリズムの理解を進めることが必要。
- ・ 観光に関わる以外の方もいらっしゃるの、ボトムアップで少しずつ、エコツーリズムの取り組みを進める必要性を感じた。

#### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

##### ◆観光を2つに分けて考えることが重要です。

- ・ 登山で来ている観光客への戦略
- ・ 観光客を呼び込むための戦略

登山のお客様は地域には通過型のお客様だと思われます。通過型は消費観光客になりやすいので、芦安地域を目的に来られるお客様を作ることが、観光を使った地域保全と活性化には重要です。

##### ◆地域資源の整理

しょうゆの実等とても良い資源がありますが、それ以外の資源の整理が必要です。その視点は、地元の視点・お客様の視点など違った立場での地域資源の価値を整理することです。地域にお住まいの方は、地域色に突出している資源はわかりやすいですが、その他の資源はお客様の立場になれば見えてくるものもあります。資源の整理をすると、保護・保全しないと見えてくるものも見えてきます。

##### ◆ターゲットによるセグメンテーション作り

まず、地域の方がニーズの理解を深める。そしてターゲットを見据えて資源を提供する方法を考えることが重要です。いいものは売れるとは限りません。資源をほしい人に届ける・資源をほしいと思うニーズを作る、ことが重要です。観光には欠かせない視点です。

##### ◆地域資源の保全

既に取り組みされているかもしれませんが、自然への保護・保全へのルール作りも重要だと思います。自然環境は、観光により消費され、地域個体群が絶滅するようなことが多くみられます。そのようなことが起きないためには、1. 自然（状態）の把握、2. 評価、3. 保全対策、4. 実行が重要かと思います。特に南アルプスには貴重な生物（植物）がたくさん生息しています。国立公園内は保護されていますが、芦安地域でも保全をする仕組みを作られることをお勧めします。

##### ◆ガイドングの重要性

ツアー等を開催するためには、地域資源の良さ以外に、ガイドの存在が重要です。芦安みらいサロンに集まっている方が、担っていくことになると思いますが、それぞれの個性・力量に合わせたガイドの方法の確立が必要かと思います。そのためにガイドのテクニックやホスピタリティを学ぶ機会を定期的に持たれることが必要です。

##### ◆コーディネーターの確立

上記の事業を進めるには、コーディネーターの存在が重要です。誰がどのように行うのか？そのサポート体制なども作っていかれるとよいと思います。

## 3-8. 原村観光連盟（長野県諏訪郡原村）

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 人口 7,855 人、世帯数 3,119 世帯（平成 28 年 1 月 31 日現在）

【面積】 43.26 k m<sup>2</sup>

【地勢】

原村は八ヶ岳と諏訪湖の間に広がる高原（標高 900m～1,300m）に位置する村です。

新宿から特急「あずさ」でも中央高速道を車でも約 2 時間半。名古屋から特急「しなの」（塩尻乗換え）でも、中央高速道でも 3 時間程度の手軽さです。

長野県でも、こんなに山や谷が少ない村はないでしょう。ほとんどの集落が、村中心部まで車で 5 分以内です。また、遠方の別荘地からでも 10 分程度です。

このため小中学校、保育園がそれぞれ 1 箇所です。公共施設の全てが役場から半径約 250m 以内に集中していて、コンパクトな行政がなされています。

原村は、人が自然とともに安らげる保養地を目指してきました。そのため、土地利用のゾーニングを行い、村独自の「環境保全条例」をつくって建物の建築を規制し、自然保護に努めています。

【気候】

一年を通じて降水量は少なく、湿度も低いので気候はさわやかです。冬の寒さは厳しい（1 月平均気温 -3.2℃）ものがありますが、雪の量は心配するほどではありません。

【歴史】

今から 400 年程さかのぼる江戸時代初期、諏訪大社神域のお狩場である神野を新田開発して集落が形成されたのを始まりとします。明治 8 年村政が施行されて以来約 140 年、1 度の合併を経ることなく「原村」としての歴史を刻んできました。

【地域の概要】

村の基幹作物は冷涼な気候と長い日照時間を利用しての高原野菜と花卉、それと水稻です。夏場のセロリーは 70 万ケースを出荷し日本一、ハウス栽培のアネモネも日本一の出荷量です。この他にレタス、パセリ、ほうれん草、又花卉ではスターチスや宿根かすみ草、シクラメン等多岐にわたります。

八ヶ岳山麓の避暑地として観光業も盛んで、ペンションビレッジがあります。ペンションビレッジは昭和 48 年 9 月に P S D（ペンション・システム・デベロップメント）により 6 軒が着工され、営業が開始されました。現在は 60 軒を超すペンションが営業しており、第 1 と第 2 の二つのペンションビレッジがあります。

【地域資源の概要】

#### ●自然資源

- ・ 一年を通して水産資源に恵まれる。海藻も豊富である。
- ・ 春には野菜に困らない程の山菜が山に自生している。
- ・ 天然記念物のオオミズナギドリとその営巣地の存在。

#### ●文化的資源

- ・ 島の中で培われてきた食文化（「ワッパ煮」、「芋たこ」、「じばさとりろ」、「つる藻の油炒め」、「鮑の酒蒸し」、「芽かぶのからし酢味噌」、「貽貝の竜田揚げ」等とそれに関する作業や知恵・技術）。
- ・ 獅子舞、神楽、民謡等の伝統文化（「釜谷獅子舞」「内浦神楽」「さっこい三下がり」
- ・ など）。

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

原村には 60 軒を超すペンションがあるが、一時期のペンションブームのピーク時（平成 4 年）には 38 万人あった観光客は、平成 22 年には 18 万人まで減少し、ここ数年は 19 万人～20 万人で推移している。減少傾向に歯止めがかかっている状態ではあるが、宿泊施設を活用した滞在型観光が課題となってきた。今後は、地元住民が主体となるガイドやガイド団体の育成が必要と考える。村内にあるさまざまな資源を取り入れたエコツーリズムを活発化させ、地域住民の啓発、人材の発掘、取組体制の構築を行い住民・観光事業者・行政の係わり方の方法を明確化したい。

### 【これまでの取組】

- ・ 観光関連でのランチミーティング（原村の観光に何が必要か）
- ・ エコツーリズムに関連した商品の洗い出しと、提案
- ・ 地域住民を対象に「観光地域づくりを考える会」の開催（観光、移住に何が必要か）

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|   |   |                                                                                                                           |
|---|---|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日 | 時 | 【1 回目】平成 28 年 2 月 7 日（日）<br>【2 回目】平成 28 年 2 月 27 日（土）～28 日（日）                                                             |
| 場 | 所 | 長野県諏訪郡原村                                                                                                                  |
| ア | ド | バ                                                                                                                         |
| イ | ャ | ー                                                                                                                         |
| ザ |   | JTIC. SWISS 代表 山田 桂一郎氏                                                                                                    |
| 参 | 加 | 者                                                                                                                         |
|   |   | 【1 回目】計 50 名<br>【2 回目】計 42 名                                                                                              |
| ス | ケ | ジ                                                                                                                         |
| ュ | ー | ル                                                                                                                         |
|   |   | 【1 回目】「選ばれ続ける地域とは」 講演会<br>【2 回目】<br>1 日目 村内視察 地域資源の素材探し<br>2 日目 前回講演会の振り返り、ワークショップ、エコツーリズム（稼げる地域にするため）に必要な仕組、組織について議論、まとめ |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

---

#### 【1回目 2/7 講演会】

#### ○演題：選ばれ続ける地域とは

- ・ 私（講師）がいくら面倒を見ても、地域の方が主体となってやってくれない限りは結果は出ない。
- ・ 地域が稼ぐ事が悪く言われるが、地域が稼がないと、守るものも守れない。
- ・ 住民のエゴ（しらがみ）が出るとうまくいかない。
- ・ どんな事業をやっても良いが、キーワードは2つ「自立」と「持続」。これができないならば止めた方が良い。箱物ばかり作っても意味がない。いずれダメになる。
- ・ 農業だけ、観光だけ…ではダメ。地域がひとつになって、そこに住み、稼ぎ、お金を使って、税金を払う人たちが増えなければ、地域は活性化されない。企業誘致しても地元の採用はなく、ロボットしか動かないのでは意味がない。「稼ぐ力」は行政がやるのではなく、住民の総合力で稼がないと地域は維持できない。農業などの基幹産業だけでは不十分。
- ・ 観光をビジネスと考えて、住民以外の人に来てお金を使う事、外貨獲得をすることが重要。観光客はほしいが、観光者はいらない。お金を使ってもらうから「客」である。
- ・ ちょっと日帰りであるのと、わざわざ遠くから来るのでは、後者の方が明らかにお金を使う。エコツアーを考える時は、わざわざ遠くから来る企画を考えなければいけない。
- ・ 国のデータでは、国民が1人減ると124万円、10人減ると1240万円の消費が1年間で減る事になる。原村では、10年で114人増えているが、生産年齢人口は343人減っている。Iターンの人もいるが、それ以上に若い人が外へ出て行っている。財政力指数は0.37しかない。自分たちで稼げていない。この割合から行くと、道1本直せないはずだ。
- ・ 原村は首都圏が近い。お金を払いたい人が沢山いる。お金を払っても来なくなる魅力があれば価値を上げられる。「ここに来ないと～できないぞ」という事が全面に出ないとダメ。そういう商売が必要。地域の魅力を使って稼いでください。伝統、風習、自然環境を守ってください。あるものを使い、ない物ねだりをしない。新しく作るならば稼げる形にする。山を見て帰るのではお金は落ちない。それがどのくらい良いものか解説してお金を稼ぐ。そこで滞在型エコツアーが必要となる。
- ・ 今後原村でも「宿泊税」が必要。民泊の実態も明らかになる。観光連盟で少々手数料を取ったくらいでは組織の維持管理は難しい。
- ・ エコツーリズムはこの地域のスタイルでやらないと失敗する。他（成功している地域）はお手本になるが、真似をしてはいけない。
- ・ 泊まった方が次の日に2時間いるとお昼を食べる、お昼を食べた方がもう2時間いると物を買ったりと消費に繋がる。さらにも2時間いるともう1泊しようとなる。ツアープログラムを持っていないと時間消費にならない。エコツーリズムは時間を使って楽しんでもらう事で経済効果が高まる。
- ・ 事業にはマーケティングが絶対に必要。マーケティングとは、客が本当に欲しい物を用意して買ってもらう事。売り続ける仕組み作り。
- ・ PRをすればお客が来ると思っている。これでは効果がない。お金がかかって効果がない事はやめれば良い。
- ・ 原村の知名度が上がったことだけではお客は来ない。原村へ来る理由があれば良い。
- ・ 日本の観光のダメなところは、お客様のフィードバックの仕組みがない。個々の宿泊施設、飲食店でやってもそこだけで終わってしまう。顧客データを皆で共有した方が儲かることに気が付かないといけない。

〈質疑・応答〉

- 質： エコはお金を使わないイメージがあったが、むしろお金を沢山使って仕組を作らなければいけない事がわかった。生産年齢人口の件で、原村は高齢者の就労人口が多く、死ぬまで働くイメージがある。客観的にこの地域の売りやPRポイントはなにか。
- 答： 農業にしても働き方をどうするか考えて、もっと成果、パフォーマンスを出していかないといけない。大事なことは、どのような地域にしたいか。農業は食べていくための手段。自分たちの息子、娘、孫にどんな将来を築いてあげたいか、将来像から考えないとブランドの話しは出来ない。将来像が決まると手法も決まってくる。
- ブランドを安易に扱うと大失敗する。自分たちのテーマコンセプト（将来像）から外れてはダメ。
- 質： 観光について、いままでは個人で動いてきた。観光連盟等の組織に従ったほうがよいか。
- 答： 村に関しても、皆が積極的に動かないといけない。まずは自らが動いて、行政は後からが成功している地域。
- 質： 成功している観光地では、客の消費額をどのくらい見込んでいるのか。
- 答： 上げるだけ上げてください。高くすることで底辺が広がる。スイスでは年間1億2000万円をレジャーで使える人たちをターゲットにしている。B級を揃えてもダメ。ダメな地域ほど単発イベントをやりまくる。
- 質： 村を外部から見たイメージと住民が見たイメージは違うと思う。（講師が）客人として来た時の印象は？
- 答： 農作物の質の高さはブランドができているが、村のブランドはセロリだけで、それが地域のブランドになっていない。村のイメージとしては違和感を感じている。稼げて、将来に渡って「やるべき」と思えばやればいいし、「どう見てもダメだ」と思う事は手を付けてはいけない。誰かの責任ではなく、全ては皆さんの責任。最終的には人を育てられるかにかかっている。
- 質： 講演を聞いて、どのような村にしていくか議論が必要で、メリットが出せるビジョンをどう作るかが大切。それを作るのは人間。地方の人材育成はどうやったらいいか、どういう人材を集めたらいいのか。
- 答： 大事なのは、肩書き抜きで話し合える場が必要。実際に活動を通さないと人は育たない。講習会で先生の話しを聞いたくらいでは人は育たない。
- 質： 原村は、役場、観光連盟、住民の役割がバラバラ。うまく行っているところはどのような仕組みになっているのか。
- 答： 稼ぐ事（商売の事）は行政に関係がない。規制緩和は行政の役割。まずは皆さんが議論すること。原村のファンクラブを観光連盟の顧客データベースにしても良い。ある町では、町民カードを作って、村の施設（図書館、プール）等を使うとポイントが付き、ポイントを町の手数料、病院等で地域通貨として使っている。そのような仕組みを連盟が考えるだけでも流れは作れるし、お客様への新しい企画を立てやすくなる。そこに行政は関係がない。

以上

## 【2回目 2/28 ワークショップ】

### ○前回（2/7）の振り返り

- ・ エコツーリズムは地域の環境を保全、保護しながら生かすこと。地域が稼いで利益をだし、税金を納めないと社会保障どころか環境保全する資金も得られない。お金の落とし方としては、ガイドが案内するツアープログラムを作り、お金を回す事を考える。
- ・ 観光施設（館物）を作ってもすぐに飽きられ、ランニングコストがかかって役に立たないものが多い。それより、（客に）1分でも長く滞在してもらった方が経済効果が高い。旅は異文化体験。地域に残っている普遍的なこだわりを大事にしなければいけない。うまくいっている地域ほど、ビジョンが明確化されていて、それに向かったの取組が明記されている。
- ・ 日本の悪い所は、単年度の補助事業で予算消化で終わってしまう。この地域ではどんな価値をお客様に提供できるのか、地域のねらい（ものごとを計画的に進められる理念）が必要。テーマコンセプトは決めたら変えてはいけない。ブランドにならない。
- ・ 軽井沢での会議（観光業の人が集まる）で「原村へ行く」と言ったが誰も原村を知らなかった。

○北海道 弟子屈町の事例

○NHKで紹介された事例 2件（ビデオ上映）

○エコツーリズムを推進するのに原村にはどんな仕組、組織が必要か班に分かれて話し合い。（4班に分かれる）

- ・ 話し合いの結果発表

- 1班： 既存団体をまとめる組織が必要。バラバラになっている組織がそれぞれどんな活動をしているのかを認識し、協力関係を築く。
- 2班： 村内で活動するグループが参加する協議会が必要。観光連盟の法人化を目指す。
- 3班： ①この地域で何ができて、何ができないのかを分析する組織、②前者①を外に説明する組織、③外貨獲得のために外がこの地域に何を求めているか調査する組織、④実際のプログラムを作っていく組織が必要。
- 4班： 自分たちが原村の魅力を理解し、把握する。はっきり説明できる魅力を議論する会がまずは必要。そこから「魅力を確定する会」「仕組を作る会」「稼ぐ会」と育っていけば良い。今は地域の問題点も共有できていない。

○講師 まとめ

- ・ 沢山の議論をしてほしい。それぞれの団体（JA、観光連盟等）がそれぞれに動いていて意思疎通ができていない。地域をどうするか、稼ぐにはどうするか、地域のみなさんが集まって動かないといけない。
- ・ 群馬県のみなみ町などは、「エコツーリズム推進法認定団体」になっている。認定団体が特定観光資源として指定すると、法指定となり、罰金、立ち入り制限を設けることができる。二次交通も地域内は白ナンバーで送迎でき、ツアーにも使える。これ（認定団体）を検討しても良い。
- ・ 最後に自分の使った椅子、机は片づけてください。このくらいの事が出来なければ他の事は出来ません。

以上

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・それぞれの団体の活動ではなく、「稼げる地域」のために地域全体（農業、商業、工業）のまとまりが必要な事に気づかされた。
- ・「稼げる地域」にするために議論、考える組織が必要。
- ・この地域の「あたりまえの魅力」を「真の魅力」にしなければいけない事がわかった。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・講演会、ワークショップ終了後、参加者（若手）が実際に行動に移し、「地域が、観光連盟が稼げる部会を作る」という気運が高まっている。

### 3) 今後の取り組み

- ・まずは、原村の魅力を理解する。
- ・地域が連携でき、議論できる組織（部会）を立ち上げる。
- ・地域が稼げるエコツーリズムツアーを考える。

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

#### ○北海道 弟子屈町の事例

- ・色々ある協議会を集約し、8つの専門部会を作った。
- ・どの部会でも、住民は自由に参加できる。
- ・自分たちで出資して、旅行会社を立ち上げた。

#### ○NHK放映事例

- ・地元の小学生、園児のツアーガイド

### 2) その他感想

- ・「稼げる地域」を作るため、それぞれではなく、地域住民全体でひとつのビジョンに向かって行動に移さなければいけない。原村は地域のまとまり（ひとつのビジョンに向う）という一歩から始めなければいけないと感じた。
- ・村の魅力を考える事も発信する事もそして行動することも住民。住民一人一人が村の資源に誇りを持ち、発信していくことで、若い世代の都会への流出防止、Uターンに繋がると考える。地元の小学生や園児までも巻き込むくらいのガイドの養成は将来の地域振興に必要なと思った。

【記録写真】

2/7 講演会・2/28 ワークショップ 写真



2/7 山田先生「選ばれ続ける地域とは」講演会 質疑応答



2/28 ワークショップ 写真



村内視察 (水路)



2/28 ワークショップ



2/28 グループセッション 「原村に必要な組織は？」グループセッション 発表

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

山田 桂一郎氏 (JTIC. SWISS 代表)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

原村では、第5次総合計画を策定する中で下記の様な施策を推進しようとしている。

◎観光を中心とした、各産業間の連携と「原村ブランド」の創出

○住民参画による体験型観光の育成（重点施策）

体験型・滞在型の観光の促進のため、地域特性を活かした体験施設のネットワーク化、情報発信拠点の設置

○農業との連携による活性化

観光農園の整備、宿泊型農業体験システムの構築

○その他：森林を活用した観光振興、各種地域資源を利用した活性化、観光推進体制の充実、観光バス利用対策の推進

◎原村ブランドを活かした観光の振興

○観光拠点の再生とネットワークの整備（重点施策）

総合案内機能の整備、情報発信の強化

○星・音楽をテーマとした観光ブランド

原村ならではの観光ブランドをホームページ、観光キャンペーン（イベント）により情報発信し、宿泊・滞在へ誘導

現在、原村観光連盟と村内の若手を中心となり、原村の観光事業に関するランチミーティングやエコツーリズムに関したプログラム・ツアー等の商品提案だけでなく、村民を対象にした「観光地域づくりを考える会」等の観光産業を活性化するための活動が始まったところである。

#### ②課題

これまで、原村の観光産業は約60軒のペンションを中心とした宿泊事業者であった。平成4年度をピークとしたペンションブームには約38万人の観光客が訪れたが、平成22年には約18万人へ減少、近年は約19万人～20万人で推移している。現在、観光産業の主役であったペンション経営者の高齢化（ほとんど後継者がいない）と共に多くの既存事業者がやる気を無くした状態になり、多くの事業や活動が停滞している。

今後、策定中の第5次総合計画にある施策を具現化する上で、特に長期宿泊化による滞在型観光が大きな課題となっているが、既存の宿泊事業者とボランティアを中心とした多くの関係者の意識の低さと既存の活動だけでは将来に向けた事業の継続性は極めて難しい。

まずは活動を始めた若手が稼ぐことを前提とした事業化を推進するためのしくみと組織を構築する必要がある。地域全体の活性化のためにも、観光産業事業者だけでなく村内の他産業との連携（特に農業や林業）と地域全体のマーケティング、人材育成等が急務である。

また、エコツアーの様な商品化やサービス化のために村内の資源をただ活用するだけでなく、環境に対する保護や保全の意識を高め、資源やフィールドを維持管理することに地域で取り組むための体制づくりも必要である。

## 2) 特に魅力を感じた地域資源等

### ①魅力を感じた地域資源

八ヶ岳山麓という素晴らしい環境の中、観光スポットと言える「八ヶ岳自然文化園」や「八ヶ岳美術館」、「原村郷土館」等の個性ある施設を有している。

伝統文化としては、6年毎に開催される諏訪大社の「御柱祭」へ氏子として多くの村民が参加してきた歴史もある。

農業は高原野菜の生産が有名で、特にセロリとアネモネの生産量は日本一。他にも、レタス、パセリ、ほうれん草等の生産も盛んである。

### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

これまで八ヶ岳山麓の避暑地として人気が高かった地域だけに観光地としてのポテンシャルはある。現在、「1,000mの天空リゾート・原村」という新しいコンセプトを揚げ、八ヶ岳の広大な山裾の雄大な景観を活かした取り組みが始まっている。日中はガイド付きのトレッキングツアー、夜は星空を活かした体験等、地域資源を新しい魅力として提供しようとしている活動に将来性を感じた。

## 3) アドバイス（講義等）の概要

講義としては「選ばれ続ける地域とは」と題して、地域や経済等の全体を俯瞰するマクロ的な視点とエコツアーというニッチ市場に対して商品・サービスを提供するためのマクロな顧客視点を意識した内容とした。

- ① エコツーリズムに取り組むのは何のためか？
- ② 原村の過去と将来予想（人口問題等）
- ③ 村が存続するために必要なこと
- ④ 観光産業という外貨獲得の必要性
- ⑤ エコツアー市場の現状と有望性
- ⑥ お客様の価値。ウォンツとニーズ。
- ⑦ STP と CRM、CLTV
- ⑧ 商品化・サービス化。そして、リピートさせるための CS と ES 推進。
- ⑨ マーケティングの必要性
- ⑩ 人材育成・ガイドの質的向上
- ⑪ 地域と事業が「自立・持続」するためのしくみと組織
- ⑫ 町内外との連携・連動

エコツーリズム推進だけでなく、今後の地域全体の理念（ヴィジョン、バリュー、ミッション）と戦略、戦術、事業化へと繋げて実践することの重要性を強調したアドバイスになった。

#### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

##### ①全体構想への取組状況について

全体構想の取組は始まっていないが地域ではその必要性の認識は高まっている。

##### ②全体構想策定への意向について

講演後、独自にガイド養成ツアーを実施して4人のガイドを養成している。これらの活動と共に全体構想に対しても継続した活動を続けたいと聞いているが、まだまだ全体構想に賛同してくれる仲間が足りない状況である。現在、講義の受講者が中心となり、仲間を引き入れる活動をしている。

##### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

今後、芽が出始めた若手の活動を継続させる為にも、外部から彼らをサポート出来る人材が関わる必要性を感じる。同様に、エコツーリズムの事業化においても村の総合計画や総合戦略に取組の指標として明確化することが重要であるとする。また、住民や事業者が主体的に活動するためにも原村観光連盟が地域のDMOとして機能するようしくみと組織化を考えてもらいたい。

#### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

現在、原村で活動している若手が中心となり、ガイド養成部会と農業活用部会の立ち上げ準備と行動計画のための立案が進んでいる。今後、村内の若者たちの手で観光業だけでなく、他産業との連携による村内経済の活性化に期待したい。

原村でのエコツーリズム推進はスタートしたばかりだが、今後、住民と事業者、行政の役割が明確化され、地域が一体となった活動が続くことで地域にとって有益な成果をあげることを楽しみにしている。

私自身はどの地域に対しても同じ期待をしているが、エコツーリズムの推進はあくまでも手段の一つでしかない。しかし、エコツーリズムを推進することは、地域が持つ本質的で本来的な価値を残し、将来世代へ継承すると共に自立と持続した収益事業として産業化を実現出来る重要で有効な方法であることは実証されている。例えば、私が住むスイス・ツェルマットを始めコスタリカ等、世界中にロールモデルとする地域には事欠かない。しかし、自然環境の保護や観光による外貨獲得等のためだけにエコツーリズムに取り組むのではなく、住民自らが真の豊かさと幸せを実感出来る理想のまちを目指し、実現していく為にエコツーリズムに取り組んで頂きたいと願っている。エコツーリズムの目指す地域とは、住民もお客様も関わった人たちが全てが幸せを感じる「感幸地」であるべきだと思う。だからこそ、それぞれの地域のあり方を良く考えた上でエコツーリズムを推進して頂きたい。

### 3-9. 東近江市市民環境部森と水政策課（滋賀県東近江市）

#### (1) アドバイザー派遣申請の背景

##### ●地域の概要

【人口】 115,270 人（H28.2/1 現在）

【面積】 約 388 k m<sup>2</sup>（滋賀県の総面積の約 9.7%、県内で 5 番目に大きな市である。）

【地勢】

滋賀県の南東部に位置し、北は彦根市、愛荘町、多賀町、南は竜王町、日野町、甲賀市、西は近江八幡市と隣接しており、東は三重県との県境となっている。地形は、東西に細長く、東に鈴鹿山系、西に琵琶湖があり、愛知川が市域に貫流している。流域には、平地や丘陵地が広がり、田園地帯を形成している。また、市域の約 56%を森林が占めるなど、緑豊かな自然環境が多いのも本市の特徴である。

【気候】

気温は、年平均 15 度前後、年間降水量は 1,700mm 前後で、全般的に穏やかな気候風土である。

【歴史】

古代飛鳥時代の歌人である、額田王と大海人王子の相聞歌の舞台となった蒲生野や、聖徳太子由来のお寺など多数の古刹が点在している。中世以降は交通の要衝として栄え、近世には近江商人が活躍した地である。このように様々な地域と交流を重ねることにより、数多くの文化が醸成されてきた。近代に入り、「明治の大合併」、「昭和の大合併」と市町村の度重なる町村の再編を繰り返し、平成 17 年 2 月 11 日「東近江市」が誕生する。当時の合併は、1 市 4 町（八日市市・永源寺町・五個荘町・愛東町・湖東町）によるものであった。その後、平成 18 年 1 月 1 日に東近江市は蒲生町及び能登川町と再合併をへ、現在の「東近江市」が形成されるのである。

##### ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

鈴鹿国定公園である鈴鹿山脈から琵琶湖までが一つの水系でつながった東近江市として、その地域資源を生かした地域活性化策にこれまでも取り組んできた。農業体験や歴史に触れる街歩きなど、地域の団体を中心に企画され始め、今年度から、アウトドアの民間会社と連携し、山から湖までの自然資源の素晴らしさを宣伝している。しかし、一つのまちとしてトータルでエコツアーを商品化し、交流人口を増やすところには至っていない。

当地域には次のような課題がある。

- ・ あるものを生かし、自然を毀損しないエコツーリズムを正しく理解できている団体が少ない。
- ・ エコツーリズムを企画し、推進する組織がない。
- ・ 鈴鹿山脈から琵琶湖まで、広域の魅力を十分伝える手立てがない。
- ・ 各分野の団体間でエコツアーに対する意識に違いがある。
- ・ 地域を案内できるガイドが不足している。

上記のような課題を解決するため、エコツーリズム推進アドバイザー派遣を利用させていただき、関係者らの意識の共有を図るとともに、推進体制の構築につなげたい。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |                                 |
|-----------|---------------------------------|
| 日 時       | 平成 28 年 2 月 3 日 (水) 15:00~17:30 |
| 場 所       | 東近江市役所本館 302 会議室                |
| アドバイザー    | 株式会社ツーリズムワールド 代表取締役 高梨 洋一郎氏     |
| 参加者       | 計 27 名                          |
| スケジュール・方法 | 講話、質疑応答、視察                      |

## (3) アドバイスの内容（議事録）

### 基調講演：「東近江市エコツーリズムが目指すもの

#### ～交流・滞在型観光地づくりへの挑戦～

#### 1) 高梨先生自己紹介

#### 2) エコツーリズムの概要

- ・ エコツーリズムは、珍しい生物や文化を観察したり体験するツアーである「エコツアー」や自然文化体験活動などを内包する理念や概念のことである。
- ・ 地域の「観光資源」を掘り起こし、持続可能な活用を通じて、域内にお金落ちる仕組みを構築し、「地域振興」を行い、「環境保全」へ繋げていき、さらに資源価値を高めていくという一連の流れをつくるのが「エコツーリズム」である。
- ・ 自然保護区や国立公園の保護、保全を目的にし、資金の獲得手段の一環として生まれた経済、社会運動が遠因である。
- ・ いかに域内にお金を落としもらえる仕組みをつくるかがポイントである。ガラパゴス諸島では、島民に経済的メリットを発生させる仕組みを構築したことにより、希少な動植物の乱獲に歯止めがかかった。

#### 3) 日本型エコツーリズムの推奨

- ・ 「保全活動実践型」は、里地里山の身近な自然、地域の産業、生活文化を活用したエコツーリズムであるが、近年注目を集めてきている。
- ・ 地域資源を掘り起こし活用するという地域住民参加型であるのが特徴。

#### 4) エコツーリズムの手法

- ・ 地域コーディネーターを中核に、ステークホルダー間の合意形成を図り、推進体制を構築する。1つの団体や主体が担うのではなく、地域内から多様な賛同者や協力者を募り、地域ぐるみで実施していく。

- ・ 地域の宝を探し、活用する方法を模索する。
- ・ 地域の魅力や資源を熟知している人は一定数存在するが、その情報を発信し続けられるかが課題としてある。ガイドを養成していくことは重要となる。
- ・ ストーリー性を意識したプログラムを作成し、ターゲット別のマーケティングを実施するなど戦略的に企画、運営していく。

## 5) 東近江版エコツーリズム

- ・ 行政から事業者、市民を含めた地域ぐるみによるエコツーリズムの推進による東近江里山ツアーを推進する。
- ・ 東近江エコツーリズムの主旨や効果を明確にし、全体構想を策定していく。
- ・ 導入にあたり、地域の資源探しをしていく必要がある。
  - ①「自然」、「歴史・文化」、「産業」など、キーワードごとに資源を分類する「資源マトリクス」の作成をする。
  - ②資源の分布状況をマッピング化し、分布状況を基にゾーニング化する。
  - ③東近江市のフェノロジー（季節暦）を作成する。
- ・ 情報化社会にみあったシステムを構築し、SNS や web を活用した情報発信をすることが肝要。

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・ エコツーリズムへの理解、関心が高まり、地域資源を活かした取り組みへの参加意欲が高揚したことが、参加者アンケートから伺える。
- ・ 本市の緑豊かな自然環境や醸成された歴史文化を再認識し、「なにもないところ」という発想から「あるものを大切にし、見えにくいものをいかに発見していくか」という発想に転換された。
- ・ 地域の様々な主体が参画し、推進体制の構築が急務であると感じると同時に、市内で活躍されている団体が勉強会に多数参加し関心を示すなど、東近江市には推進体制を構築する基盤ができつつあるのではないかと道筋が見えた。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ 推進体制を組織、運営していく上での、エコツーリズムに対する、関係者間の共通認識が芽生えたのではないかと。
- ・ 具体的な手法を、事例を通して学べたことにより、今後の方向性が見えてきた。

### 3) 今後の取り組み

#### ①参加者や関係者に与えた効果

- ・ これまでにも個々には様々な活動や取り組みが行われていたが、それらを地域でつなぐことで、より魅力的なツアー資源となることを確認できた。

## ②今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ それぞれの組織が連携して動くことは、これまでになかった魅力付けや、資源の発掘、新しい活用など、今ある資源をさらに有効に利用する（つまり保全する必要性も認識される）という動きに結び付くことが期待される。

## ③今後の取り組み

- ・ エコツーリズム推進のための協議会の設立に向けて動く予定。

# (5) 今後の取り組み推進にあたり参考になった事例、その感想

---

## 1) 参考となった事項

- ・ エコツーリズムは、地域のことを熟知した住民主導で地域の自然や体験を提供できるため、マスツーリズムでは困難な「ホンモノ」を魅せることができること。
- ・ 地域振興と環境保全の両者への起爆剤として機能する可能性を秘めていること。

## 2) その他感想

- ・ 東近江市は鈴鹿山系から琵琶湖までと非常に豊かな自然環境を有し、歴史文化面でも他に劣ることなく非常に色彩豊かである。この恵まれた環境に本市があることを、気づいている人が何人いるのだろうか。
- ・ 住民自身が地域の資源を探すことにより、本市の魅力を再認識することが重要であることを、今回の講演を契機に、多くの参加者が理解できたのではないかと考える。幸い本市には、自然環境を保全、活用している団体が多数存在する。いかに、巻き込んでいけるかが鍵となるのではないかと講演を通して考えた。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

高梨 洋一郎氏 (株式会社ツーリズムワールド 代表取締役)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

滋賀県東近江市は、平成の大合併により平成 17 年から 18 年にかけて旧四日市市を中心に 1 市 6 町が合併して誕生した中規模（人口 11 万 5 千人）の新しい市である。東は琵琶湖に面し東は鈴鹿山脈の山塊を有する 388 km<sup>2</sup>の広大な面積を有し、中心を名神高速道路が貫く交通の要所でもある。1200 m級の鈴鹿連山に源を発する愛知川が東西の中心部を流れ、豊かな田園地帯を形成している。近江商人発祥の地として有名なところであるばかりでなく、古くからの交通の要所であったため、工業や商業がバランスよく形成され、近年は近畿経済圏のベッドタウンの一部ともなっている。ただ、市制 10 年と若い市であるため観光的な魅力となると統一した総合的な魅力をまだほとんどまとめきれておらず、市では未開発の鈴鹿山塊地域や河川地帯から琵琶湖に繋がる田園地帯を活用した自然文化活用型観光を推進するため、「市民環境部」に「森と水政策課」を新設して官民協働型の新たな観光地づくりをスタートさせている。

#### ②課題

「東近江市観光協会」は既に数十種の体験・ガイド型プログラムを設定して着地型観光の推進を進めているほか、近江商人記念館観光、全国的な運動となり始めている「菜の花プロジェクト」発祥の地としての観光、琵琶湖湖畔におけるカヤックなどのカヤック体験など、古い歴史の舞台を活用した観光から新たなプログラム開発まで、旧市町ごとに相応の観光資源は活用されているが、残念ながら「東近江」としての統一した観光に関するコンセプトは打ち出せていない。併せて、鷹や鷺の渡りの地ともなっている鈴鹿山塊エリアの豊かな自然資源を活用したエコツアーはほとんど手つかずの状態となっている。東近江の自然文化資源の魅力を総合的に再度見直し整理してマーケティングにつなげて行くことと、新たな自然資源として鈴鹿エリアの活用を図ることが、大枠としての課題であると感じた。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

- ア) 五箇荘の近江商人屋敷
- イ) あいとうエコプラザ菜の花館
- ウ) 道の駅「奥永源寺溪流の里」
- エ) その他、琵琶湖のカヤック体験や愛知川の河川敷。時間の関係で視察できなかったがその他の魅力も少なくない。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ア) 全国に名をはせた近江商人はそれ自体で十分な観光価値を有する。博物館として保全された屋敷をガイドの案内で見学、近江商人の足跡を辿る楽しさがある。
- イ) 菜の花の栽培から活用、再利用にいたる環境循環型産業として全国に広まった「菜の

花プロジェクト」発祥の地。視察旅行で多面的農法についても学べる。

ウ) 旧中学校を再活用した道の駅は、地域住民の生活を支える拠点となっているばかりでなく、鈴鹿自然体験観光のベース基地ともなっている。三重県いなべ市と 2011 年に石樽トンネル (4158m) で繋がったことにより、自然観察体験型観光の拠点となる鈴鹿山塊は、近畿圏プラス中京圏からのエコツアー客も視野に入れることができるようになった。道の駅はその中心的な存在ともなる。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

新市誕生からまだ 10 年と日が浅いため、東近江市としての自然・文化資源を活用した交流型観光への本格的な取り組みは、まだ殆ど初期の段階に過ぎない。併せて、各域内（旧市町）に点在する観光資源を「東近江」の統一したコンセプトでマーケティングを展開するには、新たな特徴づけが必要である。豊かな自然環境に恵まれた鈴鹿山塊は、新たなエコツアー型観光を開発するには格好の条件を備えている。

以上のような視点から、今後の観光は、自然や文化資源を活用した交流型観光にあり、そのためには体験学習やガイドの養成を含めたエコツーリズムの「考え方・活かし方」が有効であるとの視点に基づき、エコツーリズム資源の整理（宝探し）と地域ごとの特徴をゾーニングして、マーケティング展開を図ることをアドバイスした。

当面行政が主導してステークホルダー（関係者や団体）との合意形成を図りながら、新たな「東近江のエコツーリズム」の枠組みづくりに着手する必要があると感じた。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

未定

#### ②全体構想策定への意向について

未定

#### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まずは、基本となる「東近江観光基本構想」の策定からはじめる必要がある。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

小粒ながらエコツーリズム型観光や体験プログラムをしっかりと実施している団体やグループが少なくないことに驚かされた。

ただ、新市の誕生が浅いこともあって、それらステークホルダー間の交流は殆ど行われていない状態と思われ、まずその情報・意見交流の場づくりが第一歩であると感じた。継続的な情報交換や勉強会の実施を是非期待したい。

そのうえで、鈴鹿山塊の自然観察・体験型プログラムの開発や人材の育成を睨んだ計画づくりを進め、近江の里山型エコツーリズムの開発に繋げて行ってほしい。そのことが将来の東近江市の交流型観光のベースとなり、エコツーリズム全体構想策定につながると期待する。

## 3-10. 川上村定住促進課（奈良県川上村）

### （1）アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 1,539人 平成28年1月末現在

【面積】 269.26k㎡

【地勢】 奈良県南東部、大峯山脈と台高山脈の谷間に位置する内陸地

【気候、自然】

多雨が特徴である山岳性気候。台風や梅雨による雨が極めて多く、村の中央を流れる紀の川の源流である大台ヶ原は4,000mm以上に達する日本屈指の多雨地帯。

【歴史】

日本三大人工美林に数えられる吉野杉の主産地。植林の歴史は室町時代にさかのぼり、すぐれた樽用材として発展してきた。

【観光】

山や滝、鍾乳洞、ダム湖、丹生川上神社上社、匠の聚（芸術家村）、森と水の源流館

【地域資源の概要】

村全体がユネスコエコパークにエリア拡大の登録申請中。

緩衝地域である原生林では入山規制などの保全に取り組みながら環境教育のシンボルとして活用され、移行地域ではダム湖のカヌー、伐採見学ツアーなどが展開されている。

#### ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

##### 《背景》

奈良県川上村は紀伊半島の南東部に位置し、吉野熊野国立公園にも地域指定が行われています。

本村では、平成8年にきれいな水を流し続けることを誓う「川上宣言」を発信。

平成11年には、740haの原生林「吉野川（紀の川）源流一水源地の森」を購入保全。この森は公益財団法人 吉野川源流物語に管理を委託。この森をフィールドに実施する大阪工業大学新入生オリエンテーションには近畿地方環境事務所のレンジャーの支援もいただき、他団体も含め広く環境教育の普及に努めている。

平成27年4月からは、地域おこし協力隊によるエコツアー推進プロジェクト「山遊び塾ヨイヨイかわかみ」が活動を開始しました。これまで、おおたき龍神湖（大滝ダム）の湖面を活用するカヌーツーリングや石灰岩地ならではの洞窟探検、登山やハイキングなどを展開してきました。

現在、ユネスコエコパークの更新手続き中で、村内全域を移行地域へと手続きを進めています。

##### 《地域課題》

地域おこし協力隊の任期は3年間となっており、彼らの定住定着を後押しするためにも、プログラムの充実や収益性の確保などが今後の課題となっています。

ユネスコエコパークでもある川上村において、持続可能な産業モデルとして確立をめざしています。

新しい産業モデルへの地域住民の理解や参画を促したいと考えています。

##### 《申請目的》

上記のような課題を解決するため、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣を利用させていただき、エコツーリズム推進にあたってのプログラムの企画や運営、収益性の確保などに取り組みたい。その上で、関係者の連携を深める団体の立ち上げを検討していきたい。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|      |   |                                                                    |
|------|---|--------------------------------------------------------------------|
| 日    | 時 | 【1回目】平成28年1月20日（水）～平成28年1月21日（木）<br>【2回目】平成28年2月1日（月）～平成28年2月2日（火） |
| 場    | 所 | 奈良県川上村                                                             |
| ア    | ド | 【1回目】有限会社屋久島野外活動総合センター代表取締役 松本 毅氏                                  |
| バ    | イ | 【2回目】有限会社オズ代表取締役 江崎 貴久氏                                            |
| イ    | ザ |                                                                    |
| ー    |   |                                                                    |
| 参    | 加 | 【1回目】計13名                                                          |
| 者    |   | 【2回目】計12名                                                          |
| ス    | ケ | 【1回目】視察（森と水の源流館、不動窟、大滝ダム、朝日館、吉野杉の人工                                |
| ケ    | ジ | 美林、御船の滝、水源地の森）、屋久島の事例紹介、川上村に対する助言指導                                |
| ジュール | ・ | 【2回目】視察（森と水の源流館、匠の聚、大滝ダム、白川渡オートキャンプ                                |
| ・    | 方 | 場、人工美林、農家民宿 HANARE、樽丸製作技術、朝日館、柏木区、神之谷区）、                           |
| 法    |   | 川上村に対する助言指導                                                        |

## (3) アドバイスの内容（議事録）

### 【1回目】松本 毅氏

#### 1) 屋久島事例に基づく事例指導

- ① 屋久島野外活動総合センター（YNAC）設立の経緯説明
- ② YNACが現在のツアースタイルに至る流れ（エコツアーは情報産業）
- ③ ツアープログラムの作り方（テーマとストーリーが重要）
- ④ ツアーの売り方とマーケティング

#### 2) 意見交換会

#### テーマ：川上村の今後の観光ビジョンについて

##### ① 現状の整理

- ・ 川上村にはそれぞれの観光資源（滝、水源地の森、洞窟、人工美林など）に魅力はあるが、観光業を推進するうえで村全体（住民も含めて）の明確な方針（ビジョン）が見えない。  
→ 地域住民を巻き込んでビジョンについて考えていくべき。

##### ② どういう観光客に来てもらいたいのか

- ・ 都市部からは選択肢が豊富なため、川上村に観光客として呼び込むには、川上村を訪問するに値する目的が必要。

- ・ 屋久島への訪問目的は主に「縄文杉」
- ・ それに対して、川上村の現状では「縄文杉」に匹敵する呼び込み材料は見当たらない。
- ・ 単に川上村の知名度を上げるだけではダメ。  
「原生林」「豊かな自然」は他地域にもあるので効果が薄い。  
→ エコツアーによる川上村全体（村そのもの）の魅力を発信。
- ・ 宿泊客数を増やすべき  
宿泊が伴うと経済効果が大きい→民宿の活性化

### ③ 白川渡オートキャンプ場

- ・ 管理者（地域住民）にビジネスプラン（地元食品の販売など）のアドバイスが必要。  
→ 地域住民の巻き込みにつながる

### ④ エコツアーを民間事業として成立させるには

- ・ YNAC立ち上げ時は採算ビジョンが見えてなかった。  
→ とりあえず事業を立ち上げてみるのが重要

### ⑤ 地域おこし協力隊によるエコツアー事業（ヨイヨイかわかみ）へのアドバイス

- ・ ツアーの目的（テーマ）を明確にして売り出していくべき。  
例：YNACだと「屋久杉はこうにして巨木になった」
- ・ 新しいタイプのツアープログラムを絶えず試験的に実施してはどうか

### ⑥ 安全管理について

- ・ YNACでは安全管理マニュアル（事故対応の仕方、中止の条件など）を文章化。
- ・ ツアー当日、参加者にカウンセリングシート（体調、持病、運動歴、体力など）を書いてもらっている。  
→ ツアー中にガイドの安全管理の判断材料にする

### ⑦ 営業の仕方について

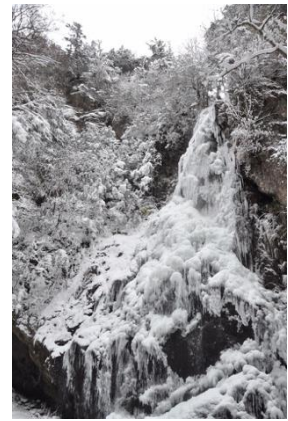
- ・ 売り込むにはプログラム数の充実と内容の確立が必要。
- ・ 核となるプログラム2つ程度を確立させる。  
例：ヨイヨイかわかみの場合だと、カヌーと洞窟探検
- ・ ツアー内容、季節によって変化する顧客層に対応する。  
例：夏休みを利用した家族連れが多い傾向がある
- ・ ホテルとの連携をもっと進めるべき。  
知床の事例だと、ホテルに自然情報を提供  
例：滝が凍っているかどうか、桜は見頃かどうか、登山道は歩き易いか
- ・ 受注式のツアーをめざす。  
指定した開催日に客を集める方式から、ホテルの宿泊者が参加したいツアーの日を希望し、それに応じて開催する方式をめざす。



水源地の森



山の神の祠



御船の滝（氷瀑）



不動窟鍾乳洞



川上村役場にて意見交換会

## 【2 回目】江崎 貴久氏

### まとめ（川上村に対する助言指導）

#### テーマ：川上村の観光を「産業」へ

地域内の協力体制づくり

観光による地域振興 ～奈良県川上村でのエコツーリズム活用～

#### 1) エコツーリズム推進法の概要説明と川上村で実施するには

- ・ エコツーリズム推進協議会の定義
- ・ 市町村の役割は全体構想の作成、組織運営
- ・ メリット
- ・ 市町村が定めた全体構想を国が審査し認証することで、地域の資源保護を行いつつ、広報をより効果的に実施できる。

#### 2) 川上村のエコツーリズムのポイント

- ・ エコツーリズムは観光資源活用のための土台づくり。  
第5次川上村総合計画にそって今後10年を進めていくべき。
- ・ 川上村はエコツーリズムに適した地域である。  
エコツーリズムの定義は未だ確立されておらず、川上村ならではのエコツーリズムを打ち立てて推進していけば良い。

川上村の観光を自然と人との「ふれあい」から、  
10年後には暮らしと地域の価値を支える「産業」に

村内にエコツーリズムという理念への賛同者、理解者、協力者を増やす

#### 3) 鳥羽市のエコツーリズムによる地域振興事例

- ・ 鳥羽市の産業構造の紹介  
かつては漁業がメインだったが、現在は第3次産業がメインである。  
→ 1次産業の衰退
- ・ 1次産業の衰退はアワビとアラメなどの水産資源の減少だけでなく、海女文化を含めた漁業全体の衰退を示す。  
漁業が衰退すると離島の人口も減少。  
→ エコツーリズムに必要な地域資源の減少
- ・ エコツアーの副収入により、海女の収入の増加  
→ 海女文化の保全

#### 4) 観光による地域振興の2つの起点

①宝物さがし：おもしろい！と思うもの ←客からの視点（客にとっての価値）

- ・ 地域資源の観光資源化（地域資源と観光資源は別）  
→ 資源はその価値や希少性について伝わる工夫があつてはじめて観光資源となる

②地域の声：課題やニーズ ←地域住民の視点（受け入れ側の価値）

#### 5) 観光が地元民と客をつなぐ旅のコツ

エコツアーを継続するには観光客と地域の相互依存が大事

#### 6) エコツーリズムによる地域への教育的効果

- ・ 子どもガイドボランティア～菅島「島っ子ガイド」～の紹介
- ① ガイドをすることで子どものコミュニケーション能力の向上
  - ② 島の知識、愛着、理解の増加
  - ③ 子どもの観光に対する意識変化→大人の変化→島の変化

#### 7) 実際にエコツーリズム推進協議会を作るには

- ・ 鳥羽市にエコツーリズム推進協議会を作ったとき「エコツーリズム」とは、どういったものか。  
その理念や定義が推進協議会のメンバーとなる関係者に伝わりにくかった。  
→自分なりの方法で伝える（関係者に実際にツアーに参加してもらう、他人を介して伝えるなど）
- ・ 川上村だとエコパークの認定をきっかけに各自治体と連携して作成できないか  
→ 自治体間の取り組みの温度差が課題

※道路運送法の規制緩和を適用できるのは認定地域内に限る。

最寄駅である大和上市駅（吉野町）からの送迎の場合、吉野町を含む広域の協議会設置を行うか、吉野町でも協議会設置してもらい参加する必要がある。

## 意見交換会

### 1) 全体構想が定めるガイドラインについて

- ・ 全体構想で規制（水源地の森への人数制限など）を定めた際、業務形態などの業者間の意識の違いをどう整理するのか？
  - 違反の罰則はない。しかし、全体構想で定めた規制は国が認証した規制であり、それを守らない業者は客と地域からの信頼を得られ難くいはず。
- ・ 河川法第 24 条では河川での釣り・カヌー・川遊びなどは自由に行える（自由使用）
  - カヌーと釣り客との軋轢の問題 → 推進協議会によるガイドライン作成の必要性

### 2) 川上村でエコツーリズム推進協議会の立ち上げについて

- ・ 鳥羽での立ち上げの際は協議会の周知のために時間を要し、設立を当初の予定より 1 年遅らせる必要があった。
  - 川上村では「川上宣言」があるので、それをもとに協議会を立ち上げてはどうか。
- ・ 協議会のメンバーにはエコツアー関連業者のみが関わるのか？
  - 地域のさまざまな団体が関わる。

#### 鳥羽市エコツーリズム推進協議会 構成団体（五十音順）

|                         |                       |
|-------------------------|-----------------------|
| （財）伊勢志摩国立公園協会           | 鳥羽市観光課                |
| いせしま森林組合                | 鳥羽市観光協会               |
| NPO 法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター | 鳥羽市自治会連合会             |
| 海の博物館                   | 鳥羽志摩農業協同組合            |
| 相差海女文化運営協議会             | 鳥羽商工会議所               |
| 海島遊民くらぶ                 | 鳥羽市水産研究所              |
| 環境省中部地方環境事務所            | 鳥羽市旅館組合連絡協議会          |
| 島の旅社推進協議会               | 鳥羽まちなみ水族館             |
| 鳥羽磯部漁業協同組合              | パドルコースト鳥羽カヌーサービス      |
| 鳥羽ガイドボランティアの会           | 兵吉屋はちまんかまど            |
| 鳥羽観光施設連合会               | 三重県雇用経済部 観光・国際局観光誘客課  |
| 鳥羽市環境課                  | 三重県農林水産部みどり共生推進課公園管理G |

- ・ 推進協議会の全体会議は年に何回くらい？
  - 年 4、5 回程度の開催。普及啓発部会と循環連携部会の 2 つあった。しかし、互いの情報共有の重要性から今年度から 1 つに統一した。



樽丸職人による樽丸製作実演



準備中の農家民宿を訪問



修験道の元宿場町 柏木地区



川上村役場にて意見交換

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・ 観光業を推進するうえで「村全体（住民も含めて）の明確な方針（ビジョン）が見えない」と、アドバイザー2人に指摘された。  
川上村において、エコツーリズム全体構想を導入することが有効であると感じられた。
- ・ 観光を川上村の中でどう位置付けるかの整理ができた。（「ふれあい」から「産業」へ）
- ・ プログラムの組み立て方など、具体的かつ実践的な手法を学ぶことができた。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ エコツアーガイドを生業とする者の成立
- ・ 観光資源を商業目的で利用するうえでのガイドライン作成
- ・ 地域全体（住民、行政、事業者など）のエコツーリズムへの理解向上
- ・ 観光産業全体の拡大

### 3) 今後の取り組み

- ・ 地域おこし協力隊によるエコツアー事業の本格化
- ・ 村内宿泊施設とエコツアー事業の連携
- ・ 全体構想策定の検討

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

- ・ YNAC（屋久島野外活動総合センター）：プログラムの作り方、営業、安全管理など。
- ・ 海島遊民くらぶ：地域におけるエコツアーの位置づけ、関わり方など。

### 2) その他感想

- ・ これまで試行錯誤していたエコツアーの取り組みについて体系的に考えることができ、エコツーリズムの持つ大きな可能性に気付くことができた。
- ・ エコツアー事業を川上村に定着させるためには、事業関係者以外にもエコツーリズムの理念を理解してもらい、協力者を増やすことが必要だと分かった。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

松本 毅氏 （有限会社屋久島野外活動総合センター 代表取締役）

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

川上村は、林業の全盛期に比べ人口が激減し、更に大滝ダムによる村の水没で若者が村外に流出し、人口の減少と高齢化でいわゆる「限界集落」となりつつあります。しかし、川上村として「川上宣言」と「水源地の森」の取り組みが始まり、吉野川の源流の天然林 740ha を買い上げ、調査活動とともに環境教育の場として「森と水の源流館」を拠点に村役場、地域おこし協力隊の若い人を中心にエコツーリズムの取り組みが始まっています。

#### ②課題

資源としては、天然林、吉野杉の人工林、きれいな沢、鍾乳洞、昔ながらの町並み、村を水没させたダム、ダムに沈んだ遺跡、温泉など申し分ないものがあります。しかし、村としての取り組みは始まったばかりであり、知名度がないため、現在行っているモニターツアーの継続や事業化できないという課題を抱えています。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

- ・ 大台ヶ原につながる吉野川源流の天然林 740ha を村が所有しているということ。
- ・ 500 年級の吉野杉の人工林が残っていて大変美しい。
- ・ 計画から 50 年の年月を経て 2012 年に供用が開始された大滝ダム。それにより村が移転をしたため、きれいな街並みになり、道路も広くアクセスがいい。
- ・ 一方、修験道の宿場として栄えた明治より開業している「朝日館」や修業の場となった鍾乳洞、丹生川上神社上社など貴重な歴史的資源がある。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・ 村の所有する天然林には、非常に貴重なトガサワラが残されていたり多様な針葉樹・広葉樹の森があり、コケやシダの種類も多く、トレッキングや自然観察の場として大変優れています。また、コースとしてもコンパクトでいろいろな組み合わせをすることでニーズに合ったツアーを組むことができる可能性があります。
- ・ また、500 年級の吉野杉の人工林は川上村の林業の歴史を物語っていて、天然林と人工林の対比を含め、環境教育の場として非常に有効であると思います。
- ・ また、吉野川の源流の村が、治水ダムとして作られた大滝ダムによって水没した歴史を持っており、川という縦のつながりを考える貴重な地域だと思います。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

屋久島の事例として、世界遺産前は林業の衰退とともに人口減少がひどかったこと、世界遺産になりエコツアーが屋久島の人気を上げていったこと、縄文杉という特別なものに頼りすぎて屋久島の魅力が薄れてきたこと、ガイドの質が問われてきていること、など屋久島の現状について講義をしました。

次に、川上村の現状と課題について議論をしました。

素晴らしい資源を有していても川上村に行く理由が明確でなければなかなか人は訪れてきてはくれません。「川上村で〇〇を見たい、〇〇をしたい」という明確な目的を提示することが必要です。「川上村で〇〇を見よう、〇〇しよう！」というキャッチコピーをもって、マスコミや旅行エージェントに営業をしなければ、注目を浴びることはできません。

大変すばらしい資源と施設を持ち、若い人の取り組みが始まっているので非常に期待ができる場所です。

これからは、しっかりと外への営業を開始しなければなりません。これから10年後20年後に川上村がどうなっているべきかという明確なビジョンを持って、そのためにはどのようなところに営業をすべきかを具体的に議論しました。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

まだエコツーリズム推進全体構想について具体的な取り組みは始まっていませんが、村として「川上宣言」という大きなビジョンのもとに、村役場の定住促進課、水源地課という複数の課がエコツーリズムについて取り組みを開始しています。

#### ②全体構想策定への意向について

今のところ、漠然とはありますが特定観光資源の指定や利用調整について考えていく意向が感じられました。

#### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

今後、エコツーリズム推進法や全体構想の取り組みについて勉強会などすることによってその目的や必要性について理解し、全体構想認定に対する具体的なイメージを持つことが必要と思います。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

エコツーリズムに対するポテンシャルは高まってきていると感じました。すでに核となる人たちが精力的に動いていて、地域住民の意識も徐々に変わってきています。「川上宣言」という大きなビジョンを具現化するためにもっと地域住民を巻き込んで丁寧な議論を進めていき、一つ一つが実現していくことによって大きく変わっていくと思われます。

その方策として、エコツーリズム推進全体構想の議論を開始することが期待されます。

## (7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

江崎 貴久氏 (有限会社オズ 代表取締役)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

川上村は、室町時代から林業で成り立っていた地域である。険しい山々に囲まれ、背後は大台山系につながる地形の中で、農業も難しかった。南から北へ流れる吉野川の上流に位置しており、林業も吉野川で筏を組んで流す運送方法なくしては発展することは難しかった。その林業の衰退とともに、村の衰退と人口減少が進行している地域である。村の最大の財産として、吉野川とその源流域の森が位置付けられており、それに基づいた「川上宣言」がなされている。

地域おこし協力隊の制度を、地域の活力としてだけでなく情報発信メディアとしても活用している。地域は、地域おこし協力隊に制度終了後も定住を期待するのが一般的である。もちろん、そのまま定住してもらうことにも意義はあるが、それを期待するあまり地域の住み心地のイメージが下がってしまうことのリスクを考慮し、自由な選択ができる雰囲気づくりをしている点が、この制度の現場での活用における発展として見受けられた。今回も地域おこし協力隊が主体となって、アドバイザーの受入を行ってくれた。



今回、受入・視察案内をしてくれた皆さん

以下、エリアごとの取り組みと現状である。

#### 【源流周辺】

川上村三之公の森は、長い間人の手を入れることなく自然のまま残されてきている。しかし、かつては林業が栄えてくるとともに、山の奥部へと林業の手が伸びていった。そこで、川上村は水源地にとって重要な原生の森の消滅の危機にいち早く対応した。日本では経済発展が著しい時代、貴重なこの森を川上村が購入・保全し、管理は「森と水の源流館」が行う仕組みをこれまでに作り上げている。こうして、現在でも「水源地の森」は、貴重で多様な植生を保っており、その重要性が地域住民の精神性に影響している。そして、この歴史そのものが住民や林業の理念に深く関わっている。

## 【上流部】

手つかずの水源地の森の下には、人が長年にわたり丁寧に手を入れた100年以上の、中には300～400年のスギ林が存在している。これらのきめ細かく節のないスギの用途の優先順位は、1位が樽丸であり、建材ではないという点が意外であった。私たちの食文化を支える醤油や酒等、液体の運送や貯蔵に樽が欠かせず、「水が漏れない」樽づくりは、「水が抜けない木材」づくりの間伐技術と樽丸づくりが支えていたからである。

全国各地で、放置、または手を入れる間隔が減少したスギ・ヒノキの林が多くなっており、一般的にも国内産木材の利用減少による放置林のイメージが強く、そうした木々の活用は木造住宅、内装外装の木質化から、木質チップといった瞬間的な燃料としての消費にまで至っている。しかし、川上村では、数百年にわたり受け継がれてきたスギ材を売れないからと言って、使い道を問わないというわけにはいかない。そのため、今も樽丸製作を継続しつつ、300年以上のスギ林ではハウスメーカーと林業が連携し家屋の建築予定や希望者に良質な建材の付加価値を理解してもらうため、見学会を開催している。

樽丸づくりも、視察対応や特別な際にはヒアリングと見学が可能となっており、林業の歴史と林業周辺の産業、そして町の歴史が樽丸を通して理解できるストーリーが語られる。

地域おこし協力隊による取り組みが行われており、農家民宿HANAREは地域おこし協力隊の二人が古民家を活用し宿舎として改装している。今後、あらたな顧客開発が期待されている。また、柏木・神之谷地区には朝日館をはじめとする歴史深い宿や家屋が立ち並んでいるが、廃業しているものが目立っている。ここは交通の要所としてかつて栄えた地域であり、華々しい歴史文化と生活文化が街並みから想像できる地域である。



川上独自の育成方法で受け継がれている300年以上の杉林。



樽の見本。この側面の板を樽丸といい、川上村で製作されている。



樽丸づくりの実演



協力隊による古民家の活用例

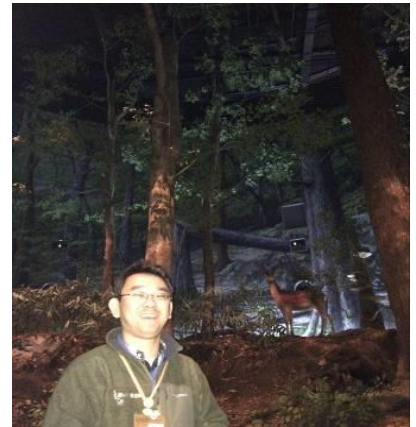
## 【下流側】

役場がある下流側の地域では、計画的に様々な側面から川上村のゲートとしての機能を持たせているように思われる。

森と水の源流館があり、川上村が林業を守っていくうえで、必要な原生林の保護に大きく舵を取ったことが、この施設のテーマに深くかかわっている。旅行者や移住者が初めてこの地域に入るにあたり、地域に実際見えるものの背景や住民のマインドの中心を理解することができるための重要な役割を果たしている。

また、ギャラリーを併設した「匠の聚」がつくられ、周辺では芸術家のアトリエを整備することで移住促進を進めている。集合団地のような形態を取り、その中心的な施設として「匠の聚」があることで、移住した住民と外部者、地域住民の接点となっている。

50年も計画と建設に費やされた大滝ダムがある。山から海までの距離が短く、水害に頻繁に悩まされた地域で、建設によって水没する地域を中心とした反対運動も大きかった。現在は、村における大滝ダムの位置づけは、地域住民に理解されている。



「森と水の源流館」現流の森解説



大滝ダムのメモリアルボード

## ②課題

- ・ 地域の主たる産業であった林業の衰退。林業に付随した宿泊業や飲食業とともに衰退している。結果、人口減少と高齢化が著しい。
- ・ 木材の品質が高く、その品質の背景は職人技術、村全体での自然資源の管理システムなど、奥深さと土台の広さの上に、長期にわたる緊張感が不可欠であるため、新たな顧客開発に「手軽さ」と「安価」に通じる戦略を打つことは、村の経営資源の保全とはならない。そのため、活性化の手法が限られる。
- ・ また、長期的管理と土台の広さに連続性が不可欠であることから、全体の足並みがある程度そろった取り組みを必要とする。
- ・ 定住促進事業と協力隊の制度を利用しているため、地域を選んだ納得が持てる必要があり、それは「住むこと」と「働くこと」両方に共通した地域性と「自分流」の価値の融合が求められる。こうした中で、川上村の若手を中心とした人々からエコツーリズムの手法が注目されており、理想を求めつつ自走できる環境整備が必要となっている。
- ・ 自走のためのエネルギーが十分ではない。村の中で、森と水の源流館の関係者や地域おこし協力隊など、エコツーリズムを実践する意思のある人々以外は、まだまだ受け身であるため、積極性を引き出す必要がある。

## 2) 特に魅力を感じた地域資源等

### ①魅力を感じた地域資源

- ・ 水源地、ダム建設時の設備
- ・ 品質の高い吉野杉と、100年以上にわたり世代をこえて品質管理する技術
- ・ 伝統の樽丸づくりと新たな木材の利用として、カヌー作り。余材を使った箸の製造。
- ・ 古民家に様々な種類がある。（一般家庭の家屋、宿泊施設、店舗等）
- ・ 金剛寺・自天親王神社と住民の精神性

### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

- ・ ダムの歴史に、この村の人々だけではなく建設に関わった他所からの人々との理念や愛着の共有が感じられ、何気ない水や景色に深い思いを寄せることができる。他所からくる人々の心のルートマップの役割が可能であると感じた。森と水の源流館に並ぶ、オリエンテーション機能がある。
- ・ 一般的な林業のイメージは、メディアなどを通して認知されているが、川上村の林業には地域ならではの戦略や手法があり、一般的な木材よりも価値が高いと認識できるストーリーがある。
- ・ 木材の使い方から、日本人の自然の無駄のない使い方に優しさを感じる。一方、樽丸は作るが「樽」自体は次のプロセスとして他の業者や地域に委ねられるところから分業による他との依存関係の中に、つながりや絆と言われる形の実態を知ることができる。自己完結型の六次産業化や地産地消だけでなく、あえて他を求めることで付加価値を増加させる手法とのバランスにエコツーリズムの教育的な視点に立った奥深い資源性を感じた。
- ・ 古民家の空き家は、木材供給基地であるため、建材が良いものと考えられる。そのため、他地域の空き家に比べて、空き家であるにもかかわらず、荒廃感が少ない。また、空き家も増えていることはマイナスイメージだが、逆に一般の民家から、宿泊施設、店舗と様々なタイプの空き家があるため、村の幅広い用途や多様な目的の移住者受入整備として考えることが可能である。
- ・ 金剛寺・自天親王神社は、先祖の正義のあり様を今に伝えるものであり、川上村の物事に対する姿勢や正義感として誇りの源である。こうした正義を大切にす理念が、源流の森の保護への決断や川上宣言の根底にあるように感じた。



樽丸の端材。割りばしに利用される。



宿場町の街並みの空き家

### 3) アドバイス（講義等）の概要

川上村の現状から、次へのステップアップの鍵となりうるポイントについて提案した。

#### ① 地域に最大効果をもたらす土台を、協力隊・民間事業者・行政・公的団体の若手で目標化し共有する。

人口減少ももちろんであるが、若者の存在が極めて少ないため、若者一人一人の村の将来に対する影響が強い。現段階の主たるプレイヤーである協力隊・民間事業者・行政・公的団体の若手が個々の10年後の結果を得るための手段の選択で、川上村の将来が大きく変わる可能性がある。

#### ② 若者の仲間で、川上村の総合計画を確認し自身の暮らしや事業と関連付けて考える。

これまでの川上村の歴史と村の資源に対する認識と考え方には、いつも正義が基準にある。エコツーリズムを進めるには、とても適した基盤が揃っていると思われた。そこで、川上宣言に基づいた川上村の観光の進め方を整理し共有しておくことで、共通認識の上に進めることができる。簡単に彼らの説明から、理念・進めたい戦略・戦術のイメージを提示するとともに、その先に見据えておく効果的であると思われる視点を示した。

理念としては、「水源と林業から大切なことを伝えるための観光」がこの地に望ましいと考えられている。そのための戦略は、持続可能・地域資源に責任を持った観光のあり方を実践することが、住民にとっての正義に寄り添った自然な戦略となりうる。また、さらに持続性が必要であるため、根本的な課題である村の林業や経済とともに発展するような方針と目的が必要である。そのためには、地域資源の管理と林業の側面的な保全を産業化する工夫が必要である。そして、戦術としては、これらのことからエコツーリズムの手法を使うことがふさわしいと判断した。エコツーリズムの手法を取り入れるにあたっては、多世代、異業種での理解と活躍の場が取り組みの広がりを作り出すとともに、定住促進事業と協力隊の制度を意識的にライフスタイルと職の一貫性の実現のために活用することで川上村の歴史の前に朽ちない深みを作ることに効果があると提案した。

#### ③ 協力者や理解者を増やす

エコツーリズムに取り組むための初動には十分な環境が揃っている。このタイミングで、効果の継続と安定を見据え、協力者や理解者を増やし、行政が関与する意図的な取り組み拡大から自然的な拡大を促す仕掛けをしておくことで、マンネリ化を防ぐことができる。例えば、エコツーリズムに関わる可能性がある人々をタイプ別（下の図参考）に分類し、それぞれが実現可能な夢を提供できるよう企画に盛り込んでいくといった「雰囲気」の可視化も尺度の違う地元の人々と移住者の協働を進める上でスムーズな運営が期待できる。

#### 川上村のエコツーリズムのポイント

- 地域に最大効果をもたらす土台を協力隊・民間事業者・行政・公的団体の若手で目標化  
10年後の川上村は、それぞれの10年後のポジションまでの道のりが大きく影響する。  
理念：「水源と林業から大切なことを伝えるための観光」  
戦略：持続可能・地域資源に責任を持った観光のあり方→**地域資源の管理と林業の側面的な保全を産業化**  
戦術：エコツーリズムの手法を使う→**多世代、異業種での理解と活躍の場**  
定住促進事業と協力隊の制度利用→**ライフスタイルと職の一貫性を実現**

#### 川上村の観光を自然と人との「ふれあい」から 10年後、暮らしと地域の価値を支える「産業」へ

- 賛同者、理解者、協力者を増やす  
・理念に共鳴する人 ・自己啓発を求める人 ・必要とされたい人 ・若者に協力したい人...

#### 川上村内の人々に誇りを、村外の人々に実現可能な夢を提供する

#### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

##### ①全体構想への取組状況について

現在は取り組んでいない。訪問前は、特に意欲的ではなかった。理由は、川上村で取り組むメリットが見えなかったからであると考えられる。

##### ②全体構想策定への意向について

今回のアドバイザー訪問によって、川上村がエコツーリズムに取り組むことが適した地域であることが受入をしてくれた皆さんと分析できた。皆さんとそれを共有したことで、全体構想への意欲が高まった。

##### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

全体構想を進めるために、行政側と住民の環境整備が必要である。すでに地域活性化のための協議会が設置されており、目的が類似しているため既存の協議会とどのように位置づけるか、同協議会で全体構想を担う協議会として可能かを検討する必要がある。

そして、進めるにあたり共通の理解を必要とするが、川上宣言というベースとなる考え方が既にあるため、これを基に全体構想に取り組むことは川上村の自治スタイルに馴染む方策であり、住民も受け入れやすいと考えるため効果が期待できる。

これらを踏まえて、取組に舵を切るためには行政の三役への報告・相談の機会を若手が持つことも有効であると考ええる。

#### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

川上村は、日本の産業が発展し景気がどんどん良くなり開発が盛んになる中、吉野川の源流の森を買取り、守ってきた村です。その理念は川上宣言として受け継がれています。

そして、もう1つ、受け継がれてきたものが、林業です。杉林の中には400年以上育てられてきた杉の木たちもありました。川上村特有の密植の方法で、長い時間と少しずつの間伐で、年輪（マサ）の目がほぼ均等になるように調整していく技術があります。そして、これらの木々がかつて最も必要とされたのは、樽です。木の性質は年輪の内側、真ん中部分、外側で違うことを利用して作られています。そして、節が絶対にあってはいけないのが樽。節から、漏れてしまうからだそうです。そして、樽丸づくりの余った端材の利用で割り箸ができました。ちょっとした時代の変化だけで、何代もの方々から託された最高の杉づくりへの緊張感がぷつっと切れてしま



均等に育成された「マサ」

まって、良いはずない！と思うばかりです。間伐材とはちがい、100年、200年、400年…これほど繊細に将来を託して厳選され育てられた木々を、簡単に木材チップにはできないという、皆さんの想い、私も受け取りました。

## 3-11. 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会

(岡山県真庭市)

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 5,527 人（真庭市全体 47,858 人）※平成 27 年 11 月 30 日現在

【面積】 189 k m<sup>2</sup> （真庭市全体 828 k m<sup>2</sup>）

【地勢】

今回派遣事業を実施させていただく岡山県真庭市・蒜山（ひるぜん）地域は、岡山県の北部、真庭市のさらに北端、鳥取県境に位置する小さなエリアです。

名称の元であり、地域のシンボルとなっている蒜山三座（上蒜山・中蒜山・下蒜山）は、西日本の最高峰、大山の外輪山で、高さ 1,100m 余りの大型のトロイデ（鐘状火山）となっており、この裾野に広がる標高 450m～600m の高原地帯で人々の暮らしが営まれています。

【気候、自然】

蒜山地域は、冷涼な高原型気候で、平均気温約 11℃、年間降水量約 2,000 mm、積雪期間は約 90 日とされています。

蒜山一帯には、ナラ、シデ、ブナなどの自然林やシラカバ林が広がり、ヒルゼンスゲ、コケモモ、イワカガミなどの高山植物も生育しています。河川には特別天然記念物のオオサンショウウオが生息しています。

【歴史】

蒜山三座の噴火に端を発する蒜山地域は、かつては川が堰き止められ、古・蒜山原湖を形成していたことから珪藻土の産地となっており、希少な湿原も残ります。また、古くから人が住みついて狩りをし、農業を営んだものと考えられ、二次草原も多く残ります。この二次草原は「大山隠岐国立公園編入」の要素にもなっています。

加えて、国史跡「四ツ塚古墳群」をはじめ各所に点在する古墳、あるいは重要無形民俗文化財「大宮踊」に代表される古い習俗や文化財など、独特の民俗文化がそのままの形で数多く残っています。

【観光】

蒜山地域は、その雄大な景観の中で、夏場は冷涼な気候を生かして避暑地として、冬は降雪を生かしウィンターアクティビティを楽しむ場としてにぎわい、西日本屈指のリゾート地として知られています。

また、日本最大のジャージー牛の産地としても有名で、メインスポットとなる三木ヶ原、蒜山ジャージーランド周辺では愛くるしい牛たちがのんびりと日向ぼっこをする牧歌的な風景が広がっています。加えて、国民休暇村や、キャンプ場（オートキャンプ場）、スキー場なども整備され、米子自動車道によって、山陽と山陰を結ぶ一大観光基地となっています。

近年は、マスツーリズムの低迷、また観光ニーズの多様化にあわせ、平成 16 年からエコツーリズムの取り組みに着手。登山はもちろん、湿原をはじめとした自然観察、また、リバートレッキングやスノーシューなど様々なメニューを提供しています。平成 28 年にはモンベルフレンドエリアの登録も完了し、アウトドアユーザーへの一層の PR を行っています。

### 【地域資源の概要】

大山隠岐国立公園の一角を成し、登山を楽しめる山々、リバートレッキングを楽しめる溪谷、サイクリングを楽しめる自転車道、希少な湿原、希少野生動植物、国史跡四ツ塚古墳をはじめとした古墳群、国指定重要無形民俗文化財をはじめとした民俗文化、岡山県伝統的工芸品・郷原漆器をはじめとした伝統工芸品 など多数

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

岡山県真庭市の蒜山地域では、近年の観光ニーズの変化にあわせ、平成 16 年からエコツーリズムを取り入れた観光振興に着手。蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会も立ち上がり、地元住民が主体となるガイド組織も結成され、地域発展に寄与してきた。

しかしながら、ガイド組織が活動を進める中でガイド間の認識や思いのズレから地域内不和が生じ、平成 25 年より協議会を休眠せざるを得ない状態になってしまっていた。

行政も再出発を図ろうと調整に入るもののうまく行かず、この状態では、蒜山地域のエコツーリズムが衰退あるいは消滅してしまう恐れがあるため、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業により、民間・行政が再度、エコツーリズムのあり方等について再確認し、意識レベルを揃え、蒜山地域におけるエコツーリズム推進事業の再出発を図ろうとした。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                     |
|-----------|---|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成 28 年 2 月 29 日(月)～平成 28 年 3 月 3 日(水)                                              |
| 場         | 所 | 岡山県真庭市蒜山地域 ほか                                                                       |
| ア         | ド | バ                                                                                   |
| イ         | ザ | ー                                                                                   |
| 参         | 加 | 者                                                                                   |
| スケジュール・方法 |   | 計 20 名                                                                              |
|           |   | 【1 日目】<br>視察（半自然草原火入れ地にて草原維持のための取り組み等解説（降雪のため車窓からの見学のみ）、蒜山ワイナリー、ひるぜんジャージーランド、津黒高原荘） |
|           |   | 【2 日目】<br>プレゼンテーション、ディスカッション①②③                                                     |
|           |   | 【3 日目】<br>プレゼンテーション、ディスカッション④、まとめ、真庭市行政として努力すること、視察（津黒いきものふれあいの里、湯原オオサンショウウオ保護センター） |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

#### プレゼンテーション① エコツアーとエコツーリズムの中のエコツアー

##### ★エコツアーの起源

1970年代後半、自然好きのアメリカ人が南米の森林とそこに住む原住民の人々の生活をを守るため、集落が持っている森を自然保護地域とし、ツアーを企画し、そのツアー代金(ガイド料金)を収益として原住民に渡したことが始まり。

その活動が森林環境を守る手段(動機づくり＝モチベーション)として先住民に広まり、うまく機能していった。※資金調達＝自然保護に必要なお金(経費)を作る、＝稼ぐ

- 例)
- ・エクアドルのガラパゴスの生き物ツアー
  - ・東アフリカの野生動物ハンティングツアー、ウォッチングツアー
  - ・オーストラリア、メルボルンのペンギンパレード見学ツアー
  - ・スリランカのワイルドライフガイドツアー
  - ・ヨーロッパアルプスの氷河遺産地域トレッキングツアー
- 各国で特色ある「自然観光」に発展

##### ●日本でのエコツーリズムの動き

1992年 自然保護協会による各国視察、事例研究

2008年 エコツーリズム推進法

##### ★日本のエコツーリズムの定義

旅行者が自然観光資源を知るガイドにより案内や助言を受ける。自然の保護に配慮しつつ自然や人とふれあい、知識や理解を深めるための活動

→実際にエコツーリズム地域をつくるために必要なことは、、、

- ・ まず推進協議会を設立し
- ・ 魅力あるものの実態調査、保全対策、利用ルール、ガイドプログラム、広報ツールの作成、人材育成、モニタリングをし、
- ・ 観光産業の育成と持続可能な地域づくりをしていくこと。

##### ★エコツーリズムの主目的、力点の置き方は、各地域で異なり4タイプに分類される

- 1) 自然環境保全の動機と資金の確保(ex. ガラパゴス)
- 2) 自然資源収奪型産業、消耗枯渇型産業→持続可能な地域産業への転換(途上国型)
- 3) 貧困からの脱出と自立可能な経済社会への転換(途上国型)
- 4) 大観光地集中型の観光(マスツーリズム)から、地域資源を活用した分散型観光への転換(先進国型)  
←大山と蒜山が競争しない

##### ≫エコツーリズム推進法に内在する問題

- ・ マスツーリズムのエコ化(←マスツーリズムはやめないが、そこに集まる人たちの動きをエコに)
- ・ 里山保全、ライフスタイル体験、アドベンチャーツアーなど、エコツーリズムとの区別がはっきりしない
- ・ 集客と資金の流れの仕組みが作れない

⇒なんのためにやるのか、みんなで共有してからでないといいものが生まれない。法律自体が課題を抱えているため、法律や役所の人たちに何とかしてくれではないいいものにならない。法律を何度も改正していく必要がある。

★エコツーリズムが求められる理由

- ・ 世界的な生物世界(人間ふくむ)の持続性の危機
- ・ 経済優先型社会による環境の劣化と地域文化(伝統地、少数言語)の喪失
- ・ 地球規模では人口が増え続けている。人の社会の持続的確保が優先事項
- ・ 20 世紀型物事からの脱却が多ジャンルで試みられている

★生物世界の健全さが人間にとっての「生態系サービス」を生み出している。

安全、健康、生活の基本物資、良好な社会的関係、選択と行動の自由は、豊かな自然の恵みがあってこそもたらされるもの。自然界が健全でなくなると、人を支える力をなくす。

～世界的に顕著に低下している生態系サービス→漁獲量、野生の食糧(はちみつなど)、木質燃料(焚木)、真水など～

消耗枯渇型 20 世紀型「エゴロジア」 ⇔ パートナシップ型「エコロジア」

↑エコツアーは「エゴロジア」型社会の中でやると、特定の人が儲かり、自然は貧しくなる、世界は狭くなる。反対に「エコロジア」型社会でエコツアーをやると、共有が生まれる。世界は広くなる。人の輪は広がる

「旅行」の定義：人が空間的、物理的に移動すること。交通手段を用いて移動すること

「旅」の定義：定まった地を離れて、ひと時ほかの土地へゆくこと

→ 私たちが言うエコツアーは「旅行」ではなく、「旅」

いい体験をしたら、元の土地に戻り、その経験を活かす、新しい見方を得るための「旅」であるべき。

◎エコツーリズムに基づく、エコツアーであるべき

---

質疑応答

Q 年配のボランティアガイドがエコツアーを支えている現状の中で

収益を上げ、ガイド料をまかなえるようにし、若いボランティア育成が必要では？

A 五色が原の事例

利用料とガイド料からツアー代金を決定。

条例をもとに、エコツアーのシステムづくりをしている。

Q 行政が中心となって協議の場を設けることが必要では？

A 行政だけではダメ。65 点の行政の力と、35 点の推進協議会(市民)の力が必要

---

## プレゼンテーション② 旅の目的とエコツアー

★旅の目的を何にするか、考えてみよう！

- ・現代の日本人は「都市化」し、固定観念の中で生きている
- ・自然観察ができるようになると、生活の中にはない多くのことが得られるようになる

例) ・自分の心と体の健康

- ・ 隣人との出会い
- ・ 野生の生き物との出会い
- ・ 知的好奇心の刺激
- ・ 環境変化への対処
- ・ 身のこなし方の変化
- ・ 自分の見方の癖に“気づく”

→ “やってみたい” “学んでみたい” という気持ちが生まれる

⇒自然を学ぶのではなく、自然から学ぶ

★エコツーリズムとは教育活動である

- ・ 「良いエコツアー」を行うことで「良いエコツーリスト」が育つ  
→そのためにたゆみない毎日の努力が必要になる。
- ・ 作り出す努力が必要
- ・ 固定観念の中で決断し続けてはダメ
- ・ 無関心が一番ダメ

---

質疑応答

Qガイドたるもの道案内ではダメ。価値や物語を伝えたい。どういう心構えで望めばいい？

スキルアップの手法は？どうやってモチベーションを維持していく？

A “持ちたい” “なりたい” と思えば満点！知識の多さではない。常に気にすること、モノにしてやろうという意欲。それらはすべて『自覚』から始まるものであり、毎日の努力につながる。

Q安価なツアーが横行して困っている。目的に応じた住み分けが必要では？

A根本として、安価が「悪」ではないということの理解も必要。一方、閉じたエコツーリズムは老いて終わる。どうやって地域のバランスを取っていくのかはある程度の話し合いが必要。

---

## プレゼンテーション③ いろいろなものの持続性をもつ手段

★【持続性】がキーワード。

- ・ 今、担い手が激減している。昔は地域は地域で守られてきた。ところが次の世代には今のままでは望めない  
→持続性が必ず必要になる。
- ・ 持続させるために消耗型エコツアーではいけない。
- ・ 自然の恵みが人間の恵みになるまでを見せられなければならない  
→取り出せる力＝ガイドの存在
- ・ 公益性を持たせることも大切。この考えから生まれたのがエコツーリズムの中のエコツアーである。
- ・ 協働とはパートナーシップ、人と力を合わせるということ

## プレゼンテーション④ エコツアーのイベント化・商品化・事業化？

### ★エコツアーには様々な業態が存在する

- ・ 世の中には無料なもの、安価なもの、高価なもの、様々なエコツアーが存在する。かといってそれぞれのイベントは間違いではないし、否定も制約もできない（もちろん便宜を図るばかりがサービスでもない）。
- ・ 新たな業態を始めるということは常識を破ること。古くからの業態の人にはこれまでの努力や自負があるが、時代の要請であるのであれば、誰もが認め合わなければならない。古くからの業態の人でも受け入れなければならないし、新たな業態を始める人たちも古くからの業態を疎かにしてはならない。  
⇒共存の方法…内容を区分する、得意分野を分け合う、時間を融通しあう など

- ・ 価格等については地域で相談する場があっていい。新たな業態が始まろうとしているのであれば、便宜を図っていくことも必要。調整がつかないのであれば、違いをしっかりと伝えていき、区別していく努力も必要。

### ★エコツアーの区分は「イベント」「商品」「事業」の大きく3つに分類される

- ・ 「イベント化」とは、イベントを実施したり、学校行事や林間学校などを行うこと
- ・ 「商品化」とは、ツアーを提供し、お金を払っていただくこと。  
→商品化はだれでもできる
- ・ 「事業化」とは、常に振り返りや検証を行い、自立した行動にしていくこと

※自然を守る方法を考えるのがエコツーリズムであり、エコツアーがアウトドアスポーツに引っ張られないよう注意しなければならない

### ★プロはプロらしくあれ！（チェックリストを用いて説明）

- ・ お金をいただくということは、お金と引き換えに提供しなければならない義務が発生するということを自覚しなければならない
- ・ 振り返りはとても大切
- ・ リーダーシップは発揮“しなければならない”。指示命令で良い！

例) - 安全管理  
- グループコントロール  
- タイムスケジュール

---

### 質疑応答

Q旅行業の問題が常につきまとう

Aこれは全国的な問題。違法行為は避けてほしい。タクシーや宿泊施設との協働などでクリアしていったほしい。

国の動きにも注視していったほしい。

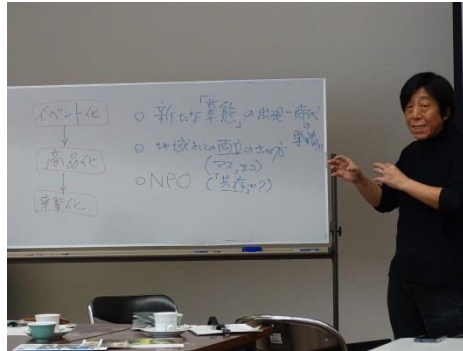
Q教育旅行等で常に“同じ体験”を求められ苦慮している

A自然の中で全く同じはあり得ない。そういうときは『自然のせい』にしてしまうと良い。

## 【記録写真】



講師の話に聞き入る受講者



丁寧に説明くださった横山先生



休憩中も意見交換する参加者

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

- ①エコツーリズムについての理解醸成が進み、地域で主に取り組む団体間の共通認識が図られた
  - ・ 「エコツーリズムとは何か？」ということを再確認できた
  - ・ エコツアーにおけるガイドのあり方、役割等に対する意識が高まった
  - ・ エコツアー推進の大きな足かせとなっていた「ガイド間の認識のズレ」を修正することができた
- ②組織で考え方や取り組み方が違う中で『共存』の可能性を見出すことができた
  - ・ これまでは考え方や取り組みの違いが一部で『場所を荒らす』『営業妨害』といった思いにつながってしまっていたが、「イベント」「商品化」「事業化」という3段階のステップを明示いただくことで、それぞれの組織のポジショニングが明確になり、地元の中にも『共存』という考え方が芽生えた
- ③蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会再始動の大きなきっかけとなった
  - ・ 休眠状態となっていた蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会の必要性を再認識することができた

## 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ 地元ガイドの資質向上、組織力向上
- ・ ガイド組織間の相互理解の深化、共存・協力関係の構築
- ・ 行政イベントとガイド組織が実施するエコツアー商品・エコツアー事業の相互理解の深化、協力関係の一層の強化、共存の実現
- ・ 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会の再始動と地域全体での組織力強化
- ・ エコツーリズムの中のエコツアーの一層の推進

## 3) 今後の取り組み

- ・ 蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会の再始動

## (5) 今後の取り組み推進にあたり参考になった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

- ・ 共存こそ課題解決のための唯一ともいえる手段であること
- ・ 「イベント」「商品化」「事業化」という3つのステップで考えていけば共存の道は開かれるということ
- ・ ガイドにとって知識はもちろんのこと「資質」が重要であること

### 2) その他感想

- ・ 後にも書かせていただきますが、課題解決に向けた的確なプログラム構成、アドバイス、落としどころと、非の打ちどころのないものでした。様々な研修を経験している参加者も納得の様子で、感謝の言葉を数多くいただきました。
- ・ 課題の中心だったガイド団体間の認識のズレも一定の統一を図ることができたと感じております。早いうちに次の場を設けたいと思います。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

---

横山 隆一氏 (公益財団法人日本自然保護協会 (NACS-J) 参事)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

凡そ 10 年前からエコツーリズムの取り組みを進め、事務局を当初の市から地元の観光協会に移したが、現在は休眠状態とのこと。その中で、ボランティアベースのガイドグループ、有料ガイドツアーの事業化を図ろうとするグループ、それ以外の観光と教育に関心を持つ個々のガイド希望者に分かれて、前二者が反目し合いながらそれぞれ催しものが企画実施されているとのこと。エコツーリズムを進めるための相互協力や、事態の改善のためのコミュニケーションは全くなく、折り合いのつけようがないという中で実施した。

#### ②課題

そもそも、エコツーリズムをこの地域に導入しようとする目的、地域が必要とする観光と観光客層の今後の理想像、そのための手段や体制と人材の将来像等が定まっていないこと。また、エコツーリズムを進めようすることと、地域の社会環境・自然環境の関係や観光との関係の整理や達成したい状況といった「目標と道筋」が整理も共有もされていないこと。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

日本海側の環境条件に支配される地域で、土地固有の自然林を持つ山岳地域と清冽な水のある溪流環境は、魅力的。過去の家畜生産によって作られた、維持に火入れを必要とする山麓部の半自然草地やその中に広がる里地の希少生物種の生息環境は、維持していく環境上の価値は高い。現在も続く一次産業と二次・三次産業に使用されている平たん部がこれらと組み合わせ、旧来の開拓地・観光地・別荘地と観光農園・畑地と集落等の広がりの中には、多くの「地域知」の素材が見られる。また、「生きもののふれあいの里」のフィールドとビジターへのサービス施設も近隣にあり、観光と教育啓発活動のフィールドには恵まれていると感じた。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

地域の自然誌と人間社会の歴史の関係が表出しているため。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

共有のテキスト(目的・目標・手段を理解する教科書)がない中での対立と軋轢、対抗的な個々の解釈の押し付け合いが起きていると考えられたため、そもそものエコツーリズムが生まれた背景や意図の解説から始まる講義とそれについて討議する全体ディスカッションを各一時間半程度行うことを1セットとし、テーマを深めつつこれを1.5日間に五回繰り返した。詳細は、報告会でのPPT参照。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

ようやく、構想や共通の達成目標をどのようなものにしていくかを検討するスタートラインに立ったと思えるが、法に基づく構想を作り、認定を受けるかどうかは検討中とのことであった。

#### ②全体構想策定への意向について

同上。

#### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

この地域における、エコツーリズムの形、位置づけ方、地域社会の関わり方の確定と、ガイド候補者たちの意識との整合を図ることか。

### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

場と施設と人材と動機は理想的な形で存在しているので、コミュニケーションを深めて官官、官民、民民共に協力しあえば、かなりのものが作り出せると思われる。コミュニケーションのコーディネートの中心をなす、数人の中立的で意欲的な協働取り組み推進グループをまずは作られたらどうか。

## 3-12. 宿毛商工会議所（高知県宿毛市）

### （1）アドバイザー派遣申請の背景

---

#### ●地域の概要

【人口】 21,598 人（平成 28 年 1 月 1 日現在）

【面積】 286.1 k m<sup>2</sup>

【地勢】

宿毛市は四国西南地域、高知県の最西端に位置している。市の西部は愛媛県に接し、南部はリアス式海岸をなす宿毛湾に臨む。

【気候、自然】

温暖な気候に恵まれた宿毛市は全国のどこよりも桜の開花が早い街で、桜の里として情報発信を行っている。海・山・川の豊かな自然に恵まれた地域である。

【歴史】

現宿毛市は、1954 年に宿毛町、小筑紫町、橋上（はしかみ）村、山奈村、平田村、沖の島村の 2 町 4 村が合併し誕生した。

歴史は古く、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代等を通しこれらの文化は、九州或いは瀬戸内から宿毛湾を経て土佐へ入っており、市内には各時代の初期の遺跡が残っている。

【観光】

- ・ 離島（沖の島、鵜来島）
- ・ 海（磯釣り、ダイビング、漁業体験）
- ・ 出井の甌穴
- ・ だるま夕日
- ・ 明治維新以来の偉人の歴史
- ・ 遍路道（39 番札所延光寺、松尾峠）
- ・ 食（文旦、小夏、焼酎、だるま苺、鰹、キビナゴ、皿鉢料理等）
- ・ サンゴ

【地域資源の概要】

温暖な気候や海産物を中心とした豊かな食資源に恵まれる当市は、暮らしやすさという面において優位性を持っている。また、高知県幡多地域の地理的な中心部である当市内には都市機能が整っており、地域の中核病院をはじめとした医療機関も集積している。

また、特産物としてブリ、コビン、ドロメ、キリアイ、カメノテなどの海産物や、宿毛小夏、直七、シモン芋などの農産物など特徴的な素材が存在している。なかでも当市特産のキビナゴはアンチエイジングやアレルギー予防、成人病予防に効果があるとされており、高い栄養価が注目を集めている素材である。

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

宿毛市（以下、当市）は四国の西南端に位置し、全国どこよりも早い桜の開花が示すように、温暖な気候と、山・川・海の全てがそろった美しい自然がほぼそのまま残されており、多様な住環境のもと、生活の豊さを実感することができる。この環境が地域では当たり前のものと認識されており、その豊かさをあまり追及していない面が多々ある。

ただ、地理的条件から企業立地は少なく小規模・零細事業者が多く経営基盤が弱い為、雇用の場を求め若年層を中心に人口が流出、少子化・高齢化も加わり、街の人口は減少傾向にある。本取組みを持続的に継続することで、課題解決に向けた一助となれればと考えている。

### (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                                                                                                                                                                                     |                              |
|-----------|---|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|
| 日         | 時 | 【1 回目】平成 28 年 1 月 20 日（水）～平成 28 年 1 月 22 日（金）<br>【2 回目】平成 28 年 2 月 4 日（木）～平成 28 年 2 月 6 日（土）                                                                                                                                                        |                              |
| 場         | 所 | 【1 回目】宿毛市（出井の甌穴、篠山、宿毛市推奨品の製造工場、宿毛市橋上町、宿毛市役所、宿毛商工会議所、宿毛観光協会）<br>【2 回目】宿毛市（宿毛市中心市街地商店、松尾峠、宿毛市宇須々木、宿毛市役所、宿毛商工会議所、宿毛観光協会）                                                                                                                               |                              |
| アドバイザー    |   | 地域観光プロデュースセンター 代表取締役 吉見 精二氏                                                                                                                                                                                                                         |                              |
| 参         | 加 | 者                                                                                                                                                                                                                                                   | 【1 回目】計 11 名<br>【2 回目】計 12 名 |
| スケジュール・方法 |   | 【1 回目】地域資源の発見、発掘（フィールドワーク）の訪問箇所等の打合せ、フィールドワークの実施、個別地区の取組み状況についてヒアリング、宿毛市の観光への取組み状況等のヒアリング等、エコツーリズムに対する意識啓発、DMO 含めた組織運営のトレンド等<br>【2 回目】地域に対する提案内容等の打合せ、地域資源の発見、発掘（フィールドワーク）の訪問箇所等の打合せ、フィールドワークの実施、宿毛市への提案、エコツアーの作り方等、遍路道のモニタリング、エコツアー国際化、外国人の受入体勢づくり |                              |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

【1回目】平成28年1月20日（水）～平成28年1月22日（金）

◆エコツアーとは何か/活かせる地域資源「地域の宝物発見①」

| 場所                                                                   | 内容                                                                                                                                                                                                  |
|----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 中村駅、中村第一ホテル                                                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・エコツーリズムの考え方について、意見交換</li> <li>・宿毛市の地域資源の中で、活かせそうな場所についてアドバイス</li> </ul>                                                                                     |
| JA 宿毛市楠山出張所、出井の甕穴、篠山、里山の家、（有）菱田ベーカリー和田工場、宿毛市橋上町、宿毛商工会議所、宿毛観光協会、秋澤ホテル | <ul style="list-style-type: none"> <li>・楠山地区での取組みについて詳細をヒアリング。宿泊等の対応も可能閑散期は春・秋。季節の旬を取り入れたツーリズムの開発についてアドバイス。自らの誇りを持ちお客さまに伝えることが大切。</li> <li>・宿毛スタイルのエコツーリズムの可能性について助言。重点箇所として楠山、市街地を候補とした</li> </ul> |
| 宿毛商工会議所、宿毛市役所                                                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・エコツーリズムに対する意識啓発、DMO 含めた組織運営のトレンドについてアドバイス</li> </ul>                                                                                                        |



【2回目】平成28年2月4日（木）～平成28年2月6日（土）

◆持続可能な体制づくり/活かせる地域資源「地域の宝物発見②」

| 場所                                                                                                       | 実施内容                                                                                                                                                                                                                                         |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 中村駅、新ロイヤルホテル四万十                                                                                          | ・前回の訪問を踏まえ、自治体を含めた各関係者に、どのように来年度に向けた具体的な取組みに繋げていくのか提言内容について打合せを実施。                                                                                                                                                                           |
| 宿毛市宇須々木文旦農家、宿毛市内（ハマショウ、セレス菊地）、宿毛市役所商工観光課（山戸課長、田中氏、大塚氏）、宿毛商工会議所（会頭 田村章、副会頭 立田雅弘、中山 昌幸、長尾専務、佐藤事務局長、黒石課長補佐） | <ul style="list-style-type: none"> <li>・宿毛市役所では、エコツーリズムの実現に向けた協議会の設立、予算の紹介等を実施。来年度に向け、検討するとの回答を得た。</li> <li>・宇須々木では、50年以上続く文旦農家を視察。地域に根付いた文旦と小夏の関係等説明を受ける。段々畑の解放感を味わうプランの可能性を確認した。</li> <li>・会議所から提言を行い、来年度積極的にエコツーリズムを行うことを確認した。</li> </ul> |
| 宿毛市松尾峠、宿毛商工会議所                                                                                           | ・遍路道のモニタリングを実施。過去の石畳等もコースには残っており、入口の公民館で接待等のプラン構想を練る。宿毛市におけるエコツーリズムの候補地。                                                                                                                                                                     |



## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

#### ◆エコツーリズムを推進するにあたり、地域の体制づくりについて明確になった

- ・ 地域の中では、あって当たり前の地域資源が考え方や見せ方によって、「商品」となりうるということが理解できた。宿毛市ならではのエコツーリズムの可能性について、実感が持てた。
- ・ 2回目では、各関係者が一堂に集えるような母体が必要となり、当初は協議会の様な形で推進していくことが望ましいことが理解できた。

#### ◆課題が明確となった。

- ・ 地域資源をフィールドワークによって掘り下げ、商品化をイメージした際、地域ごとの協力者や理解者が必要になること。
- ・ 地域に根付かせるためには、自分たちの取組みだと認知して頂くことが重要だと感じた。

#### ◆その他

- ・ 共通した理念のもと、長期的な計画の必要性を感じている。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ 地域の活性化と交流人口の増加による地域の良さの再発見。
- ・ 地域の連携強化。
- ・ 自治体との連携・情報共有。
- ・ 地元メンバーによる組織化・体制づくり。

### 3) 今後の取り組み

#### ①参加者や関係者に与えた効果

- ・ エコツーリズムに対する取組みの実現性について認知した。
- ・ 山・川・海が揃っている宿毛市の可能性について確認することが実現した。

#### ②今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

- ・ 地域資源の持続的な利用
- ・ 地域振興
- ・ 地域の各関係者間の連携強化
- ・ 各地域が関わってきた歴史を含めた自然、文化の魅力を地域自体が再認識

#### ③今後の取り組み

- ・ ツーリズムプラン作成
- ・ 協議会の設立
- ・ 地域資源の活用や保全に向けたルールづくり

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

- ・ 協議会の設立
- ・ 繁盛期と閑散期の対応
- ・ 地域の魅力の再発見
- ・ 予算確保について

### 2) その他感想

#### ◆地域の魅力を引き出すには地域の「ひと」が大切

地域の資源を見出す取組の必要性や効果について理解を深め、共有化していくことが大切だと考える。その取組みが、地域の良さを再発見し、自らの誇りを取り戻していく。それは、生きがいへとつながり、今後も持続的に豊かに暮らすことへの一つの答えとなる。

#### ◆地域の各関係者が連携し持続的に取り組む

具体的には協議会等、各関係者が参加できる場づくりが重要。単年度の事業で終わるのではなく、長期的な計画を持って取り組むことが必要。

#### ◆地域に根付かせるのに時間がかかる

地域全体の盛り上がりや協力関係が成り立たないと、成立しないと考えている。さらなる推進体制の強化が必要。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

吉見 精二氏（地域観光プロデュースセンター 代表取締役）

---

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

宿毛市は、豊かな自然「海」「山」「里」に恵まれ、これに支えられて暮らしや文化が残る地域であるが、一次産業や地場産業の衰退などが今なお続いており、このような状況の打開策として宿毛商工会議所は、新たな発想としてエコツーリズムによる地域観光の活性化の考えに基づき、地域資源を再発見しそれを活かす住民参加型の活動に取り組むことと活動を始動した。

#### ②課題

これまでに、住民主体の活動も散発的には実施されてきたが、持続的な活動に至っておらず、今回の「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」において、地域資源の発掘や情報発信、地域資源を活用したツアーの企画、体験交流の受入プログラムの企画運営などの手法を研究し、まちづくり型エコツーリズム推進の芽を生みだすための運動を推進することを課題としている。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

宿毛市は四国西南地域、高知県の最西端に位置していて、市の西部は愛媛県に接し、交通アクセスの点ではハンデがあるが、一方で、海・山・川の豊かな自然に恵まれた地域である。全国で一番早い桜の開花宣言など地域自慢を情報発信している。

エコツーリズムに適う観光資源として、離島（沖の島、鶴来島）、海（民泊、漁業体験）、山（篠山）、川（出井の甕穴）、宿毛湾（だるま夕日）、や、遍路道（松尾峠～愛媛県越え）などがあげられ、エコツアープログラムづくりに活かせる素材が散在している。

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

山間地の楠山地区では廃校後小学校の活用による宿泊体験観光も行われており、地味ではあるが、地元住民によって確かな活動が推進されている。また、海浜地区の栄喜では、女性グループも交流事業や地産品開発の事業を起業しており、人的資源もある。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

#### 取り組み課題の抽出

- ・ 宿毛市内をエリア毎に分け、理想としてエリアのコアとなる人材を育成していく
- ・ 地域資源の活用は、エリアを山・まち・海＋四国巡礼路の、3＋1等に分ける
- ・ 地図上の周遊ルート・動線の概略図の作成
- ・ 地区別、素材のテーマ別資源台帳の作成

#### 取り組みの方向性

- ・ 地域の人材育成については、地域資源を活かし、まちの人と旅人がお互いに高まり合えるエコツーリズムの考えに基づく交流観光の創造を目指すことを目的とする。
- ・ 目的として、「エコツアープログラム企画運営ビジネス起業者」が当市内から出現することを理想に据え、人材育成研修(講習)を実施することを喫緊の課題とする。

#### 講義の目的

- ・ 次年度以降の事業展開も見据え、コア人材(推進リーダー)としての育成を目的
- ・ 宿毛市の着地型観光に対応したエコツーリズムの商品化に向けた方向性を示唆。

#### 講義の内容

- ・ 宿毛の山・川・海と遍路道などを实地踏査し、現場でのヒアリングもまじえた調査に基づいて、現場での打合せタイムに具体的な実施プランについてアドバイスした。
- ・ 例えば、山間部の楠山地区の取組みである廃校を活用した体験宿泊等の事業について、今後は、夏季シーズンの対応に留まらず、閑散期の春・秋・冬の季節も、旬のプログラムを取り入れたエコツーリズムの開発についてアドバイス。
- ・ 自らの地域の宝を誇り、その思いをお客さまに伝えることが交流エコツーリズムの魅力。宿毛スタイルのエコツーリズムの可能性について助言。この地域を、取り組みの重点箇所の一つとした。
- ・ このような実施事例の内容を充実させ膨らますことと、この事例を他地域・他のグループの事業としてノウハウを展開していくことが成功への近道になること。

### 4) エコツーリズム推進全体構造への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

今回、いわば初めてエコツーリズム推進の取り組みに踏み出した地域であるが、2度にわたって、宿毛市地域振興課と、観光課にエコツーリズム推進と地域活性化の取組みについて具体的な方向性を提案した。エコツーリズム推進全体構想までは道程がある。

## ②全体構想策定への意向について

まずは、協議会組織の設立を促しているところである。宿毛市にも宿毛商工会議所が中核となつて次年度も取り組もうとする事業への助成を提案しており、今回のアドバイザー派遣事業を契機にエコツーリズム推進が軌道に乗れば、全体構想の議論も可能。

## ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

何よりも、地域の多彩な団体個人が主体的に声をあげ、エコツーリズム推進組織を設立し、商工会議所に加えて行政が参加し支援することが、最初の一步となると考える。

## 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

エコツーリズム推進による地域活性化で目指すべき全体構想を。

地域の営みが元気でなければ、人は魅力を感じないし、訪れはしない。「地方の元気」（まちづくりと産業再生）と「交流型ツーリズム振興」は車の両輪、好循環を創出する。

まず、エリアの地域資源の強みを活かす。それは、地域に既にある豊かな環境・自然資源に育まれた風土とそこで営まれる暮らし生活、伝統文化資源、そして伝統と技術を継承する地場産業など誇れるものを再発見する。

目標は、地域の暮らしの誇りを伝え、地域住民と来訪者、作り手と使い手（消費者）の出会いの場となる「宿毛型エコツーリズム」を創出することである。

交流人口増大による観光消費の経済効果だけでなく、地域の誇りの回復によるまちづくりの推進と、地域素材、食材をいかした新商品開発、地域ブランド強化に向けた事業革新等の地域経済の活性化、地域内主体の事業推進力の強化につなげていく。

さらに、その流通のための情報発信、販売システム化、基盤構築を行ない、持続的な事業推進へとつなげるため、地域の着地型観光推進のプラットフォーム機能を構築することが望まれる。いわゆる「地域版DMOの構築」による「地域創造観光」の推進である。

いま、地方創生のなかで「地域は観光に頼らなければやっていけない！」とも言われている。とくに、地方は人口減少など直面する課題、時代の流れをどう受け止めるのか。しかし、地方には「文化がある自然がある」ことを活かした成功事例を創出しよう。

## 3-13. 知名町（鹿児島県大島郡）

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 6,321 人（平成 28 年 2 月 1 日現在）

【面積】 53.31 k m<sup>2</sup>

【地勢】

本町は鹿児島市の南方 546km、沖縄の北方 180 キロメートルの洋上に浮かぶ沖永良部島（周囲 55.8km、面積 93.67km<sup>2</sup>）の南西部に位置している。東西 10 km、南北 8 kmにして東北部は和泊町に接し、南方には与論島や沖縄本島が望まれ北は東シナ海に面している。

【気候、自然】

標高 245mの大山には 244ha の町有林があり、その頂上部に航空自衛隊のレーダー基地がある。島の大部分が隆起珊瑚礁で形成されており、カルスト地形の発達により大山周辺にはドリーネ（凹地）が多数点在し、数多くの鍾乳洞がある。その洞内を流れる地下水が海岸線付近で湧き水となって地表に現れる。本町の 21 集落はこの湧き水を中心として形成されてきた。

本島全体がカルスト地形を呈しているため石灰岩が露出している所が多くあるが、亜熱帯樹林が繁茂する大山周辺以外は比較的平坦部が多く、耕地に恵まれ利用度は極めて高く、さとうきび、花き、輸送野菜、葉たばこなどの畑作が盛んであるが、河川は殆ど無く、わずかに 2 級河川の余多川があるのみで表流水に乏しく、水源は地下水に依存している。

平均気温 22℃という温暖な気候であるが、台風の常襲地帯であり、町民の暮らしや農作物に被害を与えている。

【過疎地域自立促進計画より抜粋】

#### ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

本町の瀬利覚集落において、平成 25 年に名水むらジッキョ、自立創造委員会（通称：ファングル塾）が設立され、エコツーリズムの推進に取り組んでいる。

当塾において、会員の大半が高齢者であり、瀬利覚集落の一部しか参加していない状況で、集落民との温度差が見受けられるようになっている。

今回、アドバイザー派遣事業を活用し、集落にある“宝”の素晴らしさを認識し、アドバイザーに評価してもらうことにより、活動の推進力や仲間づくりの契機としたい。

ファングル塾とは..

沖永良部島 知名町瀬利覚字にある任意団体。平成25年に設立し、字の長老達が主となって、「確かな未来は、懐かしい過去から」をキャッチフレーズに人口減少が続く中、自立・創造的な活動と、島の宝（自然・文化等）を未来の子ども達に残し伝える活動を行っています。（※ファングルは方言で「意地張り」、「頑固」の意）

主な活動1 「トウギョ復活プロジェクト」



主な活動2 「平成の名水100選ジッキョノホー保全」



主な活動3 「伝統芸能瀬利覚の獅子舞と獅子保存」



主な活動4 「拠点施設 ファングル塾の館」



#### 主な活動5 「やさい市」



#### 主な活動6 「子どもたちに学習の場として開放」



### (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                       |
|-----------|---|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成 28 年 2 月 1 日（月）～2 月 3 日（水）                                                         |
| 場         | 所 | 鹿児島県大島郡知名町瀬利覚                                                                         |
| ア         | ド | バ                                                                                     |
| イ         | ザ | ー                                                                                     |
| 参         | 加 | 者                                                                                     |
|           |   | 計 28 名                                                                                |
| スケジュール・方法 |   | <b>【1 日目】</b> 芭蕉布ストラップづくり（あまみシマ博覧会）<br><b>【2 日目】</b> 講話、ワークショップ<br><b>【3 日目】</b> （移動） |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

本事業では、集落にある“宝”の素晴らしさを認識し、アドバイザーに評価してもらうことにより、活動の推進力や仲間づくりの契機にする目的で、フェノロジーカレンダーの作成を行ったが、あくまでも作成がゴールではなく、作成までのプロセスに重点を置き、宝を掘り起こす手法を学んだ。アドバイザーには、「エコツーリズムと宝探し」と題し、エコツーリズムを始める意義や、全国で取組まれている事例の紹介をいただいた。

（アドバイザーのコメント）

- ・ 多くの人が参加することに意味がある。誰かに任せない
- ・ 老若男女様々な視点で
- ・ 今あるものにこだわらない
- ・ 作りながらたくさん話をする事
- ・ 作り直しはいつでもOK

#### 【ワークショップ風景】



## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズムを推進するにあたっての第一段階“宝さがし”の重要性を認識できたことや、掘り起こされた“宝”や失われた“宝”を参加者全員で共有できたこと。

### 2) 今後、期待される効果

まだまだ、コアなメンバーでの活動が中心であるものの、フェノロジーカレンダーで『見える化』し、再度、集落全体で“宝”を共有することにより“宝”を次世代につなげていくことことや、失われた“宝”の復活が期待される。

### 3) 今後の取り組み

フェノロジーカレンダーを作成することによって掘りこされた“宝”を個々としてとらえるのではなく、関連付けることによって現在行っているまちあるき以外の新しいプログラムの造成が期待される。

また、他集落においても同様の取り組みを実施することにより、集落（全 21 集落）毎のフェノロジーカレンダー作成も期待される。

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事例

#### 宝探しからエコツーリズムへ

| 段階 |       | 内容                                      |
|----|-------|-----------------------------------------|
| ①探 | 宝を探す  | 地域固有の自然、歴史、文化、産業、人などの資源を地域住民自身が発掘・再発見する |
| ②磨 | 宝を磨く  | 発掘・再発見された宝を保存・伝承・発展させるための活動             |
| ③誇 | 宝を誇る  | 宝の価値を認識し、地域の中で価値認識を共有するための活動            |
| ④伝 | 宝を伝える | 地域の外に向かって、宝を発信するための活動                   |
| ⑤興 | 宝を活かす | 宝を活用して産業に結びつけるための活動                     |

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

海津 ゆりえ氏 (文教大学 国際学部教授)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

沖永良部島は、現在奄美群島全域で進めているエコツーリズム推進法認定取得に向けた群島全体の活動の中で、ガイド養成やルールづくり、まちあるきコース開発等に取り組んでいる。今後、各集落での案内機能や島ごとの窓口機能の整備などを進めていく予定である。アドバイザー申請があった知名町瀬利覚集落（通称・ジッキョ：地の水という意味）では、住民自治によるシマづくりを進める活動団体「ジッキョファングル塾」が平成 25 年に設立され、有償ボランティアガイドによる「ジッキョまるごと歴史・文化・自然散策ツアー」の実施や週 1 回の野菜市、集落のたまり場づくり等を続けている。

瀬利覚集落では、奄美群島広域事務組合による「聞き書き」が進められており、今回のアドバイザー事業はその一環としても位置付けられている。

#### ②課題

瀬利覚集落は知名町では地域づくりや観光に対して積極的な集落であるが、その背景としてファングル塾の存在が大きい。一方、ファングル塾以外の住民の関りを求めることが困難であり、担い手が固定化する懸念がある。高齢化が進むファングル塾も危機感を感じており、集落全体あるいはさらに周辺も含めて地域づくりや観光客の受け入れができるようにすることが課題である。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ① 魅力を感じた地域資源

ジッキョヌホー、トウギョのビオトープ、向田神社、農地、墓地、海

#### ② 地域資源に魅力を感じた理由

瀬利覚集落には、沖永良部島の特徴を表す資源がいくつも存在する。代表的な資源を挙げる。

・ジッキョヌホー

ホーとは川の意味で、ジッキョヌホー＝ジッキョ（瀬利覚）の川の意味。環境省の平成の水辺 100 選にも選定されている、瀬利覚集落の水場である。石灰岩地の沖永良部島では、水をどのように確保するかが重要な課題であった。昭和 35 年に水道が整備されるまではここで人々は水を取り、洗い物をし、暑い夏は水浴びをしてきた。今は利用はされなくなったが、公民館がすぐそばにあり、園地整備がされていて憩いの場として親しまれている。また毎月清掃を行い、ホー祭りを開催するなど、集落の中心としての機能は失われていない。

・トウギョのビオトープ

ファンブル塾でトウギョのビオトープを管理しており、子供たちの島学習やツアーでの立ち寄り拠点になっている。農地内に設けられた池であるが、田芋その他島の水生植物とともにトウギョが飼育されており、生態系を学ぶ場となっている。

- ・ 向田神社

瀬利覚字の神社として祭礼が守られている。もとは琉球王府を収めた尚三家の北山王の末裔を祀ったものであるが、今は字が管理主体となっている。薩摩よりも琉球とのつながりが濃かった沖永良部島の歴史を物語る資源である。

- ・ 農地

サトウキビとジャガイモを2大産物とする沖永良部島の風景を創るのが農地である。収穫時期は島外からのボランティアや島の高校生たちも手伝いに駆り出され、希望すれば体験することもできる。住民との自然な交流の場となる。

- ・ 墓地

埋葬と弔いの習慣は本土とは全く異なり、墓地にそのあり方が現れている。埋葬から3年後の洗骨儀式は先祖との交流の姿であり、沖永良部島の人との関わり方が伺える。

- ・ 海岸

ウミガメやザトウクジラを見ることも多い。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

瀬利覚集落の希望により、エコツーリズム推進地域の事例紹介とフェノロジー・カレンダーづくりワークショップを開催した。プログラムは以下の通りである。

- ・ 開催日：2016年2月22日（火）
- ・ 場所：瀬利覚字防災センター
- ・ 概要
  - 1:30-2:00 話・エコツーリズムと宝探し
    - エコツーリズムとは何か
    - 各地のエコツアーの事例（飯能、鳥羽など地域参加型エコツアーを中心に）
    - フェノロジー・カレンダーとは
  - 2:00-3:00 暦をつくろう Part 1（宝を出し合う）
    - カレンダーの縦軸を話し合う
    - グループに分かれて月別資源を出し合う
  - 3:15-4:30 暦をつくろう Part 2（カレンダーをまとめる）
  - 4:30-5:00 宝探しを続けるために

#### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

全体構想は12市町村の推進協議会で合意形成がなされており、現在、国への提出に向けて現地環境事務所と調整中である。

#### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

瀬利覚集落のみなさんは「結」（イータバ）の心を大切に、集落内のつながりを強く保つことを大切にしていってほしい。また外から訪れる人々に対しても積極的に受け入れて集落の将来に向けてプラスになることをキャッチしたり、和泊町の集落とも連携しようとしていたりされています。このような人的つながりを通して地域づくりを進めることは、集落主義を超えて沖永良部島の個性を築き、発信力を強めることにつながると思います。また沖永良部島全体に目を転じると、島キャンやあまみ博覧会など多様な手法で集落の活動を発信するしかけを講じています。頑固者を意味するファンクルの勢いで、新しい奄美の時代へ挑戦を続けていただければと思います。

未開発の資源もたくさんあり、「まちあるき」やフェノロジー・カレンダーを活かした商品開発、食の開発など多様な展開ができると思います。若者の力などを活用して集落を楽しむプログラムをたくさん作ってください。フェノロジー・カレンダーはぜひ方言で作って、方言講座にも役立てていただければと思います。

## 3-14. 奄美大島エコツアーガイド連絡協議会

(鹿児島県大島郡奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町)

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 63,443 人

【面積】 712.52 k m<sup>2</sup>、全群島面積の 57.9%

【地勢】

現在、奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町の 1 市 2 町 2 村からなっている。

この島は、四万十帯に属する堆積岩類（砂岩、頁岩）がほぼ全域にわたって広く分布している。

加計呂麻島、請島及び与路島等の属島を含む全島の 84.4%、68,541 ha は森林及び原野に覆れ、耕地面積はわずかに 2,170 ha で全面積の 3% にすぎない。山岳中の最高峰は湯湾岳（694m）で、島の中央からやや西側にそびえ立っており、油井岳、松長山、鳥ヶ峰岳等の 400m 以上の山岳とともに本島の脊柱部を構成している。

【自然】

猛毒で知られているハブや、天然記念物として保護されているアマミノクロウサギ、オオトラツグミ、ルリカケス（昭和 40 年 5 月鹿児島県島に指定）、アカヒゲ、オカヤドカリ、アマミイシカワガエルなどの他、絶滅危惧種のリュウキュウアユ、アマミヤマシギ、アマミマルバネクワガタや奄美大島の固有種であるアマミセイシカ、アマミエビネなど貴重な動植物が多く生息している。

【地域資源の概要】

産業としては、さとうきび、野菜、果樹、肉用牛を主体とした農業と黒糖焼酎、大島紬が主なものであり、特産物としては大島紬、たんかん、パッションフルーツ、マンゴー、黒糖焼酎等がある。また、瀬戸内町、宇検村では、真珠、クロマグロ等の魚類の養殖が行われている。

【平成 26 年度奄美群島の概況より抜粋】

#### ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

国立公園の指定・世界自然遺産登録の実現に向けて取り組みを進めているところであるが、その実現に伴っては、観光客が増大し過剰利用による野生動植物への影響や地域外からのガイドの乱立等の影響が懸念されている。

利用者に対してのおもてなしや安全管理、奄美群島の自然環境・野生動植物の保全等に対する理解を促進するためには、エコツアーガイドに求められる役割は非常に高いものであり、エコツアーガイドの社会的地位の確立を図るためにも「エコツアーガイド認定制度」を構築したいと考えているところである。

そのため、尾瀬地域で「エコツアーガイド認定制度」の構築に深く関わってきた安類智仁氏を招聘し、視察及び講演会・意見交換会を開催し、尾瀬の認定制度構築の経緯や利用と保全のルール・仕組みづくり、環境教育について先進地の事例として学び、奄美地域での活用を検討する材料とする。

○奄美大島エコツアーガイド連絡協議会の活動内容

【総会】



【役員会】



【自主研修会 1】



【自主研修会 2】



【救命講習】



【外来種駆除作業】



## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|             |   |                                                 |
|-------------|---|-------------------------------------------------|
| 日           | 時 | 平成 28 年 2 月 3 日（水）～平成 28 年 2 月 5 日（金）           |
| 場           | 所 | 鹿児島県奄美大島一円                                      |
| ア ド バ イ ザ ー |   | NPO 法人片品・山と森の学校 副代表、尾瀬ガイド協会 専務理事<br>安類 智仁氏      |
| 参 加 者       |   | 計 33 名                                          |
| スケジュール・方法   |   | 【1 日目】事前打ち合わせ<br>【2 日目】散策、視察、講演会<br>【3 日目】カヌー体験 |

## (3) アドバイスの内容（議事録）

### 1) 尾瀬の概要

- ・ 尾瀬国立公園 37,200ha（群馬県、福島県、新潟県、栃木県にまたがる）
- ・ 平成 19 年に国立公園指定
- ・ 国有地 55%、民有地 45%（民有地は東京電力所有）
- ・ 年間利用者数 約 32 万人
- ・ 日本の自然保護運動発祥の地、利用者意識が高い → 湿原の保存状態が国内随一
- ・ ガイドシーズン：5 月上旬～10 月中旬の約半年間（大半がフラワーハイキング）
- ・ ガイド依頼の割合は、エージェント約 6 割、尾瀬学校約 3 割、個人約 1 割（NPO 法人片品・山と森の学校の場合）

### 2) 尾瀬ガイド認定制度創設の経緯

#### ①尾瀬ガイド協会の設立

平成 16 年、ガイドの資質向上やガイド間の交流・情報交換を目的に尾瀬ガイドネットワーク設立。

その後、尾瀬ガイド制度研究会へ発展を経て、平成 20 年に尾瀬国立公園の自然保護と適正利用をはかりながら、環境教育とエコツーリズムを推進することを目的に尾瀬ガイド協会設立。事務局：（公財）尾瀬保護財団

#### ②尾瀬ガイド認定制度の概要

尾瀬に関係する自治体、自然保護団体、有識者、尾瀬ガイド等の関係者が参画し、尾瀬国立公園としての公式ガイド制度を創設。

→ 「ガイド自身が認定制度をつくる」という意識づけが最も重要。認定ガイドの種類：「尾瀬自然ガイド」（尾瀬でガイドとして活動する上で必要な知識や技術を有する者）と「尾瀬登山ガイド」（尾瀬自然ガイドに認定された者で、山岳エリアでのガイド活動に必要な登山技術を有する者）がある。

受験基準：満 20 歳以上、ガイドできる健康と体力、日本赤十字社の救急法救急員と同等の講習修了者

→ 受験基準のハードルはそれほど高くない

ガイド協会の活動内容：制度の検討、テキスト作成、筆記試験・実技試験等

平成 21 年、尾瀬自然ガイド認定第 1 号が誕生

→ ガイド認定者（平成 28 年 1 月現在）尾瀬自然ガイド 279 名、尾瀬登山ガイド 64 名（3 年ごとに更新研修受講が義務）男性 85%、女性 15%、平均年齢 57.1 歳

### ③尾瀬認定ガイドのメリット

※ガイドの社会的地位の確立

→ 認定ガイド制度で最も重視している点は安全管理とインタープリテーションであり、尾瀬ガイド協会がガイドの最低限の質を保証するといった仕組み

→ 利用者は安心・安全に尾瀬を体験できる

尾瀬学校（群馬県、福島県、新潟県魚沼市の小中学生を対象に尾瀬の自然体験を通して郷土愛を育む、ひいては地球環境保全の重要性を学ぶ環境教育の一環）ガイドレシオ（ガイドと参加者の比率）は、1：8 の少人数グループでチーフガイドが学校を訪問して事前学習を行う→チーフガイド次第で学校や生徒のモチベーションが変わるので重要

※尾瀬認定ガイドのみガイドを務めることができる → ガイドに仕事が入る

→（例）尾瀬学校 1 日の入山制限 300 人、ガイドレシオは 1：8

→  $300 \text{ 人} \div 8 \text{ 人} = 37.5 \text{ 人}$  → 1 日最大 37.5 人のガイドに仕事が入る仕組み

※尾瀬ガイド協会が主催する研修会に参加することができる → スキルアップ

## 3) 尾瀬ガイドの役割

### ①安全・時間・行程の管理、自然・文化等の解説、楽しい時間や体験の提供

しかし、引率人数によっては満足度の低下やガイドの実力差が大きいという課題

→ ガイドレシオの重要性

現状のガイドレシオは 1：15 → 理想は 1：8

## ②満足度の向上

利用者のニーズに合わせた対応 → 事前のニーズ聞き取りが重要

尾瀬ファンとしてリピートしていただく働きかけ → 写真アルバムの無料サービス

## ③関係団体との連携

ガイド 1 人では限界 → お話しボランティア、ビジターセンター職員の協力

携帯電波は入らない → 2〜3 kmに山小屋があり、緊急時は走って協力依頼認定ガイドはトランシーバー持参で連携して対応

利用の集中する時期 → 近隣地域（谷川岳）のガイドと連携

## ④プロモーション活動

11 月〜12 月頃に来シーズンに向けてエージェントを対象に尾瀬ガイドダンスを実施（尾瀬ガイド協会主催）

ロケハン等はエージェントのみで行うのではなく、ガイドが同伴し魅力を伝えるようにしている  
→ テレビや雑誌の取材等

できるだけ地域を安売りしない方がよい → 強気の交渉が必要

## 4) ルール・仕組みづくり

- ・ トイレは約 20 か所あり、年間約 1,400 万円の維持・管理費がかかる  
→ 維持・管理費を確保するため 1 回 100 円のチップ制を行っている
- ・ ゴミの持ち帰り運動が始まったのは尾瀬が最初  
→ ガイドのみならず利用者也環境保全（ゴミの持ち帰りや盗掘防止、禁漁等）に対しての意識が高い
- ・ 入山口には警察（山岳系）とボランティアが常駐しており、入山客に対してレクチャー（服装、マナー、安全管理等）を行っている。
- ・ 外来種の侵入防除 → 登山口では「種子落としマット」で靴底の泥を落とす
- ・ マイカー規制 → 山の麓から登山口まで乗合バス・乗合タクシーの運行
- ・ 利用と保全の調整 → 「利用のルールを作ることが保護につながる」

○状況写真

【金作原原生林散策】



【奄美野生生物保護センター視察】



【講演会 1】



【講演会 2】



【マングロープカヌー体験 1】



【マングロープカヌー体験 2】



## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

先進地域で実際にガイド業に携わっている方の話を直に聞くことで、ガイドの役割や重要性、課題などを認識することができた。

価値のある自然や文化を有する奄美地域においては、それを伝えるガイドがいかに重要な存在か再認識することができた。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

ガイドがいかに利用者のニーズを把握し満足していただくため、リピーターとして再度来訪していただくため等を考えて、満足度を向上させるための取り組みが行われることが期待される。

個人だけでなく、関係団体との連携や組織としての活動がいかに重要か理解することで、今後の地域での連携した取り組みや組織的なプロモーション活動が行われることが期待される。

### 3) 今後の取り組み

奄美地域においては、尾瀬でのガイド認定制度のメリットや認定基準、筆記・実技試験の有無等について参考にし、関係団体と慎重に協議を重ね進める必要がある。

## (5) 今後の取り組み推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

●利用のルールを作ることが保護につながる

→保護だけを考え規制するのであれば観光客や地域の観光事業者は満足しないし、利用だけに集中するのは自然環境が悪化する可能性があるのでバランスのとれたエコツアーリズムの推進が必要

●環境収容力について

→環境収容力とは、ある環境が維持できる生物個体数の上限のことであり、多くの地域で過剰利用の期間は一定期間に集中している利用の調整や分散、規制等を行い無駄な施設整備はできるだけ避ける。最大利用者を想定しての施設整備はピーク時のみでシーズンの大半において必要とされない。

### 2) その他感想

国立公園に指定されており、エコツアーリズム推進の先進地域である尾瀬においても、ガイド組織やガイド認定制度の創設には多大な苦労があった。

ガイド認定制度の創設には、それに関わる多くの関係者の協力が不可欠であるが、最も重要なのは実際に案内するガイド自身の意識。

認定ガイドにメリットのある制度が必要。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

安類 智仁氏 (NP0 法人片品・山と森の学校 副代表、尾瀬ガイド協会 専務理事)

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

奄美群島は、鹿児島県本土と沖縄のほぼ中間に位置する有人 8 島の総称で、奄美大島の面積は約 720 平方キロメートルと沖縄本島、佐渡島に次ぐ大きさである。かつては大陸の一部だったが、約 200 万年前に大陸から切り離され、独自の生態系や固有種が遺されてきたと考えられている。こうした固有で希少な動植物の生息・生育地であることから、奄美・琉球は平成 15 年に世界自然遺産候補地となり、平成 29 年度の国立公園指定を経て急ピッチで世界自然遺産への登録を目指している。

このため環境省、鹿児島県、市町村、奄美群島広域事務組合といった行政機関を中心に、指定に向けた調査・協議・調整といった事務作業が進められている。その中でも奄美群島広域事務組合ではエコツーリズムの推進や、エコツアーガイドのサポートを行っており、「奄美大島エコツアーガイド連絡協議会」と「(島毎の)エコツーリズム推進協議会」の事務局として同ツーリズム牽引の中心的役割を果たしている。

また、奄美群島エコツーリズム推進協議会では推進法に基づく全体構想を今年度に策定・提出し、年度内の認定を目指している。奄美群島での全体構想では、エコツーリズム推進体制づくりとガイド認定制度の早期確立を急務としており、上述の連絡協議会でガイド事業者の意見交換・連携を図っている。ガイド認定制度については現在進行形だが、現状では連絡協議会が設けた要件を満たした者を対象に、研修生として 2 年間の講習会を受講することで登録ガイドとなる(2016 年 2 月 4 日現在で登録ガイド 58 名、研修生 48 名)。登録ガイドは連絡協議会が策定した「奄美大島エコツアーガイド自主ルール」を遵守する必要がある、46 項目にわたる自主ルールには動植物採取やゴミのポイ捨てを禁ずるほか、希少動物のロードキル防止のためにナイトツアー等で使う車両の制限スピードを設けている。

#### ②課題

一方で動植物の乱獲・盗掘、外来生物対策、希少種のロードキル、ノイヌ・ノネコの脅威といった資源管理、フィールドの保護管理といった面で課題が散見される。マングース等の外来生物対策については、環境省・鹿児島県によるマングースバスターズが編成されており、手厚い対策が講じられているが、希少な動植物の乱獲・盗掘に対しては保護条例があるものの、その場に居合わせないと罰則効果は薄く、特にラン科植物等は大規模に盗掘され、島内外で取引されている現状がある。こうした課題解決のためには、種の保存法指定を通じて販売についても規制する必要があると思われる。

登録ガイドの活動については現地の特性を活かしたツアープログラムが企画されているが、営業や販路、また料金設定やリピートさせる工夫といった業として安定させる取り組みが必要である。またガイド認定に向けた体制づくりも急務となっている。

また今後ツアーの利用拠点になってくると思われる金作原（きんさくばる）から奥では荒れた林道が続くが、林道の崩壊や携帯圏外であり自然の核心部での安全対策も気になる点である。

## 2) 特に魅力を感じた地域資源等

### ①魅力を感じた地域資源

言うまでもなく奄美群島は固有種・希少種の宝庫であるが、特筆すべきはそれらの動植物と人間との距離感の近さにあると感じた。金作原のトレイルを歩けば、その路傍には固有種が生育する環境があり、鳴き交う野鳥たちは日本人だけでなく、世界から野鳥愛好家が集まってくるような希少種ばかりである。また住用湾に広がるマングローブ原生林は、規模でこそ西表島より小さいものの、動力船が入らない湾のため健全なマングローブ林が生育している。

こうした自然度の高さと、人間との距離感は日本の自然にあって、奄美群島が群を抜いていると感じた。だれにとっても奄美群島の自然体験は非日常のものとなるが、この距離の近さによって気づかれない価値になってしまうかもしれない。こうした点は今後育成されてくるガイドの腕の見せどころだろう。

今回の派遣期間中には、奄美群島の特殊性を現地ガイドのみなさんが熱く語る様子や、それら資源を大切にしようとする姿勢にも、ガイド本来が持つ人間的な魅力を感じることができた。

### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

すでに述べてしまったが、私が今回の派遣で感じた魅力に共通することは、その場の雰囲気がある。今後の単独国立公園化、世界自然遺産登録に向けて観光客の受入体制が急ピッチで進められると思われるが、利用拠点と自然の核心部とが一律整備とならないよう、その場の雰囲気を大切にしてもらいたいと思う。

## 3) アドバイス（講義等）の概要

### ①金作原原生林散策

- ・ ガイドレスのお客さま配布用にコースガイドやセルフガイドの活用。
- ・ お客さまが購入しやすい大きさ、価格帯の図鑑類作成。
- ・ ガイドのネタ本整備。
- ・ ルート上に簡易な誘導標識整備。

## ②奄美野生生物保護センター視察

- ・ 毎日フィールドを歩いているガイドとの情報交換。
- ・ 雨天時の館内利用。
- ・ 館内解説の随時対応。
- ・ ツアープログラムへの館内解説組み込み。

## ③講演会 「地域の宝をまもり・伝える ～尾瀬認定ガイドのとりくみ～」

- ・ 尾瀬における認定ガイド制度づくりのきっかけと経緯。
- ・ 尾瀬における環境教育、教育旅行の取り組みについて（尾瀬学校）。
- ・ フィールドの保護管理（ルールや仕組み）の方法について。
- ・ ガイドに求められる役割について（お客さまニーズの把握）。
- ・ ガイドの組織化の必要性。
- ・ 意見交換。

## ④交流会

- ・ インバウンドへの対応。
- ・ ツアー料金の設定方法（プライベート、最少催行人数）。
- ・ 予約受付の体制について。
- ・ プロモーションについて。
- ・ 専業ガイド、兼業ガイド、社員ガイド、自営ガイド、それぞれの特性と活かし方。
- ・ 尾瀬認定ガイドの制度内容の詳細。
- ・ 尾瀬認定ガイドテキストの内容の詳細。

## ⑤その他

- ・ ガイド認定制度づくりあたっての注意点（推進体制、構成員、テキスト作成、既存ガイドの受入、認定を受けるメリット等）。
- ・ プロモーションについて。
- ・ 来島者、観光客、ツアー参加者へのアンケートについて。

# 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

## ①全体構想への取組状況について

奄美群島エコツーリズム推進協議会では今年度に全体構想を策定済みであり、環境省へ提出・認定を目指して取り組みを続けている。

## ②全体構想策定への意向について

※上述のとおり。

### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

これまで取り組んできた自主ルールや登録ガイドになるための要件、数々の講習会をもとに、認定ガイド制度の設計が必要となる。国立公園化や世界遺産登録に向けて多くの注目が注がれているため、認定ガイド制度についても同時期に動き出すことが望ましい。

そのためには全ての課題を盛り込んだハードルの高い認定制度をいきなり策定するのではなく、現在活動している多くの既存ガイドたちが寄り添えるような認定制度をまずは設計するのが望ましい。

認定制度のテキストを作成するにあたっては、これまでに出版・報告されている多くの書籍や文献を集め、現場に即した部分は各ガイド事業者の得意分野を活かして執筆を分担し、行政や学識者がそれらをチェックする役にあたる事でまずは取り組んでみてはいかがだろうか。

同時に認定ガイドがどういった範囲・期間で、どれくらい活動できるのかを決めておく必要がある。核心部や危険箇所への一般観光客の立ち入りを規制する一方で、認定ガイドを伴えば入れる場所や、全く入場できない区域を作るのかも併せて考えておく必要がある。

## 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

3日間の短い滞在期間であったが、群を抜く自然度の高さと保存状態、人間との距離感について圧倒された。そこで生活している方々の自然との付き合い方が、結果として良い雰囲気を残しているのだと感じた。今後はこうした良好な自然環境に魅力を感じて、数多くの旅行者で賑わうと思われる。観光業の振興は数多くの産業を活発にし、活気のある雰囲気が生まれるだろう。

一方で旅行者が魅力を感じて来島する奄美大島の自然環境について、どのようにモニタリングし、保護管理をしていくかについては取り組み不足であると感じた。外来生物対策、乱獲・盗掘の防止への対応は急務であるが、今後新たに発生すると思われる、利用によって生み出されるインパクトについては指標となる事象や生物を選定し、監視していく必要があると思われる。現在進行形で多くの会議体が個別の課題解決のために議論していると思われるが、こうしたモニタリング結果をもとに柔軟に方向性を変えていけるような順応的管理が求められている。

順応的管理によって作られた受入のルールと、旅行者とを結ぶのがガイドの役割だが、ガイドに学習の機会を設けて育成を図るためにも、ネットワークづくりと認定制度づくりが必要となる。彼らガイドは旅行者に対する奄美群島の顔役として、多くのメッセージを届けるわけだが、そうした意味でも業として安定した活動ができるよう、様々なサポートが必要となる。またガイドは毎日のようにフィールドを歩き、旅行者が感じた事と接する機会があるため、こうした貴重な情報を管理側にフィードバックする仕組みも欲しいところである。

国立公園化と世界自然遺産登録を目指しての関係者のご苦勞は想像をはるかに超えるものだろう。そこには人と人との利害関係の調整が最も困難な課題になると思われるが、物言えぬ自然の立場に立った息の長い、継続的な運営を行っていただくことを願っています。

## 3-15. 徳之島エコツアーガイド連絡協議会

(鹿児島県大島郡徳之島町、天城町、伊仙町)

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 25,396 人（徳之島三町）

【面積】 247.85 k m<sup>2</sup>

【地勢】

徳之島は、徳之島町、天城町、伊仙町の三町で構成されている。耕地面積が全面積の 27.8% (6,880ha)、林野面積が 43.3% (10,724ha) を占め、兼業を含め農業を中心とした島である。

【気候、自然】

(気候)

亜熱帯気候に属し、一年を通して暖かい。梅雨時の雨の降り方はスコールとなることが比的多くまた、台風の常襲地となっており、毎年平均して 3 回程度、接近している。

(自然)

大陸との接続と分断を繰り返しながら形成された島嶼という地史的な経緯から、アマミノクロウサギ、アマミヤマシギ、オビトカゲモドキなどの固有種や遺存種といった他の地域には見られない動植物が存在します。

井之川岳、犬田布岳、天城岳周辺には、世界の亜熱帯域の中でも限られた地域にしか成立しない亜熱帯照葉樹林がまとまって存在し、希少な野生動物種の生息・生育地となっています。

これらの森林には、奄美大島では簡単に見ることができない壮齢オキナワウラジロガシ林が発達しています。

徳之島の自然植生は地質の影響を受け、島中央の山地帯の酸性土壌上に発達する上記の森林と低平地の弱塩基性土壌の隆起サンゴ礁石灰岩地帯に発達する森林とに大別することができます。琉球石灰岩上の森林としては明眼の森や義名山に自然性の高いアマミアラカシ群落が発達しており希少な植物が多数分布しています。

海岸部では、隆起サンゴ礁の海食崖（犬田布岬、犬門蓋いのじょうふた等）、花崗岩の露出した海岸（ムシロ瀬）、リーフや自然海浜（喜念浜、畦海岸等）など、特徴的な資源が存在します。

島の北東部にはサンゴ礁が発達し、多くの生き物の棲みかとなっています。沿岸の砂浜ではウミガメの上陸・産卵などの様子が観察できます。

浅間干潟はクロツラヘラサギをはじめとする年間 150 種余りの渡り鳥の中継地となっています。

【歴史】

古くには琉球王朝に統治されていたが、島津藩の侵略により島津藩の領土となる。

昭和 20 年にはアメリカ軍の侵略により米軍の統治下となる。昭和 28 年 12 月日米交渉により奄美群島が本土に復帰し、鹿児島県に編入される。

【観光】

一般的な観光利用は、海岸沿いの犬田布岬、犬之門蓋、金見崎やムシロ瀬などにおける風景探勝等による島内周遊利用が多いと考えられます。また、闘牛も大きな観光資源となっています。

海域の主な利用としては、畔海岸などでの海水浴・スノーケリングや、ダイビング等が行われています。

森林地域の利用は多くはありませんが、近年ではクロウサギ等の希少動物の観察を目的としたナイトツアー、森林や川での自然観察、伝統的な集落の散策等について、ガイドによる案内も実施されています。

※奄美群島エコツーリズム推進全体構想より抜粋

#### 【地域資源の概要】

集落内町歩きのほか、世界自然遺産に向けた取組みの中、徳之島内でもコアな資源の多い三京（みきょう）地区の自然を見ていただき、地域のマップ作りやモデルコース作りの案や実践に向けたアドバイスをいただきたい。また、意識啓発のためのワークショップを関係者へ行っていただきたい。

## ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取組み

平成 25 年度に奄美群島広域事務組合を中心に奄美群島の各島々にエコツアーガイド連絡協議会とエコツーリズム推進協議会を設立し、現在は奄美群島広域事務組合の研修を中心に活動している。しかしながら、島独自での取組み方法が確立されておらず、今後徳之島独自の取組み強化が課題となっている。

アドバイザー派遣事業は平成 26 年度に奄美群島広域事務組合主催で本事業を天城町役場 4 階で海津先生を中心にシンポジウムを開催しております。

今回は新たなプレイヤーの意識啓発、参加への課題等を把握するためにアドバイザー派遣申請を行いました。

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                         |
|-----------|---|-------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成 28 年 2 月 17 日（水）～平成 28 年 2 月 19 日（金）                                 |
| 場         | 所 | 徳之島町金見集落，天城町西阿木名三京集落，伊仙町阿権集落                                            |
| ア         | ド | 公益財団法人日本環境教育フォーラム 理事長 川嶋 直氏                                             |
| バ         |   |                                                                         |
| イ         |   |                                                                         |
| ザ         |   |                                                                         |
| ー         |   |                                                                         |
| 参         | 加 | 者                                                                       |
| 計         |   | 18 名                                                                    |
| スケジュール・方法 |   | 【1 日目】天城町 観光地案内<br>【2 日目】徳之島町集落案内プログラム、天城町林道案内プログラム<br>【3 日目】伊仙町散策プログラム |

### (3) アドバイスの内容（議事録）

金見集落、三京集落ともにエコツアーを行うにあたって、そのプログラムを体験した人に「どうなって欲しいのか」、「何のために行っているのか」を明確化することが必要だとアドバイスをいただきました。

例えとして、プログラムを実施して「徳之島が豊になることが目的です。」など目的をしっかりとすることでプログラムの伝え方も変わってくるとのアドバイスでした。

また、現状は開始したばかりということで島外者向けだけではなく島内の住民を対象に考えて行うのも先駆けて良いかもしれないとのご意見もいただきました。

そして、もっとも大切なことは体験を行っていただいた方々からの感想をもらうことが今後のプログラムをよくするためにもっとも必要であるとアドバイスいただきました。

伝えるための材料は多いと感じたので、誰に対してどのように伝えたいのかを、今後しっかりとプログラム化していくことが必要だとのことでした。

今回、自分たちが行っているプログラム以外の集落の案内を見ることが出来たため、今回のように他の地区のプログラムを各々が見ながら成長していく方法も大事だとアドバイスをいただきました。

懇親会では、金見集落のソテツトンネルの活かし方や三京集落のオキナワウラジロガシの板根の活かし方などの案もいただき、中でも案内者の方々が基本的なことで聞いてびっくりしていたことは、「案内者（話し手）は太陽をみてしゃべるのが基本です。」とのアドバイスでした。これまでは無頓着だったと反省もしておりました。

今後も徳之島三町協力体制のもと、今回のアドバイスを活かし改善していけるよう取り組みたいと思います。

#### 【状況写真】



金見集落



三京集落



阿権集落



天城町役場会議室

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

今後の各プログラム実施のための自信につながり、またこれからプログラムを行うために必要なことを学べたと思われる。

今後も今回のような取組みを行い少しずつプログラムのレベルアップを図りたいと思います。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

定番となるメニューを早めに作り上げていくことが必要だと参加者にも分かっていただけたと思われる。今回プログラムを行った皆様が先進者として取組みを行っていくことに期待したい。

### 3) 今後の取り組み

今回実際にアドバイザーに来ていただき参加者と意見交換をすることにより、参加者からも、また来ていただいてアドバイスをいただきたいとの声もあり、現状から少しずつ改善し今後エコツーリズムが徳之島全体に浸透していけるような取組みが必要だと感じました。

今後もいろいろな事業等でアドバイス等をいただきながら少しずつ前進していければと思います。

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

ほとんどは、上記に記載しております。

アイスブレイクの方法を説明していただきましたが、自然を相手に出来るプログラム形式のものが多く、参加者も次回より試してみたいとの意見も多数ありました。

また、体験の感想の際に、仕事についての考え方を少し話していただきましたが、「月に 15 万円の収入が必要なら、月 5 万円の仕事を 3 つ行えばよいのでは。」との話があり、仕事の少ない徳之島においてこの考え方はとても参考になりました。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

川嶋 直氏（公益財団法人日本環境教育フォーラム 理事長）

### 1) 地域における取組の現状と取組

#### ①現状の取組

奄美地域広域でエコツーリズムへの取り組みを始めたところ。「エコツーリズム推進法に基づく全体構想認定」に向けてもその途上と聞いています。（詳細：どの段階にいるのかは確認していません）

徳之島の3町（天城・徳之島・伊仙町）それぞれで、ツアー受け入れに向けて具体的なツアープログラムを模索中。ただ「あまみシマ博覧会」というプログラム広報誌には現在15の体験プログラムを掲載しており、「あまみシマ博覧会」経由でいくつかのツアーへの申し込みを受けている模様。エコツーリズム推進の協議会・エコツアーガイドの協議会とも組織されているが、まだ実態としてのツアープログラムは試行段階という感じであった。

#### ②課題

徳之島へのマストツーリズムを含めた観光自体がまだ大きく産業化されていない現状なので、「マスをエコに変える」というより、新しいエコツアーのお客さんをゼロから発掘するという印象を受けた。それはそれである意味やりやすい状況とも言える。白いキャンバスに絵の具を塗るほうが、すでに色の付いているキャンバスに色を塗り直すより簡単だし、より綺麗に塗ることが出来ると思うから。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

今回は天城町の金見（かなみ）集落で歴史・文化誌を巡るツアー、同じく天城町の三京（みきょう）集落で自然の魅力に触れるツアー、さらに伊仙町の阿権（あごん）集落で地域の暮らしを巡るツアーを体験させていただいた。

金見：ソテツのトンネルには大きな魅力を感じた。400年ほど前から畑の境界に植えられたソテツが素晴らしいトンネルになって、迷路のように数百メートル広がっている様子には非常に魅力を感じた。

三京：自然観察会という感じのツアーだったが、奄美地方の自然環境に日常的に触れていない環境客には新鮮なものも多いと思う。今回はむしろツアー終了後にガイドを務めた区長さんの実家でいただいた、白玉餅・インギユム・タンカン味のシフォンケーキ・薬草茶などが素朴で美味しく、そちらに魅力を感じた。

阿権：ツアー起点の「300年のガジュマル」が圧倒的な存在感。その他陶器の便器も、石垣も全て私有地の中にあるものを開放していて、その仕組みを作った町に驚きを感じた。案内の内山さんも非常にガイド慣れしていて、まるで「ブラタモリ」の実体験をしている感じだった。また、ツアー終点でいただいた昼食（ワンプレートランチ）は絶品で、食後の泡ほうじ茶（ふり茶）など、「体験出来る食」の要素もあり、阿権は徳之島のエコツアーのトップランナーという印象を受けた。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

そもそも何のためのエコツアーをするのか？について皆で様々な方向性を出し合って確認することが大事ではないか。

- ・ ツアーをすることによって、どんな状況が生まれることを望んでいるのか？この町が・島が・自分たちがどうなりたいたいのか？このことをひとつにまとめなくても良いので、島民（エコツアー関係者）で意見を交換するべきではないか。
- ・ ツアーの対象者が誰なのか、漠然とではなく、いくつかの可能性を明確にして、その対象者に、ツアーが終わった時点でどんな心持ちになって欲しいのかを明確にイメージしたら良い。
- ・ ツアーのプログラム（組み立て）を意識すること。（モデルプログラムを作ってみること）
- ・ 町をまたいで、あるいは集落をまたいで、お互いにプログラムを見せ合い、お互いに率直な感想を言い合うことを積極的に進めて、それを習慣化したらどうか。
- ・ プログラムを成長させるためには、プログラム終了時に参加者から上記フィードバックをいただくことやアンケートを書いていただくことが重要。
- ・ アンケートには必ずしも本当のことは書いてくれない。良い方法は参加者に「どんな些細な事でも良いので気付いたことを書いて欲しい。可能であれば改善提案も書いて欲しい」「このアンケートが私達の成長を助ける重要な情報になるので、どうぞ率直に書いて欲しい」などとお願いをして、ネガティブな情報を積極的に集める。
- ・ 山梨・清里のキープ協会という施設で参加体験型の教育プログラムがどのようにして育ってきたのか、写真を見ていただきながら説明した。
- ・ その他、ガイドに関する細かいアドバイスは2日目夜の懇親会の席で伝えた他、別途書面で提出する約束をしている。

#### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

##### ①全体構想への取組状況について

すでに奄美地方全体で認定への取り組みを始めている。

##### ②全体構想策定への意向について

(上記)

##### ③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

何よりも具体的な実践例を1つでも多く積み上げ、ツアーそのもの&ガイドの経験知を高めてゆくことでしょう。

#### 5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

3町それぞれの取り組みを行っているが、それぞれの担当者がチカラを合わせて取り組みを進めていると感じた。また、同じ町内でも集落毎の取り組みやその魅力（人・自然・文化・歴史）をお互いにまだ知らない部分も多いようなので、相互にツアーを実施して、まずは町民を対象にしたツアーを数多く実施し、そこで相互理解を図るとともに、お互いのプログラムやガイドの技量も高め合うような試みから始めたら良いのではないかと思った。

## 3-16. 南大東村教育委員会（沖縄県南大東村）

### (1) アドバイザー派遣申請の背景

#### ●地域の概要

【人口】 1,285 人、世帯数 665 戸（平成 28 年 1 月 31 日現在）

#### 【地勢・面積】

沖縄本島の東方海上約 360 km、北緯 25 度 50 分 47 秒東経 131 度 14 分 23 秒に位置し、北に 8 km 隔てる北大東島と相対し大東諸島と呼ばれています。島は、標準的珊瑚環礁が隆起し、東西 5.78 km、南北 6.54 km 短楕円形で海岸線から内側に環状に露出した岩石地帯で砂浜は無い。島全体は、二重 3 重に防風林が設置され耕作地を囲み、山は無く、島は平坦で一番高い所でも 78m で、島の各所には鍾乳洞が点在し、中央部には 47 ha ある大池を中心に自然の池が散在している。島の総面積は 30.57k m<sup>2</sup>でその 6 割が農耕地となっている。

#### 【気候、自然】

気候は、典型的な亜熱帯海洋性気候で年間平均気温は 23.4 度と割合温暖で冬季は北東季節風が、夏季は南東季節風が吹き気候は完全に区分されます。年間降水量は 1500mm 内外で沖縄本島や宮古島等に比べ少ない。夏から秋にかけての台風シーズンには島民は天気予報に耳を傾け一喜一憂しています。

南大東島は動いている、約 4800 年前にフィリピンプレートの上に出来た火山島が、隆起を繰り返しながら今でも年間 5 cm～8 cm 移動しています。そんな南大東島の自然は大地の下には多くの鍾乳洞やドリーネが出来、そこにカルスト地形による日本最大と言ってもいい湖沼群があります。又、ダイトウオオコウモリ（国指定天然記念物）を中心として、ダイトウヒメハルゼミ、ダイトウビロウ、国指定天然記念物で島の中央にある大池のオヒルギ群落、東海岸植物群落のボロジノニシキ草など動植物は独自の進化をとげた種が多く存在しています。

#### 【歴史】

島は、明治 18 年に沖縄県の探検により日本国標が建てられた。島は無人島で、明治 33 年（西暦 1900 年）に八丈島出身の 23 名の方々によって開拓が始まり、今年で開拓 115 年を迎えた歴史の浅い島である。開拓後は、製糖会社が経営する島として希有な歴史を歩んできました。玉置、東洋、日糖と島の経営権は変わりましたが、八丈島、沖縄各地から移住してきた人々が開拓精神を胸に島の歴史を積み重ね、豊かな自然、人情とともに、現在でも基幹産業であるサトウキビ農業を中心に、甘味資源の供給基地として栄え今日に至っています。戦後は、村政が施行され現在の南大東村が誕生しました。

文化は、沖縄県内でも特異なもので、開拓者が中心となった八丈文化、大和文化が沖縄文化とチャンプルーになり開拓 100 年の社会環境の中で熟成され、大東文化というべき独自の文化が生み出された。

#### 【観光】

開拓 100 周年の西暦 2000 年頃から 19 名乗りの飛行機から 39 名乗りの飛行機に変更されたところから徐々に、島外からの観光客が増え始めた。平成 12 年には天然記念物活用事業において「島まるごとミュージアム構想」を立案し、島の自然保護と特異な自然、文化を活かしたエコツアーの構築等、観光振興を進めようと幾つかの試みを行ってきた。

特に、10 年程前からは「島まるごとミュージアム」をコンセプトとしてエコツーリズムを推進し、祭り体験、コウモリ観察ツアーなどのプログラムを作り、島の基幹産業であるサトウキビ農業に加え、新たな産業構築の為、観光を推進していくため、村が中心となって宿泊業者、観光関係の業者を中心に、平成 24 年には観光推進協議会を立ち上げ、平成 26 年には観光協会も設立し、村全体で観光を推進する体制を整えて、食のカレンダーを活用した大東御膳のモニターツアー、鍾乳洞の整備、シュガートレイン復活事業計画など新たな試みも進んでいる。

#### 【地域資源の概要】

島の資源は、「島まるごとミュージアム」構想の際に、宝探しを行い、多くの地域資源を再発見出来ました。次に掲げる資源はごく一部です。

自然資源・・・海、台風、鍾乳洞、ダイトウオコウモリ、大池を中心とした湖沼群、植物群落、その他固有の動植物

産業遺産・・・旧ボイラー小屋（日本近代遺産登録）シュガートレイン、神社、開拓碑等

文化遺産・・・大東太鼓・大東鮎を中心とした食文化、海の中のプール・ラム酒

最後に最も大切な資源は、人です。大東島の人達は、開拓精神を胸にこれまでいくつかの試練や苦労を重ねて、この島を作り上げて決しました。しかし、その歴史は浅く 100 年前後であり、これから改めて歴史を作り上げていく段階の島です。

### ●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

南大東島は、これまで「島まるごとミュージアム」をコンセプトに、エコツーリズムを推進しながら、基幹産業であるサトウキビ農業に加え、新たな産業として観光産業を推進、発展させるため、平成 24 年度に観光推進協議会を設立した。また、観光と地域活性を図るアイテムとして平成 26 年には、「南大東食のカレンダー」も完成した。それに伴い、食のカレンダーを活用し、観光客に対して島でしか味わえない南大東御膳などを食べてもらうモニターツアーなども実施した。また、平成 25 年度に活用させて頂いたアドバイザー事業での提言により、島に訪れる観光客はマスのものから個人的な観光に変化して行くだろうという共通理解が出来た。同時に、南大東島の食文化の大切さも再認識出来、地産地消という認識も強まった。最近では、地元野菜を利用した学校給食のメニュー作り、島内小売店での地元野菜の販売なども行われるようになってきている。

また、平成 26 年には観光協会が中心となって観光推進計画も策定し、基本戦略として「エコツーリズム推進」を第 1 に掲げて、観光推進を行っていくことが示された。

しかし、課題として、南大東島は、これまで特有な自然、歴史、文化などを中心として、マスの観光で、大手旅行社等と提携したメニューを提供する観光が主で、観光がこれから新たな産業として成り立っていくためにはなにが必要かということで自然、文化、歴史を凝縮できる食に注目をした。しかし、マスの観光が中心だけに、今後は増えると考えられる個人観光客への対応等も含めて、島で今後の食の新たな開発、それを案内するガイドの知識、運営力などが大きな課題となっている。

以上のような課題等をクリアするためには、エコツーリズムの基本である地域密着型観光は大変重要になってくると考えている。また、国は、地方に対して地域創生のため新たな特色ある取組を行うよう促している。そこで、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣を活用させて頂き、今後の観光の発展と地域活性化を図るため、特色ある取組として「食のカレンダー」等など島の資源を活用し、発展的な展開と方向性を示したい。

また、特色ある観光メニュー、特産品などのコンセプトを確立して、地域ブランド開発のヒントとしたい。

## 活動状況の写真



料理講習会



完成した大東御膳



文化の体験ツアー（祭り体験ツアー）  
黒い半被着用の方が、観光客  
その年の9月22日23日に行われる  
豊年祭へ参加するツアー



関係者を招いて  
3か月に1回開かれる  
新たなメニュー作りの試食会の様子



子ども達による体験事業



サトウキビ刈と黒糖作り

## (2) アドバイザー派遣の実施概要

|           |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----------|---|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 日         | 時 | 平成 28 年 2 月 18 日（木）～平成 28 年 2 月 21 日（日）                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 場         | 所 | 沖縄県南大東村                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| アドバイザー    |   | 北海道大学 国際広報メディア観光学高等研究センター 特任教授<br>真板 昭夫氏                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 参加者       |   | 計 28 名                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| スケジュール・方法 |   | <p>【1 日目】村の取組等のヒアリング</p> <p>【2 日目】南大東村担当者と現状について確認、南大東村観光協会との会議及びアドバイス、南大東村商工会の取組と担当者へのアドバイス、意見交換、視察（シュガートレイン復活予定地、西港ボイラー小屋復活予定地、星野洞（鍾乳洞）、南大東漁港及び漁業組合）</p> <p>【3 日目】視察（天然の海岸プール、バリバリ岩、特別鳥獣保護区の大池を中心とした自然資源の視察、文化遺産の神社、島まるごと館（ビジターセンター）、展望台など観光施設等）、生活改善グループの活動状況、食のフェノロジーカレンダーについての説明、役員とこれまでの活用方法、現状、そしてこれからの活用方法についてアドバイス等、意見交換</p> |

## (3) アドバイスの内容（議事録）

### 1) 役場・観光協会

- ・ 年間を通して、村内外のイベントに参加して観光PRを行ったが未だ南大東島を知っている人が少ない。
- ・ 食のフェノロジーカレンダーを参考に、大東御膳を開発し、150 食のモニターを実施し島の食文化を語る上での雰囲気作りは出来た。
- ・ 3 年後には、産業遺産であるシュガートレインを復活し運行する予定である。
- ・ 島の特産品等をどのように販売し、販路拡大を図っていくか。
- ・ 観光スポットの島まるごと館の活用方法、島内でのメニューはあるが、人材不足なのか出来るときと出来ない時がある。
- ・ 飛行機運賃が高くても、訪れて良かったと満足する観光を提供する方法は何か。

#### <アドバイス>

- ・ 沖縄観光はブームで、観光客は多いが、南大東島のイメージが本島等で表現する場合他の島々と一緒になっているので、何で行く、何を見に行くというPRが足りないのではないかな。
- ・ この島には次の3つの特色がある。産業（サトウキビ農業）・自然（海洋島として特徴）・歴史と生活で、一見ありきたりであるが普通と違うのは淡水レンズ(池を中心とした地形)がキーで、そこから生み出された、サトウキビの開拓の歴史、沖縄大和のチャンプルー文

化等の特徴を活かして、キャッチコピーを考えて行く話し合いを行う体制を整えてはどうでしょう。

- ・ シュガートレインの復活は、大変大きなチャンスであり、観光の起爆剤にはなるが、当たり前に乗るだけでなく、そこにいかに付加価値を考えていくことがポイントである。
- ・ エコツーリズム推進協議会を作るのはどうか、そうすると環境省やエコツーリズム協会などが情報を発信してくれるとともに、人材育成、ツアー開発等が行なえる。
- ・ この島では、人材不足でガイドだけで食べていくのはむずかしいと思いますので、副業をすることを考えて人材を確保する方法を行ってはどうでしょうか。
- ・ 魅力を創れば、観光客は来ると思います。魅力の発信、ストーリーを創る、役場に頼らないマネジメント、資源の洗い出し、活用方法など差別化のコンセプトを考えて話し合い、勉強会をやっていくことが必要だと思います。

## 2) 商工会

- ・ 平成 22 年度からブランディング事業を実施し、次の事業を行っている。
  - 新造船（だいとう）で行く船舶モニターツアー、地域通貨事業、駅伝大会モニターツアー
  - 観光推進を図るため、村長・商工会長が国内の旅行社へ島の P R 活動を行ってトップセールス事業を行いました。
- ・ 観光推進計画を作成し、南大東島の観光客を増やし、質を高める作業を行っている。
- ・ 年々観光客は増加傾向ではあるが、消費は低迷が予想され活性化対策が必要である。
- ・ 各旅行業者から要望、指摘
  - 他の地域と比較して目玉になる強みがほしい。
  - 島の一番のポイントは、孤島の強みを活かしたアクティビティが重要
  - 離島商品のニーズが増えると今後予想される
  - 価格競争にならない付加価値の高い商品作りが必要、期間限定の食などあればいい。

### ＜アドバイス＞

- ・ 旅行業者にトップセールスも良いが、島でこういうツアーやりますので、貴方お客さんつれて来てくれませんかという方が良いと思う。それは、島の人達が関わって作った物なので、島の人間が自慢できるもの、仲間作りから出来た結晶だからです。
- ・ 島のブランドは顔である。ブランドには次の 3 つのことが必要である
  - 有史・由来性、どうして、歴史
  - 道具立て 地域に由来する材料、技術
  - 場の設定 こういう環境、本家本元の生誕地

以上の条件を満たすとブランドは定着し、ロングセラーになる。

- ・ 商品によって思わせぶり、島に行きたいことを考えさせるプランの戦略を立てる。
- ・ 誘客から商品作りに至るまでの総合的戦略を立てる組織として DMO（観光まちづくり）を立ち上げてはどうか。たとえば、航空運賃が高いではなく高くても魅力ある商品をマネジメントして行くことが必要ではないか。

### 3) 食のフェノロジーカレンダーについて

- ・ カレンダーを活用して学校給食の材料を調達している。又、学校での食育の授業にも活用している。
- ・ 漁業関係もこれから活用が必要だが難しいところがある。
  - 観光用のカレンダーではないか。これからどう活用して行くか。

#### ＜アドバイス＞

- ・ この食のカレンダーは、島の人に向けて作成されたものであり、子ども達へ食文化がサトウキビ農業と結びつき関連していることを学ぶことが出来ると思う。
- ・ 観光の醍醐味は、食事と人であり、この食のカレンダーは、訪れる方に読み取ってもらい、文字に表せない観光のアイテムとして利用できる。
- ・ 季節ごとにメニュー、レシピ集を出して、商工会、観光協会などと連携して新たな商品、特産品も含めて、食の開発も可能ではないでしょうか。
- ・ カレンダーの改良も必要な部分は改良して、学校給食の料理、島の特徴であるチャンプルー文化、歴史がこのカレンダーに表れるようにする。大東島は自慢（PR）が足りないもので、この食のカレンダーが一つのツールになる。

### 4) 視察時

#### ＜アドバイス＞

- ・ 西港ボイラー小屋は、シュガートレイン復活に向けて重要なポイントになる。
- ・ 島まるごと館の運営について、もっと活発にできるように関係者同士の連携、話し合いは大切である。
- ・ 大池を中心とした自然の資源は、これからも大切にして活用してほしい。

#### 【記録写真】



ホテルにて打ち合わせ（日程・資料の確認等）



観光協会にてのアドバイス意見交換



商工会にてアドバイス意見交換の様子



生活改善グループ代表との意見交換の様子

視察の様子



島まるごと館（ビジターセンター）  
活用の様子



自然資源大池の展望台

## (4) アドバイザー派遣実施の効果

---

### 1) 参加者や関係者に与えた効果

今回は、全体的な講演ではなく、個々に行っている事業者、関係者に対してアドバイスを頂いた。これまでは、それぞれバラバラに活動し、多くの取組を行ってきましたが、今後は、お互いが共通理解し、村全体、地域全体で取り組むことの大切さを学びました。

- シュガートレインの復活は、地域全体がまとまるいい機会になる。
- 航空運賃が高くても、いい商品、魅力ある商品を作れば観光客は誘客出来る。
- どこにでもある村のPR方法でなく、特徴をどう工夫するかヒントを頂けた。
- 人材育成について、副業という考え方を知ることができ今後の展開に活かしたい。
- 島のブランドは、住んでいる人達が作り出していくということを学んだ。
- 食のカレンダーをツールにして観光客誘致に活かすことが出来る。
- 地域活性化は自分たちの自慢をどれだけ多く見つけていくかが大切である。

### 2) 今後、期待される効果（具体的な活動の展開など）

現在、村では地域創生として更なる交流人口の増を目指して、幾つかの取組を行う計画を作成中です。その中、これまで行ってきたエコツーリズム推進をさらに進め、発展させて、その理念を具現化して地域活性化に活かしていく予定です。

今回のアドバイザー事業における、貴重なアドバイスは、これまでそれぞれで行ってきた事業の取り組みを見直し、お互いが連携して、話し合いの場を設けるきっかけになることは間違いないと思います。

これまで、本村のエコツーリズムの推進は10年近くになり、それぞれの思いでツアーの開発・特産品作りなど行ってきたおり、エコツーリズム誕生期間としての第1期が終了したと思います。これからは、村の地域活性化のためにもエコツーリズムを発展させ、進化させるために新たなエコツーリズムの推進を考えて行く発展の時期としてとらえたい。

### 3) 今後の取り組み

役場、観光協会、商工会が中心になりエコツーリズム推進協議会を立ち上げるように連携し、努力して行きたい。シュガートレインの復活事業を好機ととらえて、新たなツアーの開発、特産品開発など地域全体で取り組んで行く体制を整える。また、食のカレンダーをツールとして、地元の農家、子ども達、地域全体を巻き込み、新たな交流人口の増に向けて活用していく。さらに、島のブランド化に向けて、常に話し合える体制を整えて行く。村で現在作成中の地域創生のプロジェクトの中にも、エコツーリズム推進の考え方を取り入れていくよう委員会などで検討していく。

## (5) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

---

### 1) 参考となった事項

PRの方法、ふるさと納税について

- ・ 長崎県平戸市は、ふるさと納税が日本一であり、世界遺産登録に向けて、ザビエルがキリスト教を広げた拠点だということを徹底して宣伝している。

#### マネジメント方法

- ・ 東京都檜原村のふじの森が取り組んでいる、レストランの運営について、島では別の方法でそれを参考に出来ると思った。

#### ジオパークの考え方

- ・ 北海道室戸岬のジオパーク、町民一人一人がその意味や価値を説明できる体制を作る。本村でも、自分たちの宝を自慢し、差別化のコンセプトの大切さは参考になった。

#### ラム酒の製造

- ・ 小笠原村が、なぜラム酒なのか、産業、文化が特殊な条件だからこそラム酒であり、本村もなぜラム酒かというブランディングの大切を学ぶことが出来た。

## 2) その他感想

本村は、体験ツアーなど魅力的な資源を中心として、徐々にではあるが島を訪れる人は増えています。しかし、観光客の殆どは大手旅行業者指導のものであり、これからは体験ツアーを中心に地域密着型に移行する必要性を感じました。

村のPRは、確かに他の地域に比べても不足している部分は多々あり、自分達の自慢できる物を外に向かっていかにアピール出来るか、その戦略やヒントが今回の事業で得られたと思っています。

また、これまで行ってきた食のカレンダーについては、大東御膳や学校給食などに活用され、徐々にではあるが、地産地消の意識が高まり地域活性化の一つのツールとしてさらなる活用を図って行きたい。

最後に、この事業を通して島の人達の認識が高まり、一步一步ではあるが確実に地域づくりの活性化が図られていると思います。今後は、シュガートレインの復活事業を足掛かりにして、エコツーリズム推進協議会の立ち上げに向けて地域全体で取組を行っていく。

## (6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

真板 昭夫氏（北海道大学 観光学高等研究センター 特任教授）

---

### 1) 地域における取組の現状と課題

#### ①現状の取組

エコツーリズムによる宝さがしは、村民の参加でかなり集積されてきてる。また1名ではあるがガイド業として活躍している人材も登場し、また宿泊業者でツアーを実施し、実績をあげて来ている。

#### ②課題

宿泊施設の確保、ガイド等の人材の確保、研修は急務である。

### 2) 特に魅力を感じた地域資源等

#### ①魅力を感じた地域資源

ビロウ群落に代表される珊瑚礁の海洋島の自然環境、サトウキビの歴史に関する建造物や産業遺産、大和と琉球の生活文化

#### ②上記地域資源に魅力を感じた理由

南大東島は、珊瑚礁で出来た地形と淡水レンズの構造と自然資源、サトウキビ開拓 110 年の歴史と産業遺産、琉球文化圏と大和文化圏のチャンプル文化の無形生活文化遺産の 3 大資源の融合によって出来上がった他の離島や地域にはみられない固有性が魅力を感じさせる地域資源といえる。

### 3) アドバイス（講義等）の概要

昨年度作成したフェノロジー・カレンダーの観光や食育系の活用方法、および今計画されているサトウキビトロッコ列車（シュガートレイン）の活用方法、南大東村のエコツーリズムを通じた観光推進戦略の考え方等について意見交換とアドバイスを行った。また今後南大東村においてどのような DMO を展開すべきかについてその考え方、コンセプトワークについてもアドバイスを行った。

### 4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

#### ①全体構想への取組状況について

まだ全体構想については取り組みは無い。

#### ②全体構想策定への意向について

観光協会を中心に観光基本計画にエコツーリズムの推進を掲げており、近々役場との連携において取り組みを開始する意向を持っていた。

### **③全体構想認定に向けて、今後必要なこと**

商工会、観光協会、村役場、教育委員会がまず話し合いの場を持って、今後の推進スケジュール、役割分担を確認することが必要と感じた。

## **5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）**

南大島村の基幹産業はサトウキビであるが、その存在の大きさと村民の依存度と安定性の高さから、観光によるまちづくりについては、なかなか関係者以外その推進に予算を投入することに意義を理解してもらえない現状がある。しかし、キビ産業一本から多様な産業構造への転換による若者定住と人口増加が課題となっていることも事実であり、徐々に観光産業、とりわけエコツーリズムによるまちおこしに、宿泊業や、商工会、婦人会等の間で期待が高まってきていると感じられた。

#### 4. アドバイザー派遣報告会

---



## 4-1. 開催概要

アドバイザー派遣事業を通じて行われた取組を共有するため、事業報告会を開催した。本報告会では、アドバイザー派遣を活用して取組を行った3地域、現地に赴いていただいた3名のアドバイザーから、地域の取組や課題、アドバイザー派遣を通じて目指したこと等を報告していただいた。

|   |   |                                                |    |
|---|---|------------------------------------------------|----|
| 日 | 時 | 平成 28 年 3 月 10 日(木) 14:00～17:10                |    |
| 会 | 場 | 環境省 22 階 第 1 会議室<br>東京都千代田区霞ヶ関 1-2-2 合同庁舎 5 号館 |    |
| 参 | 加 | 費                                              | 無料 |
| 申 | 込 | ホームページ、FAX、メールにて申込を受付                          |    |

### 【プログラム】

|             |                                                                                                                                                                                                                     |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 14:00       | 開会                                                                                                                                                                                                                  |
| 14:00～14:10 | 【挨拶（報告会開催にあたって）】<br>環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室                                                                                                                                                                          |
| 14:10～15:10 | 【地域からの報告】<br>(1) 一般社団法人立山黒部ジオパーク協会      参与   小谷   智志氏<br>(2) まるごとくぜんたかた協議会                      事務局   越戸   浩貴氏<br>(3) 奈良県川上村 地域おこし協力隊                      竹中   雅幸氏                                                 |
| 15:10～15:20 | 休憩                                                                                                                                                                                                                  |
| 15:20～16:20 | 【アドバイザーからの報告】<br>(1) アイ・エス・ケー合同会社                      代表   渡邊   法子氏<br>派遣地域：岩手県雫石町<br>(2) 公益財団法人日本自然保護協会                      参事   横山   隆一氏<br>派遣地域：岡山県真庭市<br>(3) 株式会社知床ネイチャーオフィス代表取締役社長   松田   光輝氏<br>派遣地域：北海道遠軽町 |
| 16:20～16:30 | 休憩                                                                                                                                                                                                                  |
| 16:30～17:10 | 【ディスカッション】<br>モデレーター：日本エコツーリズム協会                      事務局長   辻野   啓一氏                                                                                                                                               |
| 17:10       | 閉会                                                                                                                                                                                                                  |

(司会進行 株式会社マイルポスト)

## 4-2. 議事概要

### (1) 開会の挨拶

**環境省 自然環境局国立公園課 国立公園利用推進室 室長：田邊 仁氏**

- ・ 本事業は平成 17 年より実施しており、エコツーリズムに取り組む地域への支援という形で、地域ごとの自然の特性や取組の状況に応じて専門家を派遣し、アドバイスしていただくものだ。
- ・ 今回は 3 つの地域と 3 人のアドバイザーの方に各地域の報告をいただき、皆様の質問に基づきディスカッションを行う。この貴重な機会に、活発な議論をしていただきたい。



### (2) 地域からの報告①：富山県黒部市・入善町の取組

**一般社団法人 立山黒部ジオパーク協会 参与：小谷 智志氏**

#### 1) 黒部市・入善町の現況について

- ・ 2014 年 8 月日本ジオパークに認定された。日本のジオパークの中では唯一民間が運営する組織。9 つの自治体と富山県からの支援を受けているが、財政的には脆弱なのが実情。
- ・ ジオガイド養成講習を 121 名が受講し、そのうち 35 名がガイド登録をしている。立山黒部ジオパーク協会内にジオツーリズム部会があり、ツアーの企画をしている。直近ではモデルコースの作成やモニターツアーの企画を手がけた。しかしながら、ツアーの企画・販売を協会側が全面的にやっているわけではない。



#### 2) アドバイザーからのアドバイスの内容

- ・ 持続可能なエコツーリズムの三本柱は①保全②ビジネスとして成立するのか③エンターテインメント性をどこまで高められるのかの 3 点。持続可能なエコツーリズムのためには、自然の仕組みをベースにエンターテインメント要素を取り込み、ビジネスとして成立させる必要があるという話が印象深かった。エコツーリズムがもたらす効果は持続可能であることを大前提に、それをお客様にも伝えて行くことが必要。体験型ツアーで知識だけを伝えるのではなく、楽しんでもらう。
- ・ 参加者の満足度を上げるには、アンケートを実施し、データを蓄積・分析し、マーケティングをする上での数字を押さえることが大切（勘でやるのではない）。インバウンド対応の強化は、地域別（アジア、欧米）それぞれの特徴を理解した上で行う。
- ・ ガイドプログラムの企画、販売には、まず市場を知ることが大切で、どういう人が来ているのかを把握し、楽しんでもらえるコンテンツを探す。観光客の動きや行動を観察するという話が印象的だった。経験値の高いアドバイザーから実践的なお話を伺えて、黒字化に向けて長い道のりではあるが粘り強くやっていきたいと感じた。

### (3) 地域からの報告②：岩手県陸前高田市

まるごとりくぜんたかた協議会 事務局：越戸 浩貴氏

#### 1) 陸前高田市の現況について

- ・ 陸前高田はもともと観光地ではなかったところに、たくさんボランティアが来るようになり、多くの人に興味を持ってもらえるようになった。この陸前高田に興味を持ってくれる人を資源に、5年10年先を見据えて街を盛り上げていく組織をつくろうということで、交流人口増加のためのワンストップの総合窓口としてまるごとりくぜんたかた協議会を設立。
- ・ ようやく2年くらい前から陸前高田をどのようなインフラ整備で復旧させていくかが盛んに議論されるようになった。高台造成が進まないと家が立てられないという一方で、本当に安心な構造なのか、行方不明者がまだいるため埋め立てに反対する声もあり、ジレンマが生じている。
- ・ 交流人口増加のための取組として、社会人研修、企業・行政研修・大学授業、課外活動、中高生向け教育旅行のコーディネートを行う。震災ガイド、学習、海のものが食べられるといっても、隣の大船渡や気仙沼と横並びで特徴がない。陸前高田は観光・人材資源が少ないため、「学び」の価値をとがった形で推進していくことが重要と考える。
- ・ 『震災で大変になった町』という認識でなく、『社会課題の先進地』として認識してもらおう。誰かの町の苦勞としてではなく、自分の町、自分の将来にも関わるであろうという目線で学習し、何かを持ち帰ってもらいたい。



#### 2) アドバイザーを受け入れて

- ・ 民泊の受け入れ態勢の本格始動に向けて、民泊推進の事務局になる人間が安全管理指導責任者、衛生管理指導責任者の資格取得の講座を受講し、受け入れ協力者との懇談が必要。
- ・ 中高生向けの教育旅行事業では、もっと学びの深いことをしたいという理由で陸前高田が選ばれている。民泊、交流を通して生の声が聞こえ、顔が見えるということから、問題を生徒たちが自分に関わることで捉えやすい。教育旅行といえば陸前高田、京都や広島など他の人気の修学旅行先と並ぶ顔としていきたい。
- ・ 被災地の“かわいそうなイメージ”を払しょくし、支援を受ける町と同時に、何かお返しができる町にしていきたい。保守的にならず攻めの姿勢を大切にしたい。そのためさまざまな世代、属性の市民を取り込んでいきたい。

#### (4) 地域からの報告③：奈良県川上村

##### 川上村 地域おこし協力隊：竹中 雅幸氏

##### 1) 奈良県川上村の現況について

- ・ 奈良県と三重県の境にある川上村は、吉野林業の発祥地であり、面積の95%は杉とヒノキの山林。吉野杉の林には400年前に植えられたという記録の残っている木もあり、日本古来の森林の姿が見られる。この森を『歴史の証人』という形で村が買い取り、水源地の森づくりを目標に平成11年から保全している。この林全域のユネスコ申請を目指している。
- ・ 平成8年の『川上宣言』で謳われている「自然と一体となった産業」こそ、これからの川上村にとってのエコツーリズムと考える。現在までに取組んできた水源地の森ツアーや伐採見学ツアーにも特色が見られる。しかし「ふれあい」という色合いが強く、生業として運営されているものがないのが現状。
- ・ エコツアーガイド経験者と一緒にエコツアーのプログラムを作っているが、旅行会社にいた経験も短いため、ツアー運営・集客・収益性のノウハウに乏しい。昨年度15回開催したプログラムにはのべ122人が参加してくれたが、協力隊の予算に頼っている部分があり、生業としてエコツアーの運営が成立しているとは言えない。エコツアーを生業として成立させるための道筋と、川上村としてエコツアー・ツーリズムをどうしていくか示してもらうためにアドバイザー派遣を申請した。



##### 2) アドバイザーを受け入れて

- ・ 今回のアドバイザー派遣には、2名のアドバイザーが来村し、原生的な自然とどう付き合っていくべきか、山と人との関わりという点で、どのように地元の人と付き合っていくべきかをプロ目線で話を伺った。プログラムの組み立て方、売り方など日々プロとして実践していることを教えてもらった。
- ・ 二人のアドバイザーが共通して言うことは、川上村には5日間過ごせるくらいの資源があることは分かったが、その芯が何なのかというのが見えてこないのが大きな課題ということが指摘された。これにより、自然環境を「ふれあい」でなく「産業」として位置付けていくことが必要ということが分かった。
- ・ エコツーリズム全体構想は今すぐ取り組むということではなく、川上村にあった既存要素を束ねるときにフレームワークとして捉えるのが有効ということが整理できた。今後の課題として全体構造の作成を考えていきたい。

## (5) アドバイザーからの報告①

**アイ・エス・ケー合同会社 代表：渡邊 法子氏**  
**派遣地域：岩手県雫石町観光商工課**

### 1) エコツーリズム推進アドバイザーを呼んだ目的

- ・ 雫石町は総面積の7割が森林で、動植物の多様性に満ちている。その中には全国的に知られエコツーリズム界でも賞を受賞する小岩井農場を有する。雫石町での第3次産業（サービス業）に従事している人の割合は35%をこえ、経済面でも70%以上を支えている。観光業が定着しやすく、エコツーリズムには適した地域だ。
- ・ 地域には山岳ガイドや自然観察ガイド、または案内できる人という人的資源は30人ほど存在し、ツアーの催行に向けて地権者との交渉や環境作りという活動に取り組んでいる。その上で、エコツーリズムとは何なのか、この地域でエコツーリズムを広げ、どういうことをしたらいいのか、また、地域住民を巻き込んでエコツーリズムにどのように取り組むべきか、きっかけとなることがあれば聞きたいという要望だった。



### 2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・ 胎動期の雫石で、エコツーリズムとは何なのかを一緒に考える機会となればと思い、これまでエコツーリズムに従事してきた人と、これから携わりたいと思う人が知り合ってもらう機会を設けた。案内人こそエコツーリズムの付加価値であることを互いに認識し、共有できる枠組みのようなものを作れるようにヒアリングを行った。
- ・ 今回の派遣で体験したスノーシューウォークには、地元役場職員も一緒に参加した。初めてスノーシューウォークを体験するという職員の参加で、森に生息する動物のことなど、地元の人ですら知らない感動があることがわかった。エコツーリズムの顧客というのは必ずしも遠方から来た人ではなく、その地域に住む人もお客様と考える必要がある。事実、雫石町の観光データによれば年間200万人の訪問者のうち50%が県内からで、大半がマイカーで来て屋外での体験を目的に来ている。このようなポイントから、商圈は県内にも広げることができて、地域資源を紹介するツアーには、地元の人に体験してもらってこそ、その地域ならではの資源や歴史を次世代に伝えていく土壌が出来上がると伝えた。
- ・ 地域のご老人がその地の方言で地形や地名から来る物語を小冊子にまとめる語り部の会も開催されている。エコツーリズムの商品は自然の中を歩くことだけではなく、地域のことを理解することも素晴らしいエコツーリズムの商品であると伝えた。

- ・ 持続可能なエコツーリズムを事業として成立させるのに必要な資源は整っているが、全体をコーディネートするという役割だけが整っていない。それぞれの従事者や組織が一つの土台で水平的なネットワークを構築すれば、立派なエコツーリズムが実現できる地域だと確信した。今後この地域が全国の模範となるエコツーリズムの流通を示すことのできる取組を実施できると期待したい。

## (6) アドバイザーからの報告②

**公益財団法人日本自然保護協会 参事：横山 隆一氏**

**派遣地域：岡山県真庭市（蒜山エコツーリズム推進事業実行委員会）**

### 1) エコツーリズム推進アドバイザーを呼んだ目的

- ・ 岡山県真庭市は「里山資本主義」という言葉を使って、バイオマスエネルギーの開発や真庭市の林業を薪炭林として、エコな活動に取り組んでいる。明治頃、軍馬を育てるため森を切って草原にした。今ではジャージー牛というおいしい牛乳を出す乳牛の飼育がされている。ブナや栃の森もあり、日本海側の要素が強くみられる。場所によってはサクラソウの大きな自生地もある。古くから温泉が湧き出る川もあり、世界最大の両生類オオサンショウウオも生息する。最近ではB級グルメ「ひるぜんやきそば」が有名。山から取ってきた山葡萄の苗を育て、山葡萄 100%のワイン作りにも成功している。
- ・ 蒜山地域におけるエコツーリズムは、平成 16 年から大山隠岐国立公園の一角をなす自然豊かなエリアで準備を始め、組織設立やガイド養成をしてきた。エコツーリズム資源も揃って、一見温和に取り組まれているように見えるが、実際のところ是对立している。事務局機能は設立後行政から地域の観光協会に渡されたが、観光協会設立当初の規約や構造は実効性に乏しく、組織が分裂し平成 25 年から休眠状態になっている。エコツーリズム立ち上げの頃から地元の公務員・教育活動に携わる方々が中心となってやってきたガイドクラブは、どちらかというとボランティア色が強い。一方 I/U ターンで戻ってきて「外の目」を持つ人たちが中心となり、エコツーリズムを事業化したいと思う人たちが構成する蒜山ツアーデスクと対立しているのが現状。行政はその間で板挟みとなっている。今回の派遣事業をきっかけに、蒜山のエコツーリズムを立て直したく、今回のアドバイザー派遣に応募された。



## 2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・ 人間が、他の人間とその下に動物・自然を隷属させて行く「エゴロジア」と、人間、動物、自然が共生する「エコロジア」という2つの図を基に、蒜山で行われているのはどちらかを議論した。また言葉の定義を見直しながらエコツーリズムを見直した。「旅」と「旅行」という言葉は普段何気なく混同させながら使っているがその意味は全く違うことを説明した。また「みる」という動作についても、漢字で表すと種類がたくさんあり、エコツアーの中で異なる種類の「みかた」を一つずつ体験することがエコツアーのプログラムになると伝えた。
- ・ 生態系サービスの持続は、ただ豊かな自然に囲まれているだけでは何も始まらないという話をした。生態系サービスの持続には取り巻く豊かな自然を活かして、またその自然をしっかりと理解しないことには持続ができない。

## (7) アドバイザーからの報告③

**株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長：松田 光輝氏**  
**派遣地域：北海道遠軽町（白滝ジオパーク推進協議会）**

### 1) エコツーリズム推進アドバイザーを呼んだ目的

- ・ 北海道で遠軽町というと自衛隊の駐屯地のイメージが大きい。遠軽町は海に面していないため、町の中心産業は農業。黒曜石の世界有数の産地であることでジオパークに認定された。しかしビジュアル的に迫力がないため、今後のブランディング方法に工夫が必要。
- ・ これまでの取組は旧石器時代の鏃に用いられていた黒曜石を資源としたツアーや、丸瀬布昆虫生態館が子供向けプログラムを実施するなど、行政機関のサポートを受けながらエコツーリズム、ジオツーリズムを展開している。エコツーリズムの下地は整っている。
- ・ もともと観光地でなかったため宿泊施設の選択肢とキャパシティが少ない。税金を使って行っているツアーがほとんどのため必要経費しか取れず収益構図が作られていない。現在担当者個人の努力が大きい面があり、後継者不足や将来的な人材不足が懸念される。この地域は遠軽町、丸瀬布、生田原、白滝村が合併してできた町で、観光協会はそれぞれの町にあるが、連携が十分にとれていないため一つの組織になりきれていないことも課題の一つ。
- ・ 今後、地域の資源を使ってジオパーク推進に取り組み、経済活性化を図りたいという希望はあるものの、どうしたいのか具体的なイメージがわからない。遠軽町はエコツーリズムで有名な場所ではないため、エコツーリズムで食べていける人を育成できるとは思えないと諦めが大きいのが現状。



## 2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・関係者はジオパークには登録認定されたがビジュアルに迫力がないためお客様が来ないのではと心配している。しかし、この地域には自然資源や歴史文化資源といった資源はあるので、ブランディングを正しく行えば十分お客さまを呼び込める地域にできると伝えた。
- ・キャットスキー、犬ぞり、黒曜石、シルキースノーといった優れた観光資源が多数ある。また個人では農家民泊、農業体験を始めるところも出てきている。このような優れた資源も手伝い、滞在型観光が可能な地域だと感じた。
- ・次へのステップに必要なのは、民間事業者が中心となってエコツアーの運営と、収益を上げられるような料金設定と収益構造の改善を行い、後継者を育成し、観光イメージのブランディングとさらなる観光資源の発掘、商品開発と販売方法を確立することが必要と伝えた。
- ・キャットスキーや雪質を考えるとインバウンド向けの商品が作れると思う。そういう人たちを呼び込んでスキーをしたりジオツーリズムをしたり、今後外国人向けに商品作りをしやすいと提案した。
- ・アドバイザー事業のメリットは、地域へのアドバイスはもちろん、合併した町で地域の人材交流の場になることだと感じた。また地域観光資源を知るとともに交流することも必要と感じた。

## (8) パネルディスカッション

### ●モデレーター

日本エコツーリズム協会 事務局長 辻野 啓一氏

### ●パネリスト

- ・一般社団法人立山黒部ジオパーク協会 参与 小谷 智志氏
- ・まるごとくぜんたかた協議会 事務局 越戸 浩貴氏
- ・奈良県川上村 地域おこし協力隊 竹中 雅幸氏
- ・アイ・エス・ケー合同会社 代表 渡邊 法子氏
- ・公益財団法人日本自然保護協会 参事 横山 隆一氏
- ・株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役社長 松田 光輝氏
- ・環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室 室長 田邊 仁氏

## 1) 2020 年東京オリンピック開催に向けて取り組んでいるインバウンド対策はあるか。

### 渡邊氏

インバウンドでもエコツーリズムでも、地元が仕組みを作って商品を買ってもらえる状態の整備、受入態勢を整えることが大事。これらが整って、プロモーションができる。また「東京オリンピック」といっても、インバウンドの舞台は日本全国であることを忘れてはならない。

### 小谷氏



富山市在住のアメリカ人の知識人に、『立山黒部ジオパーク』という日本語の「立山」や「黒部」という言葉では、欧米人は検索しないだろうということで、名前を変えた方が良いと指摘された。

インバウンド対策といっても、狙うターゲットによって策は異なる。例えば移動手段で欧米人は自ら歩き乗り物を使わないのに対し、アジア人は乗り物を使う傾向にある。そのためターゲットを欧米人かアジア人にするかでインバウンド対策は異なる。

今後はトレッキングをベースにし、キャンプ場と空港や新幹線駅とうまく連携させたいと話し合い、企画作りしたいと思っている。

## 松田氏

冬になると雪の降らない国から雪に憧れてやってくるアジア人観光客のガイドツアー利用が増える。公共交通機関が充実していない分、ガイドツアーに参加すれば宿に送迎してくれ、またガイドと一緒にいろいろなところと周れるという利点がある。また宿泊施設側がいろいろと質問されて回答に困り、ガイド付きツアー参加を促しているのもガイドツアー利用増加の理由として考えられる。

インバウンド需要増加に伴い現在の課題は外国人対応。日本人と外国人を同じツアーに参加させて2カ国語で説明すると、話せる内容も半分になってしまうため、日本人参加者の満足度が下がってしまうという懸念と、自然との接し方に慣れていない国からの人に、どのように動物にエサを与えないように伝えるかが今抱えている問題。

## 2) エコツアーのツアー料金設定の基準を教えてください。

## 松田氏

海外のエコツアーの価格や、国内の娯楽産業で1日にお客様がどれくらい使っているかも参考にできる。ただしその数値が完全に当てはまるという訳ではない。

またプロのガイドとして食べていける年収をいくらにするかによっても、料金設定は変わる。

## 3) ジオパーク申請を検討する上で、地域内での想いの共有はどのようにしているか。苦労などを聞かせてほしい。

## 小谷氏

まずは成功事例を作ることが大事。ある企業がうまくいったから、自分たちもそのようにやってみようとしていくのが大事。しかし、自治体の思いとは温度差があり、思いを一つにするというのはむずかしいと感じる。ジオパークはユネスコの正式事業になり、自治体の見方も好意的になってきている。

## 越戸氏

「震災前の陸前高田に戻しても前より良くしなければ意味がない」という共通意識はあるが、「震災前後」という時間軸の区切りで、元に戻そうとする力と発展していこうとする力が働きどこかで衝突する。何をやっても睨まれているのが実態。

多くの人を巻き込んで体制を整備することは難しい。若者が「子供扱い」されやすい中、こういうことをやろうとしてるので協力してほしい、と懐に入り案件や研修を一緒にに行い仲間になっていくというやり方をしている。

**4) 全体構想の認定を受けて変わったこと、効果が出ている例があれば教えてほしい。**

**田邊氏**

全体構想を作っただけで何か効果が出るとは感じていない。全体構想の認定を受けるメリットは国が広報の支援をすること。どのように売り込みをかけるかは自分達で考えて、支援とマッチングさせる努力が必要。

**5) 将来 I ターンを考えている。外の目で地域を見るにあたり気をつけることは何か。**

**横山氏**

「自分がよそ者だ」という意識を持つこと。よそ者の目で地域を見るときは、地域の人から学ぶ姿勢で臨む。また外から来た人間であるからこそ気付くことのできる、その地域にある普遍的なものやありふれたもの、当たり前なもの、その地域にしかないものにできるだけ気付いて地域の人に伝えるようにも心がけている。

I ターンとしてどう振る舞ったらいいかということについては、地域に溶け込んで地域社会を構成する重要な人材になっていかなければならない。また地域がそのような期待をされているならば、その期待に応えられるようにたくさん勉強していかなければならない。地域によっては若者の言動が軽んじられることもあるが、若いからといって遠慮せず、その地域にとって有益な発言・行動に精を出すことが大事と思う。



**6) 地域の魅力や楽しさを伝えるには、地道な PR が必要。何か効果的な方法や媒体があれば教えてほしい。**

**渡邊氏**

静岡県稲取には江戸時代から伝わるつるし雛があり、九州と山形にも同様の伝統がある。同じつるし雛でも、文化や歴史によって人形に込められた思いは違う。そこでこの3都市を結び3地域のつるし雛

サミットを行った。その3都市のつるし雛を発信したことで稲取には福岡と山形、山形には静岡と福岡からといった具合に多くの訪問があり、3都市それぞれにとって効果があった。

少し離れた商圈でも発信力がありそうなところがあれば交流してみるのもいいかもしれない。インバウンド誘致の点では、歴史・地形・地質などで関連性のある国と交流してみるのも効果的かもしれない。

## 7) ターゲットの絞り込みはどのようにすべきか。

### 渡邊氏

旅行会社がお客様を連れてくるところもあれば、情報発信しなければ集客人口を見込めないところもある。まずは周辺地域の人たちをターゲットにするのも、人を呼び込む一例。外からのターゲットを絞る前に、どれだけ地域の人が外から来た人に対応できるか、入山のし方や自然について語れる人を増やしていかないといけない。地域によって目的や来場方法などのデータに基づいてPRするのも必要。

## 8) エコツーリズムが流行らない理由は何か。

### 松田氏

今まではマスメディアやマスコミが発信すれば社会が動いていたが、今は口コミ（個人）が人を動かしている時代。それにあった魅力ある商品を作っていかなければ人は来てくれない。情報発信は必要だが、自然を楽しめるコンテンツを整える必要がある。また「魅力ある商品」にエンターテインメント性を盛り込むことも重要。

情報発信して広げていくためには、地域の特性を知らなければならない。そのためには他の地域も見えてみて、自分の地域の長所が何なのかを知った上で発信することが大切。

### 横山氏

そもそもエコツーリズムとかエコツアーを流行らせなければならないものなのか。自覚できる「流行」はマスメディアで取り上げられるものだけ。「流行」を「ファンが付いている」と置き換えて考えてみる。

### 竹中氏

大々的にエコツーリズムで人を呼び込んだ方が良いというイメージはない。一度にたくさんの方が来ても、それだけの人数を収容できる宿泊施設も道路もないので、適正なくらいが丁度いい。



**参考資料 エコツアーリズム推進法と環境省の関連施策について**



## 1. エコツーリズムに取り組む地域への支援

環境省では、エコツーリズムに取り組む地域等への支援策として「エコツーリズムガイド等養成事業」、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」、「エコツーリズム地域活性化支援事業」を実施しています。

### (1) エコツーリズムガイド等養成事業

#### 【エコツアーの普及、推進の中核を担うガイド及びコーディネーターを育成】

- ・ 観光協会、宿泊業者等エコツーリズム推進の要となる地域住民も対象としたガイド、コーディネーターの育成
- ・ 既存ガイド等の機能向上、連携の促進

### (2) エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業

#### 【エコツーリズムの推進に伴う地域の課題解決への支援】

- ・ エコツーリズム等を活用した地域活性化に取り組む地域に対して、有識者をアドバイザーとして派遣
- ・ エコツーリズムの推進に当たって課題の解決を支援

### (3) エコツーリズム地域活性化支援事業（交付金）

#### 【地域が取り組む魅力あるエコツアープログラムづくり等への支援】

- ・ 国が地域協議会に対しプログラムづくり等に要する経費の2分の1を交付
- ・ 1 協議会あたりの交付額の上限は1,000万円
- ・ エコツーリズムや、ジオツーリズム等に取り組む地域協議会等への支援
- ・ 地域協議会は多様な主体で構成（市町村の参加は必須）

## 2. エコツーリズム推進法について

平成 19 年 6 月 20 日の参議院本会議において、エコツーリズム推進法が成立しました。

### (1) 成立の背景

近年、身近な環境についての保護意識の高まりや、自然と直接触れあう体験への要求の高まりが見られるようになってきました。このような背景から、これまでのパッケージ・通過型の観光とは異なり、地域の自然環境の保全に配慮しながら、時間をかけて自然とふれあう「エコツーリズム」が推進される事例が見られるようになってきました。

しかし、現在は地域の環境への配慮を欠いた単なる自然体験ツアーがエコツアーと呼ばれたり、観光活動の過剰な利用により自然環境が劣化する事例も見られます。このような状況を踏まえ、適切なエコツーリズムを推進するための総合的な枠組みを定める法律が制定されました。

### (2) 法律の趣旨

この法律は、地域の自然環境の保全に配慮しつつ、地域の創意工夫を生かした「エコツーリズム」を推進するにあたり、以下の 4 つの具体的な推進方策を定め、エコツーリズムを通じた自然環境保全、観光振興、地域振興、環境教育の推進を図るものです。

- 1) 政府による基本方針の策定
- 2) 地域の関係者による推進協議会の設置
- 3) 地域のエコツーリズム推進全体構想の策定
- 4) 地域の自然観光資源の保全

### (3) 政府の取組

エコツーリズム推進法は、平成 20 年 4 月 1 日に施行し（同日、エコツーリズム推進法施行規則交付・施行）、政府は、エコツーリズム推進のための基本方針を作成しました（平成 20 年 6 月 6 日閣議決定）。市町村が作成した地域ごとの全体構想は、主務大臣（環境大臣、国土交通大臣、農林水産大臣、文部科学大臣）の認定を申請することができ、この基本方針に適合するものが認定されます。国は認定を受けた全体構想について広報に努めることや、法令の許可申請に際してエコツーリズムに関わる事業が円滑に実施されるよう適切に配慮することとしており、地域のエコツーリズム実現に関する施策を推進します。

#### (4) エコツーリズム推進法に基づく全体構想の認定状況

平成 28 年 3 月現在で、下記の 7 地域の全体構想がエコツーリズム推進法に基づく認定を受けています。

| 市町村名               | 全体構想と協議会の名称                                                    | 認定日                                       |
|--------------------|----------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| 埼玉県飯能市             | 飯能市エコツーリズム推進全体構想<br>(飯能市エコツーリズム推進協議会)                          | 平成 21 年 9 月 8 日認定<br>平成 27 年 1 月 16 日変更認定 |
| 沖縄県渡嘉敷村<br>沖縄県座間味村 | 慶良間地域エコツーリズム推進全体構想<br>(渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会及び<br>座間味村エコツーリズム推進協議会) | 平成 24 年 6 月 27 日認定                        |
| 群馬県みなかみ町           | 谷川岳エコツーリズム推進全体構想<br>(谷川岳エコツーリズム推進協議会)                          | 平成 24 年 6 月 29 日認定                        |
| 三重県鳥羽市             | 鳥羽エコツーリズム推進全体構想<br>(鳥羽市エコツーリズム推進協議会)                           | 平成 26 年 3 月 13 日認定                        |
| 三重県名張市             | 名張市エコツーリズム推進全体構想<br>(名張市エコツーリズム推進協議会)                          | 平成 26 年 7 月 9 日認定                         |
| 京都府南丹市             | 南丹市美山エコツーリズム推進全体構想<br>(南丹市美山エコツーリズム推進協議会)                      | 平成 26 年 11 月 21 日認定                       |
| 東京都小笠原村            | 小笠原村エコツーリズム推進全体構想<br>(小笠原村エコツーリズム推進協議会)                        | 平成 28 年 1 月 28 日認定                        |



平成 27 年度 環境省請負業務  
平成 27 年度 エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業 事例集  
平成 28 年 3 月発行

特定非営利活動法人 日本エコツーリズム協会  
〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-24-9 アイケイビル 3 階  
電話 03-5437-3080 ファックス 03-5437-3081  
<http://www.ecotourism.gr.jp>

リサイクル適正の表示：印刷用の紙にリサイクルできます。

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[Aランク]のみを用いて作製しています。